講座の紹介

中3 国語（共通版）を受講するみなさんへ

講座の特徴

● 〈要点がコンパクトにまとまった動画〉＋〈確認テスト〉なので、スキマ時間で国語の知識や読解力を身につけるのにオススメです。

講師からのメッセージ

● 伝えたいのは、「Let's（レッツ）感動！」
正しい日本語の読み方を身につけると、文章の内容がもっとわかりやすくなって、文章から受ける感動は、もっともっと大きくなるよ。
キミも、感動への第一歩をいっしょに踏み出そう！

宮田泰三

それでは、一緒にスタディサプリで学習していきましょう！

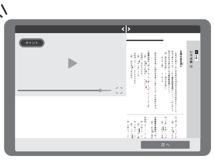
テキストの使い方

はじめに

スタディサプリは、スマホやタブレット、PCを使って動画を見たり問題を解いたりすることができますが、テキストを使うと、より学びやすく、理解しやすくなります。テキストはさまざまな使い方ができるので、ぜひ自分に合った使い方をみつけて活用してください。

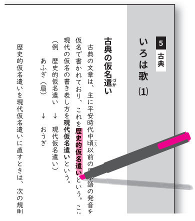
基本の使い方

ステップ1 動画をみる



※本文のある講義は動画を見る前に本文を読んでおきましょう。

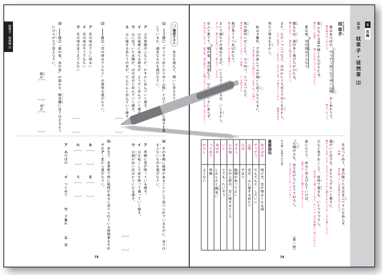
テキストはこう使う！



講師が話したことや大事だと思ったことをメモすると自分オリジナルのまとめノートになります。

ステップ2 確認テストを解く

オススメの使い方



テキストはアプリやウェブで問題を解いた後の復習や、テストに近い問題形式に取り組みたい時に活用できます。

各パートの説明

4 現代文 読解法
文学的文章　主題の捉え方

主題の読み取り

作者が文章を通じて表現しようとしている中心的な内容を主題という。

物語の主題を捉えるには、次の点に注目するとよい。

・人物を通して描かれる価値観や考え、人物の心情の変化や成長。
・出来事の展開、各場面における人物の行動。
・作品の状況設定、時代背景。

関連する知識や、重要なポイントがまとまっています。

例題

本文で中心的に描かれている内容として正しいものを選びなさい。

ア　先生に叱られるかもしれないのに、生真面目に机の拭き掃除までしようとする権太に対していらだつ耕作の心情。
イ　先生に叱られると級長から指摘されても、罰当番の権太を手伝い、正しいことを堂々とやろうとする耕作の心情。
ウ　先生に叱られるのをおそれて掃除をいい加減に済ませようとしたが、権太の言葉に自分を恥ずかしく感じた耕作の心情。

例題

「現代文 読解法」の単元には例題が付いています。例題は動画を見ながら解き方を確認しましょう。例題を事前に解いてから動画を見ると、学習効果が高まります。

確認テスト　本文を読んで、問いに答えなさい。

(1)　本文中で心情の変化が描かれている人物を選びなさい。

ア　耕作　　イ　権太　　ウ　先生　　エ　若浜

確認テスト

動画で学習した内容や、作品について問題が出題されます。解答は別冊で確認できます。

※解説を確認したい場合はアプリでご確認ください。

目次

1 言葉

和語・漢語・外来語 P006
慣用句・ことわざ・故事成語 P008
手紙文 P012

2 文法

わかりづらい文 P014
まぎらわしい単語 P018

※「付属語」は、中２ 国語（共通版）に掲載しています。

3 漢字

呉音・漢音・唐音 P024
四字熟語 P026
送り仮名 P030

4 現代文読解法

説明的文章 P034
文学的文章 P042
随筆 P050

5 古典

和歌―万葉・古今・新古今 P054
古文　おくのほそ道 P066
漢文　論語 P076

※「漢詩」は、中２ 国語（共通版）に掲載しています。

国語３　目次

6 詩・俳句

詩　初恋 …… P082
俳句 …… P084
鑑賞文　俳句を楽しむ …… P086

7 現代文 実践（説明的文章）

40億年、いのちの旅 …… P090
対話をデザインする――伝わるとはどういうことか …… P096
読書の価値 …… P100

8 現代文 実践（文学的文章）

羊と鋼の森 …… P106
風に恋う …… P114
水を縫う …… P118
故郷 …… P122

9 現代文 実践（随筆）

自由と不自由 …… P136
みち …… P140

※本文は原則として原典のまま表記しています。

和語・漢語・外来語

●和語

もともと日本語で使われていた語を和語（大和言葉）という。通常、**ひらがな**や漢字の**訓読み**で表される。意味がわかりやすいものが多く、やわらかい語感がある。日常会話でよく使われる。

（例）速さ　くだもの　大きい　関わる　わたし

●漢語

漢字の音読みで読まれる語を漢語という。漢語には、中国から伝わったもののほか、日本で作られたものもある。外国語を翻訳するときに新しい漢語が作られることもある。漢語は、通常、**音読み**の漢字で表されるが、ひらがなで書かれていても音読みであれば漢語である。意味が抽象的な語も多く、硬い語感がある。ニュースや新聞などでよく使われる。

（例）速度　果実　巨大　関与　僕

●外来語

漢語以外で、外国語から日本語に取り入れられた語を外来語という。外来語の多くは欧米から取り入れられたものだが、日本で作られた和製英語などもある。**カタカナ**で表記されることが多い。新鮮さや軽快な印象を与える語が多い。

（例）スピード　フルーツ　ビッグ　コミットメント
たばこ　かるた

●混種語

和語・漢語・外来語が組み合わさってできた語を混種語という。

（例）りんご畑（漢語「りんご」＋和語「畑」）
紙コップ（和語「紙」＋外来語「コップ」）
高層ビル（漢語「高層」＋外来語「ビル」）

和語・漢語・外来語は、それぞれ語感が異なる。場面に応じて適切な語を選ぶことが大切である。

確認テスト

(1) 次の言葉の種類をそれぞれ**ア**〜**ウ**から選びなさい。

① ルール［　　］　② 決まり［　　］

③ 規則［　　］

ア 和語　**イ** 漢語　**ウ** 外来語

(2) 次の言葉の種類をそれぞれ**ア**〜**ウ**から選びなさい。

① 学校［　　］　② クラス［　　］

③ 夏休み［　　］

ア 和語　**イ** 漢語　**ウ** 外来語

(3) 次の食べ物に関する言葉の種類をそれぞれ**ア**〜**ウ**から選びなさい。

① てんぷら［　　］　② にく［　　］

③ まめ［　　］

ア 和語　**イ** 漢語　**ウ** 外来語

---

(4) 次の外来語と似た意味の漢語をそれぞれ**ア**〜**エ**から選びなさい。

① サポート［　　］　② プラン［　　］

③ オピニオン［　　］　④ モラル［　　］

ア 計画　**イ** 道徳　**ウ** 支援（しえん）　**エ** 意見

(5) 次の混種語の構成をそれぞれ**ア**〜**カ**から選びなさい。

① レポート用紙［　　］　② 空き缶（かん）［　　］

③ 窓ガラス［　　］　④ 労働組合［　　］

ア 和語＋漢語　**イ** 和語＋外来語

ウ 漢語＋和語　**エ** 漢語＋外来語

オ 外来語＋和語　**カ** 外来語＋漢語

慣用句・ことわざ・故事成語 (1)

慣用句

二つ以上の言葉が組み合わさって全体として特別な意味を表す言葉を、**慣用句**という。

〈体や心に関連する慣用句〉

- **頭**が下がる……敬服する。
- **顔**が広い……知り合いが多い。
- **目**に余る……黙って見ていられないほどひどい。
- **耳**を疑う……聞いたことが信じられない。
- **鼻**につく……嫌な臭いがする。嫌味に感じられる。
- **口**が重い……口数が少ない。
- **歯**が立たない……対抗できない、かなわない。
- **肩**を並べる……相手と対等の地位で張り合う。
- **腕**を上げる……上達する。
- **手**を焼く……対処に困り、てこずる。
- **胸**がすく……心につかえていたことがとれ、さわやかになる。
- **腹**を割る……本心を全てさらけ出す。
- **足**を洗う……好ましくない行いや仲間から離れ、まともになる。
- **心**に刻む……忘れないように覚えておく。
- **息**が合う……互いの調子が合う。
- **骨**が折れる……苦労する、面倒である。

〈衣食住に関連する慣用句〉

- **袖**にする……親しくしていた人を冷淡に扱う。
- **襟**を開く……思っていることをすっかり打ち明ける。
- **お茶**を濁す……いいかげんな処置でその場をごまかす。
- **棚**に上げる……都合の悪いことに触れないでおく。
- **薄紙**をはぐよう…病気が少しずつ良くなる様子。
- **水**に流す……過去のいざこざをなかったことにする。

〈動植物に関連する慣用句〉

- **鵜**呑みにする……物事を十分考えず受け入れる。
- **鶴**の一声……周囲を否応なく従わせる権力者の一言。
- **花**を持たせる……相手を立てて手柄を譲る。
- 高嶺の**花**……遠くから見ているだけで、手に入らないもの。
- **根**も**葉**もない……何の根拠もない。
- **根**に持つ……恨みに思い、いつまでも忘れない。

確認テスト

(1) 次の慣用句の意味を、それぞれ**ア**～**エ**から選びなさい。

① 顔が立つ〔　　〕
② 顔が広い〔　　〕
③ 顔を出す〔　　〕
④ 顔から火が出る〔　　〕

ア 知り合いが多い。
イ 世間に対して面目が保たれる。
ウ 恥ずかしさで顔が真っ赤になる。
エ 訪問する、会に出席する。

(2) （　）内の意味の慣用句になるように、□に当てはまる言葉をそれぞれ漢字一字で書きなさい。

① □が高い（よいものを見分ける力がある。）
② □が痛い（自分の弱点を突かれ、聞くのがつらい。）
③ □にかける（自慢する、得意がる。）
④ □がすべる（言ってはいけないことをうっかり言う。）

(3) 次の慣用句の意味を、それぞれ**ア**～**エ**から選びなさい。

① 板につく〔　　〕
② 油を売る〔　　〕
③ 筆が立つ〔　　〕
④ 水を差す〔　　〕

ア むだ話をして仕事を怠ける。
イ 経験を積み、動作や態度が役目にしっくり合う。
ウ 文章を書くのが上手い。
エ 上手くいっているものをじゃまする。

(4) （　）内の意味の慣用句になるように、□に当てはまる言葉をそれぞれ**ア**～**エ**から選びなさい。

① □の額（場所がせまいこと。）〔　　〕
② □の涙（ごくわずかなもの。）〔　　〕
③ □の子（大切にして手放さないもの。）〔　　〕
④ □が合う（気が合う、意気投合する。）〔　　〕

ア 雀　**イ** 猫　**ウ** 馬　**エ** 虎

慣用句・ことわざ・故事成語(2)

ことわざ

古くから世間で言いならわされてきた教訓的な言葉を**ことわざ**という。

- **石橋をたたいて渡(わた)る**……用心に用心を重ねる、大変慎重(しんちょう)な様子。
- **馬の耳に念仏**……人の意見を聞き流し、少しも聞き入れようとしないこと。
- **果報は寝(ね)て待て**……幸運は人力ではどうすることもできないので、静かに時機を待つのがよいということ。
- **弘法(こうぼう)にも筆の誤り**……その道に長じた人も時には失敗すること。
- **三人寄れば文殊(もんじゅ)の知恵(ちえ)**……平凡(へいぼん)な人も三人集まればすばらしい知恵が出るものだということ。
- **知らぬが仏**……知らないから、平気でいられること。
- **出る杭(くい)は打たれる**……頭角をあらわす者は人から憎(にく)まれがちだということ。
- **灯台下(もと)暗し**……身近なことはかえってわかりにくいものだということ。
- **泣きっ面(つら)に蜂(はち)**……不運なときに、さらに不幸が重なること。
- **花よりだんご**……風流なものや外見がよいものよりも、利益のあるものを重んじること。
- **身から出たさび**……自分の行いが原因で災(わざわ)いにあうこと。
- **焼け石に水**……少しの援助(えんじょ)や努力では効果がないこと。

故事成語

中国の古典に記された話など、言い伝えられている昔の出来事がもととなってできた言葉を**故事成語**という。

- **覆水盆(ふくすいぼん)に返らず**……一度してしまったことは取り返しがつかないということ。
- **他山の石**……他人のつまらない言動も、自分への戒(いまし)めや人格を磨(みが)くのに役立つということ。
- **背水の陣(じん)**……一歩も引くことができない立場で、全力で事に当たること。
- **塞翁(さいおう)が馬(人間万事(ばんじ)塞翁が馬)**……その人にとって何が幸か不幸かは、予測しがたいということ。
- **竹馬(ちくば)の友**……幼い頃(ころ)からの友人、幼なじみ。

誤用されやすい表現

- **浮足(うきあし)立つ**……恐(おそ)れや不安でそわそわする。
- **気が置けない**……気遣(きづか)いしなくてよい、心から打ち解けられる。
- **敷居(しきい)が高い**……相手に不義理をしたために、その人の家に行きにくい。
- **ぞっとしない**……面白(おもしろ)くない。
- **情けは人のためならず**……人への親切は、やがてよい報(むく)いとなって自分に返ってくる。

確認テスト

(1) 次のことわざの意味を、それぞれア〜エから選びなさい。

① 雨降って地固まる
② 枯れ木も山のにぎわい
③ 朱に交われば赤くなる
④ たで食う虫も好き好き

ア 人は交わる友人によって善にも悪にもなること。
イ つまらないものでも、ないよりはましであること。
ウ 人の好みはさまざまであるということ。
エ もめごとの後にかえってよい状態になること。

①［　］ ②［　］ ③［　］ ④［　］

(2) 次のことわざと似た意味のことわざを、それぞれア〜エから選びなさい。

① 医者の不養生［　］
② 猿も木から落ちる［　］
③ 月とすっぽん［　］
④ のれんに腕押し［　］

ア 弘法にも筆の誤り
イ 紺屋の白袴
ウ 提灯に釣り鐘
エ ぬかにくぎ

(3) 次の故事成語の意味を、それぞれア〜エから選びなさい。

① 杞憂［　］
② 漁夫の利［　］
③ 蛍雪の功［　］
④ 五十歩百歩［　］

ア 当事者が争うすきに第三者が利益を横取りすること。
イ 苦学した成果、また、苦労して学問にはげむこと。
ウ 少しの違いはあっても、本質的には変わらないこと。
エ 心配する必要のないことを心配すること。

(4) 「気が置けない人」の意味を選びなさい。

ア 油断ならない人　イ 気が許せる人

［　］

(5) 「情けは人のためならず」の意味を選びなさい。

ア 情けをかけることは、かえってその人のためにならない。
イ 情けをかけることは、自分によい報いとなって返ってくる。

［　］

手紙の書き方

手紙を書くときには、用件のほかに宛名や挨拶などもきちんと書くことが大切である。手紙の書き方は、案内・依頼・お礼といった目的や、縦書きか横書きか、などによって異なるが、縦書きの場合は一般的に次のような形式で書かれることが多い。

●前文

・**頭語**…手紙の冒頭に用いる語。
・**時候の挨拶**…季節に応じた挨拶文。
・**安否の挨拶**…相手の安否を尋ね、気遣う。こちらの近況を添えることもある。

※面識のない相手の場合は、本文の前に自己紹介をする。

●主文

・**本文**…書き起こしの言葉に続けて、手紙の趣旨や用件を伝える。

●末文

・**結びの言葉**…用件に応じて、お詫びや気遣う言葉などを述べる。
・**結語**…手紙の結びに用いる語。頭語に対応した語を用いる。

●後付け…日付・署名・宛名

日付は二字ほど下げる。署名は下寄せ、宛名は上寄せで書く。
宛名の敬称は相手が個人か団体かなどによって使い分ける。

（敬称）個人宛て……様・殿・先生　（例）「○○様」
多人数宛て…皆様・各位　「○○の皆様」
団体宛て……御中　「○○会社御中」

※横書きでは、日付・宛名は冒頭に置く。署名は宛名の次の行や末尾に置く。

〈頭語・結語の例〉　※頭語に対応する結語はほかにもさまざまなものがある。

拝啓 ― 敬具（一般的な改まった手紙の場合）
謹啓 ― 謹白（特に改まった手紙の場合）
前略 ― 草々（事情があって前文を省略する場合）
拝復 ― 敬具（相手の手紙に対する返信の場合）

〈時候の挨拶の例（一月）〉

新春の候　厳寒の候　寒さが身にしみる今日この頃です

〈縦書きの手紙の例〉

拝啓
春の暖かさが感じられる季節となりました。いかがお過ごしでしょうか。
さて、先日はお忙しい中お時間をいただき、ありがとうございました。……
……（中略）……
季節の変わり目ですので、風邪などひかれませんよう、お元気でお過ごしください。
敬具
○月○日
○○中学校○年○組　○○○○
○○○○様

※末尾に追伸として本文に付け加える内容を添えることもある。
※横書きの通信文やメールなどでは適切な形式が異なる。

確認テスト

(1) 次の頭語に対応する結語として適当なものを、それぞれ選びなさい。

①前略［　　］　②拝啓［　　］

ア 敬具　**イ** 草々

(2) 次の時候の挨拶が使われる時期として適当なものを、それぞれ選びなさい。

①立春の候［　　］　②春分の候［　　］

③新春の候［　　］

ア 1月上旬（じょうじゅん）頃　**イ** 2月上旬頃　**ウ** 3月下旬頃

(3) 次の時候の挨拶が使われる時期として適当なものを、それぞれ選びなさい。

①梅雨の候［　　］　②師走（しわす）の候［　　］

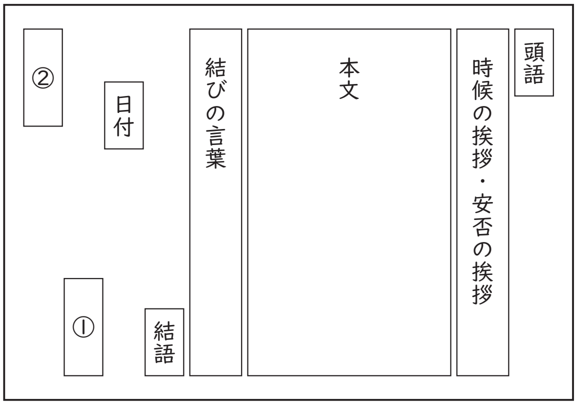
ア 3月頃　**イ** 6月頃　**ウ** 9月頃　**エ** 12月頃

(4) 次の宛名に用いる敬称として適当なものを、それぞれ選びなさい。

①個人宛て［　　］　②団体宛て［　　］

ア 御中　**イ** 様

(5) 次の図は縦書きの手紙の形式の例である。①・②に入る内容として適当なものを、それぞれ選びなさい。



ア 宛名　**イ** 署名

①［　　］　②［　　］

わかりづらい文（1）

文節のまとめ

文を自然な発音や意味となる範囲でできるだけ短く区切ったまとまりを**文節**という。文節には必ず**一つだけ**自立語が含まれる。

（例）［鳥］が／［青い］／［空］を／［飛ぶ］。（自・自・自・自）

各文節は文の中でさまざまな働きをする。

●主語・述語

（例）庭に／きれいな／花が（主語）／咲く（述語）。

主語と述語の関係を、**主・述の関係**という。

●修飾語

（例）庭に（連用修飾語）／きれいな（連体修飾語）／花が／咲く。

修飾語と修飾語を受ける文節（被修飾語）の関係を、**修飾・被修飾の関係**という。

●接続語

（例）晴れた。／だから、（接続語）／外で／遊んだ。

接続語がつなぐ文同士の関係や、接続語と後に続く部分の関係を**接続の関係**という。

●独立語

（例）［ああ］（独立語）、／すばらしい／景色だ。

独立語とそれ以外の文節の関係を**独立の関係**という。

二つ以上の文節がまとまって、主語・述語・修飾語などと同じ働きをするものを**連文節**という。連文節で主語・述語・修飾語・接続語・独立語と同じ働きをするものをそれぞれ、**主部・述部・修飾部・接続部・独立部**とよぶ。

（例）白い（修飾語） 鳥が（主語） 飛ぶ（述語）。 → 白い 鳥が（主部） 飛ぶ。

連文節では、並立や補助といった関係がみられることがある。

・**並立の関係**…二つ以上の文節が対等な関係で並び、ひとまとまりになっているもの。

（例）雨と 風が（並立の関係（主部）） 強い。　その 山は 高く けわしい（並立の関係（述部））。

・**補助の関係**…下の文節が上の文節の意味を補って、ひとまとまりになっているもの。

（例）犬が 走って いる（補助の関係）。　今日は 暑く ない（補助の関係）。

確認テスト

(1) 例に従って、次の文を斜線（しゃせん）（／）で文節に区切り、各文節に含（ふく）まれる自立語を□で囲みなさい。

（例）［鳥］が／［青い］／［空］を／［飛ぶ］。

私は今朝、文法の問題を解いていた。

(2) 次の――線部の文節の働きを、それぞれ**ア**～**オ**から選びなさい。ただし、同じ記号を何度使ってもよい。

①彼女こそ　②次の　③生徒会長に　④ふさわしい。

ア 主語　**イ** 述語　**ウ** 修飾語　**エ** 接続語　**オ** 独立語

①〔　〕　②〔　〕　③〔　〕　④〔　〕

(3) 次の――線部の文節の働きを、それぞれ**ア**～**オ**から選びなさい。ただし、同じ記号を何度使ってもよい。

①梅雨なので、　②毎日　③雨が　④降る。

ア 主語　**イ** 述語　**ウ** 修飾語　**エ** 接続語　**オ** 独立語

①〔　〕　②〔　〕　③〔　〕　④〔　〕

(4) 次の――線部の文節の働きを、それぞれ**ア**～**オ**から選びなさい。ただし、同じ記号を何度使ってもよい。

①おや、　②あれは　③国語の　④先生だ。

ア 主語　**イ** 述語　**ウ** 修飾語　**エ** 接続語　**オ** 独立語

①〔　〕　②〔　〕　③〔　〕　④〔　〕

(5) 次の各文の――線部に含まれる文節が、並立の関係なら**ア**、補助の関係なら**イ**、それ以外なら**ウ**で答えなさい。

① メッセージが書いてある。〔　〕
② この食べ物は安くておいしい。〔　〕
③ 今日はみんなと校庭で走った。〔　〕
④ 言葉の誤用はめずらしくない。〔　〕
⑤ ノックをするとドアが開いた。〔　〕
⑥ シカやキツネが生息する。〔　〕

わかりづらい文 (2)

文の成分と係り受け

日本語の文は、**主**・**述**・**修飾**・**接続**・**独立**の５種類の文の成分が組み合わさって成り立っている。「何（だれ）が」「何を」「どうする」など、文の成分がどのように組み立てられているかを考えることで、文の意味を正確に理解することができる。

また、文を書くときは、主・述の関係や、修飾・被修飾の関係などの係り受けがきちんと対応しているか確認するとよい。

主・述の係り受けがおかしい文

主・述は文の成分の中でも文の構造の中心となるものである。主・述がうまく対応していないと、不自然な文になる。

（例）私の将来の夢は、国語の先生になって、言葉のおもしろさを伝えていきたいです。　→　×

※「夢は……伝えていきたい」と、主・述が対応していない。

私の将来の夢は、国語の先生になって、言葉のおもしろさを伝えていくことです。　→　○

係り受けや意味のまとまりが曖昧な文

主・述、修飾・被修飾といった係り受けや、意味のまとまりの切れ目がわかりづらいと、文が複数の意味に解釈できてしまうことがある。文の表す意味が明確になるように、修飾語の位置を変えたり、文を分けたりするとよい。また、読点を付けると意味のまとまりがはっきりすることがある。

（例）今朝畑でとれた野菜をサラダにした。

A　畑でとれたのが、今朝。

B　サラダにしたのが、今朝。

・文を分ける。修飾語の位置を変える。

A　今朝畑で野菜がとれた。それをサラダにした。

B　畑でとれた野菜を、今朝、サラダにした。

※修飾語（部）は、被修飾語（部）の直前に置くと、係り受けがわかりやすい。

・読点を付ける。

A　今朝畑でとれた野菜を、サラダにした。

B　今朝、畑でとれた野菜をサラダにした。

打ち消しの表現を含む文でも、表す意味が曖昧になる場合があるので、明確に伝わるように表現を工夫するとよい。

（例）私は彼女のように英語が得意ではない。

A　私は彼女と違って、英語が得意ではない。

B　私は彼女と同じく、英語が得意ではない。

確認テスト

(1) 例に従って、次の文に含まれる主語に══線を、述語に──線を引きなさい。

（例）鳥が　空を　飛ぶ。

(2) 例に従って、次の文の～～線部が修飾している文節に──線を引きなさい。

形式に　注目すると、詩は　定型詩や　自由詩などに　分けられる。

（例）鳥が　空を　飛ぶ。

今朝、私は　山の　上で　美しい　朝日を　見た。

(3) 次の文の係り受けが正しくなるように、──線部を正しく直したものを選びなさい。

私の将来の目標は、人の役に立つ研究をしたいです。

ア 研究が目標です　**イ** 研究が希望です

ウ 研究をすることです　**エ** 研究を考えています

〔　　〕

(4) 次の文で、文節同士の係り受けがうまく対応していない箇所（かしょ）を選びなさい。

この学校を志望した理由は、自由な校風が理由です。

ア 「志望した」と「理由は」　**イ** 「理由は」と「理由です」

〔　　〕

(5) （　）内の意味がはっきりするように、次の各文に読点をそれぞれ一つ付けなさい。

①私は　兄と　母に　相談した。（相談した相手は兄と母）

②先生は　うれしそうに　挙手した　生徒を　指名した。

（うれしそうなのは先生）

単語のまとめ

それだけで意味をもつ最も小さい言葉の単位を**単語**という。単語は大きく自立語と付属語に分けられる。

●**自立語**…単独で文節を作ることができる。
※各文節に一つだけ含まれる。

●**付属語**…単独では文節を作ることができない。
※文節に含まれないことや、複数含まれることもある。

(例) 赤い(自)/花(自)が/咲き(自)ました。

単語を分類したものを**品詞**という。単語は、**自立語**か**付属語**か、**活用**があるかないか、どのような文の成分になるか、などによって10種類の品詞に分けられる。

- 単語
  - **自立語**
    - 活用する ― 述語になる(用言)
      - 動作・作用・存在を表す・終止形が「ウ段」で終わる → **動詞**
      - 状態・性質を表す
        - 終止形が「い」で終わる → **形容詞**
        - 終止形が「だ・です」で終わる → **形容動詞**
    - 活用しない
      - 主語になる(体言) ― 物事の名前を表す・物事を指し示す → **名詞**
      - 修飾語になる
        - 主に用言を修飾する → **副詞**
        - 常に体言を修飾する → **連体詞**
      - 接続語になる → **接続詞**
      - 独立語になる → **感動詞**
  - **付属語**
    - 活用する → **助動詞**
    - 活用しない → **助詞**

・**動詞**…動作・作用・存在を表す。言い切りが「**ウ段**」で終わる。
(例) 話す・咲く・いる

・**形容詞**…状態・性質を表す。言い切りが「**い**」で終わる。
(例) 明るい・楽しい・赤い

・**形容動詞**…状態・性質を表す。言い切りが「**だ・です**」で終わる。
(例) 静かだ・静かです

・**名詞**…物事の名前を表す。物事を指し示す。
(例) 山・東京・私・一個

・**副詞**…主に連用修飾(しゅうしょく)語になり、状態や程度などを表す。
(例) ゆっくり・とても・もし

・**連体詞**…常に連体修飾語になる。
(例) この・大きな

・**接続詞**…接続語になり、前後の文や語をつなぐ。
(例) だから・しかし

・**感動詞**…独立語になり、感動・呼びかけ・挨拶(あいさつ)・応答を表す。
(例) ああ・おはよう

・**助詞**…自立語の後に付いて、語句と語句の関係を示したり、意味を付け加えたりする。
(例) 鳥が飛ぶ。　私も笑う。　強くて優(やさ)しい。　何ですか。

・**助動詞**…用言・体言や他の助動詞などに付いて、意味を付け加えたり、話し手の判断を示したりする。
(例) 走らない。　走った。　中学生だ。

確認テスト

(1) 例に従って、次の文に含(ふく)まれる自立語を□で囲み、付属語に――線を引きなさい。

(例) 花が咲きました。

あなたは昨日、文法を勉強しましたか。

(2) 次の各組の単語の品詞を、それぞれア～エから選びなさい。

① 花・これ・いくつ 〔　　〕
② 歩く・見る・着る 〔　　〕
③ 高い・丸い・新しい 〔　　〕
④ きれいだ・にぎやかです 〔　　〕

ア 動詞　イ 形容詞　ウ 形容動詞　エ 名詞

(3) 次の各組の単語の品詞を、それぞれア～エから選びなさい。

① その・小さな・あらゆる 〔　　〕
② いつも・少し・なぜ 〔　　〕
③ すると・ところが・そして 〔　　〕
④ おや・ねえ・はい 〔　　〕

ア 副詞　イ 連体詞　ウ 接続詞　エ 感動詞

(4) 次の文に含まれる助詞・助動詞を二つずつ探し、書きぬきなさい。

今日の授業は国語でした。

助詞 〔　　・　　〕
助動詞 〔　　・　　〕

まぎらわしい単語 (2)

品詞・用法の識別

●「……だ」

・**形容動詞の終止形**…連体形「〜な」の形にできる。
(例) ここは 静かだ。 → 「静かな」○
※副詞「とても」で直接修飾(しゅうしょく)できる。
(例) ここは 平和だ。 → ここは とても(○) 平和だ。

・**名詞＋断定の助動詞「だ」**…「〜な」の形にできない。
(例) 彼(かれ)は 中学生だ。 → 「中学生な」×
※副詞「とても」で直接修飾できない。
(例) 私の 願いは 世界の 平和だ。
→ 私の 願いは 世界の とても(×) 平和だ。

・**動詞＋過去（完了・存続）の助動詞「だ」**
(例) 本を 読んだ。

・**助動詞「そうだ」「ようだ」**
(例) 雨が 降りそうだ。 ※「そうだ」で一つの助動詞。

●「……な」

・**形容動詞の連体形**…終止形「〜だ」の形にできる。
(例) 静かな 湖。 → 「静かだ」○

・**連体詞**…「〜だ」の形にできない。
(例) 大きな 湖。 → 「大きだ」×

・**助動詞「そうだ」「ようだ」**
(例) 海のような 湖。 ※「ような」で一つの助動詞。

●「……に」

・**形容動詞の連用形**…連体形「〜な」の形にできる。
(例) 静かに なる。 → 「静かな」○

・**名詞＋格助詞「に」**…「〜な」の形にできない。
(例) 教室に いる。 → 「教室な」×

・**副詞**
(例) すぐに さらに ※「すぐに」「さらに」で一つの副詞。

・**助動詞「そうだ」「ようだ」**
(例) 雨が 降りそうに なる。 ※「そうに」で一つの助動詞。

●「ない」

・**形容詞「ない」**…助動詞「ぬ（ん）」に言い換(か)えられない。
(例) リンゴが ない(形容詞)。 → 「リンゴがぬ」×
赤く ない(補助形容詞)。 → 「赤くぬ」×
※「〜て（で）ない」や「形容詞（形容動詞）＋ない」の形なら補助形容詞。

・**助動詞「ない」**…助動詞「ぬ（ん）」に言い換えられる。
(例) 私は 行かない。 → 「行かぬ」○
※「いない」「しない」の「ない」も助動詞である。
※直前の単語が動詞であることでも見分けられる。

・**形容詞の一部**
(例) 部屋が きたない。 ※「きたない」で一つの形容詞。

確認テスト

(1) 次の——線部は何か。それぞれ**ア**〜**エ**から選びなさい。

① 火が消えそうだ。
② 彼女(かのじょ)は元気だ。
③ 公園で遊んだ。
④ これが答えだ。

ア 形容動詞の一部　**イ** 断定の助動詞
ウ 過去の助動詞　**エ** 様態の助動詞の一部

(2) 次の——線部は何か。それぞれ**ア**〜**ウ**から選びなさい。

① 郊外(こうがい)ののどかな村。
② 綿菓子(わたがし)のような雲。
③ とてもおかしな話。

ア 形容動詞の一部　**イ** 連体詞の一部
ウ 助動詞の一部

(3) 次の——線部は何か。それぞれ**ア**〜**エ**から選びなさい。

① 庭にバラの花が咲(さ)いた。
② まるで雪のように白い。
③ 雨が急に降り出した。
④ 帰ってすぐに出かける。

ア 形容動詞の一部　**イ** 格助詞
ウ 副詞の一部　**エ** 助動詞の一部

(4) 次の中から、——線部が助動詞であるものを三つ選びなさい。

ア 選択肢(せんたくし)は多くない。　**イ** 問題は全くない。
ウ ここからは見えない。　**エ** 自動車が動かない。
オ 理由を説明しない。　**カ** 服装がだらしない。

まぎらわしい単語(3)

品詞・用法の識別

●「……らしい」

・**推定の助動詞**…「どうやら〜」を補える。
（例）彼は　先生　の　子ども　らしい。

・**形容詞の一部（接尾語）**…「いかにも〜」を補える。
（例）彼　は　子どもらしい　性格　だ。
※「子どもらしい」という形容詞の一部。

●助詞「の」

・**連体修飾語を表す格助詞**…前後が名詞である。
（例）私の本。

・**主語を表す格助詞**…「が」に言い換えられる。
（例）雪の降る日。　→　雪が降る日。

・**体言の代用として使われる格助詞**
…「〜のもの・こと」に言い換えられる。
（例）これは私のだ。　→　これは私のものだ。

・**終助詞**
（例）いつ終わるの。

●助詞「と」

・**格助詞**……主に体言に付く。
（例）友達と話す。（相手）　山と川（列挙）
「いいえ。」と答える。（引用）

・**接続助詞**…主に用言や助動詞に付く。
（例）春になると、花が咲く。（条件）

●助詞「から」

・**格助詞**……主に体言に付く。
（例）学校から帰る。（起点）　小麦から作る。（原料）
疲れから体調をくずす。（原因・理由）

・**接続助詞**…主に用言や助動詞に付く。
（例）暑いから休む。（原因・理由）
※「だから」に言い換えられる。

●助動詞「れる・られる」

・**受け身**…「〜に…される」と言い換えられる。
（例）名前を呼ばれる。

・**可能**……「〜することができる」と言い換えられる。
（例）早く起きられる。

・**尊敬**……接続する動詞が、尊敬の対象となる人物の動作である。
（例）先生が話される。

・**自発**……「自然と」を補える。前に心情を表す語がある。
（例）彼のことが案じられる。

●助動詞「そうだ」

・**様態・推定**…動詞の連用形や形容詞・形容動詞の語幹に付く。
（例）雪が降りそうだ。

・**伝聞**…………用言の終止形に付く。
（例）雪が降るそうだ。

確認テスト

(1) 次の――線部は何か。それぞれ選びなさい。

① 次の発表者は彼らしい。

② 彼らしい発表だった。

ア 推定の助動詞　**イ** 形容詞の一部

(2) 次の――線部の助詞の働きを、それぞれ**ア**～**ウ**から選びなさい。

① 桜の咲(さ)く季節が来た。

② これは誰(だれ)のですか。

③ 先生の本を借りる。

ア 連体修飾語を表す。　**イ** 主語を表す。

ウ 「～もの・こと」という意味を表す。

(3) 次の中から、――線部が接続助詞であるものを選びなさい。

ア 昨日、友達と会った。　**イ** 妹と弟が遊んでいる。

ウ 「おや。」とつぶやく。　**エ** まっすぐ行くと駅がある。

(4) 次の中から、――線部が接続助詞であるものを選びなさい。

ア 終わったから帰ろう。　**イ** 教室から出てきた。

ウ 姉からもらった本。　**エ** 古紙からつくられた製品。

(5) 次の――線部の意味を、それぞれ**ア**～**エ**から選びなさい。

① 昔のことがしのばれた。

② 先生から声をかけられた。

③ 私はぐっすり寝(ね)られた。

④ 家にお客様が来られた。

ア 受け身　**イ** 可能　**ウ** 尊敬　**エ** 自発

(6) 次の――線部の意味をそれぞれ選びなさい。

① 外は風が強そうだ。

② 外は風が強いそうだ。

ア 様態・推定　**イ** 伝聞

呉音・漢音・唐音

漢字の中には、中国語でのさまざまな音が、異なる時代に日本に伝わったために、複数の音をもつものがある。

（例）行…ギョウ・コウ・アン

①**呉音**…最も古い時代に日本に伝わった音。
仏教用語など、古くからある言葉に多い。

（例）修行（ギョウ）

②**漢音**…奈良時代から平安時代にかけて、遣唐使などによって日本に伝わった音。
長安など、中国の北方の音がもとになっていると考えられている。

（例）流行（コウ）

③**唐音**…平安時代後期以降から江戸時代にかけて、日本に伝わった音。

（例）行脚（アン）

慣用音

呉音・漢音・唐音以外で、日本で通用している音を**慣用音**という。慣用音の中には、誤った読み方が定着したものもある。

（例）輸…もとは「シュ（漢音）」と読んでいたが、「ユ」という読みが定着している。

呉音・漢音・唐音の見分け方

呉音と漢音は、例外も多いが次のような傾向がある。

・「ナ行」で始まる音と、「ダ／ザ行」で始まる音をともにもつ場合。
　㊐男（ナン）・若（ニャク）（ナ行で始まる）
　㊇男（ダン）・若（ジャク）（ダ／ザ行で始まる）

・「マ行」で始まる音と、「バ行」で始まる音をともにもつ場合。
　㊐万（マン）・無（ム）（マ行で始まる）
　㊇万（バン）・無（ブ）（バ行で始まる）

・「ガ／ザ／ダ／バ行」で始まる音と、「カ／サ／タ／ハ行」で始まる音をともにもつ場合。
　㊐神（ジン）・大（ダイ）（ガ／ザ／ダ／バ行で始まる）
　㊇神（シン）・大（タイ）（カ／サ／タ／ハ行で始まる）

唐音は幅広い時代に伝わった音を含むので、はっきりした傾向はない。

確認テスト

(1) 次の中から奈良時代から平安時代にかけて伝来した音を選びなさい。

ア 漢音　**イ** 呉音　**ウ** 唐音

〔　　〕

(2) 次の①～③に当てはまる音を、それぞれ**ア**～**ウ**から選びなさい。

	呉音	漢音	唐音
京	キョウ	ケイ	キン
清	①	②	③
明	ミョウ	メイ	ミン

ア ショウ　**イ** シン　**ウ** セイ

①〔　　〕②〔　　〕③〔　　〕

(3) 次の各組の漢字の音の種類は**ア**と**イ**のどちらか。それぞれ答えなさい。

① 内「ナイ」・人「ニン」・目「モク」・米「マイ」〔　　〕

② 内「ダイ」・人「ジン」・目「ボク」・米「ベイ」〔　　〕

ア 呉音　**イ** 漢音

(4) 次の各組の――線部で、唐音であるものは**ア**と**イ**のどちらか。それぞれ答えなさい。

① **ア** 子孫「シソン」　**イ** 様子「ヨウス」〔　　〕

② **ア** 和尚「オショウ」　**イ** 平和「ヘイワ」〔　　〕

③ **ア** 布団「フトン」　**イ** 団体「ダンタイ」〔　　〕

④ **ア** 風鈴「フウリン」　**イ** 予鈴「ヨレイ」〔　　〕

四字熟語

四字の漢字を組み合わせてつくられた語を**四字熟語**という。四字熟語には、次のような構成のものがある。

①漢字一字の語を組み合わせたもの。
（例）春夏秋冬（春＋夏＋秋＋冬）
　　喜怒哀楽（喜＋怒＋哀＋楽）

②似た意味をもつ二字熟語を組み合わせたもの。
（例）完全無欠（完全≒無欠）
　　清廉潔白（清廉≒潔白）

③対の意味をもつ二字熟語を組み合わせたもの。
（例）有名無実（有名↔無実）
　　質疑応答（質疑↔応答）

④上の二字が下の二字にかかるもの。
（例）時期尚早（時期→尚早）
　　前代未聞（前代→未聞）
※上の二字熟語と下の二字熟語が、「主語と述語の関係」のものや、「修飾語と被修飾語の関係」のものなどがある。

⑤対の意味の二字からできた熟語を重ねたもの。
（例）老若男女（老↔若　と　男↔女）
　　古今東西（古↔今　と　東↔西）

⑥同じ漢字を繰り返す熟語を重ねたもの。
（例）時々刻々（時々　と　刻々）
　　明々白々（明々　と　白々）
※「々」は、同じ漢字を重ねることを表す記号で踊り字という。

四字熟語の中には、漢字を間違えやすいものもある。それぞれの漢字と、熟語全体の意味を理解することが大切である。
（例）異口同音　※異句同音ではない。
　　多くの人々が口をそろえて同じことをいうこと。
　　異なる口が同じ音を発することから。

確認テスト

(1) 次の四字熟語と同じ構成のものをそれぞれ**ア**～**エ**から選びなさい。

① 一進一退〔　　〕　② 栄枯盛衰〔　　〕

③ 温厚篤実〔　　〕　④ 花鳥風月〔　　〕

ア 春夏秋冬　**イ** 完全無欠

ウ 有名無実　**エ** 老若男女

(2) 次の四字熟語の意味をそれぞれ**ア**～**エ**から選びなさい。

① 一朝一夕〔　　〕　② 換骨奪胎〔　　〕

③ 森羅万象〔　　〕　④ 付和雷同〔　　〕

ア 先人の文章を生かしながら、新しい工夫を加えて独自の作品にすること。

イ 自分の主義、主張がなく、他人の意見にすぐに同調すること。

ウ わずかな時間、日数。

エ 宇宙に存在するすべてのもの。

(3) 四字熟語となるように解答欄に当てはまる漢字を答えなさい。

① 晴□雨□　② 言□道□

③ □憂□患　④ □明□大

(4) 四字熟語となるように解答欄に当てはまる漢字を答えなさい。

① 一□千□（一日が千年に感じられるほど待ち遠しいこと。）

② □□模索（手がかりがないまま、物事を探し求めること。）

③ 枝□末□（主要ではない細かなこと。本質的ではないこと。）

④ 泰然□□（落ち着いていて、物事に動じないこと。）

(5) 四字熟語となるように解答欄に当てはまる漢字を答えなさい。

① □機一転　② □刀直入

③ □機応変　④ 意味深□

故事成語

中国の古典に記された話など、言い伝えられている昔の出来事をもとに生まれた言葉を**故事成語**という。

・主な故事成語

朝三暮四…目先の違いに気をとられ、結果が同じだと気づかないこと。また、ことば巧みに人をだますこと。

> 中国の宋に狙公とよばれる者がいて、猿の群れを養っていた。あるとき、猿のえさを減らそうとして、猿に、「とちの実を朝に三つ、夕に四つにしようと思う。」と言った。猿は皆立ち上がり怒った。そこで狙公は、「とちの実を朝に四つ、夕に三つにしようと思う。」と言った。猿は皆ひれ伏して喜んだ。（「列子」「荘子」など）

臥薪嘗胆…ある目的のために長い間苦労を重ね、耐えること。

> 中国の春秋時代、越との戦いがもとで父を失った呉王・夫差は、薪の上に臥すことで恨みを忘れないようにし、のちに越を破った。越王・勾践は、苦い胆を嘗めることで恥を忘れないようにし、のちに夫差を破った。

呉越同舟…敵対する者同士が同じ場所に居合わせること。また、敵対する者同士が共通の困難を前に協力すること。

> 呉の人と越の人は憎み合っているが、同じ舟に乗っているときに強風に襲われれば助け合うだろうというたとえ話から。（「孫子」）

五里霧中…現在の状態がよくわからず、見通しや方針が立たないこと。

> 後漢の学者・張楷が、道術とよばれる術を使って五里にわたる霧を起こすことができたという話から。（「後漢書」）

数字を使った熟語

四字熟語の中には、数字を使ったものも多い。

・一石二鳥…一つの行為で二つの利益を得ること。

・三寒四温…冬、三日ほど寒い日が続いたあとに四日ほど暖かい日が続き、これが繰り返されること。中国北東部から朝鮮半島でみられる現象。

・千差万別…種類がいろいろあり、その違いもさまざまであること。

確認テスト

(1) 次の四字熟語の意味をそれぞれ**ア**～**エ**から選びなさい。

① 画竜点睛（がりょうてんせい）〔　　〕　② 呉越同舟〔　　〕

③ 四面楚歌（しめんそか）〔　　〕　④ 臥薪嘗胆〔　　〕

ア 周囲を敵に囲まれ、孤立（こりつ）すること。

イ 目的を果たすために長い間の試練に耐え、苦労すること。

ウ 物事を完成させるための最後の仕上げ。

エ 仲の悪い者同士が同じ場所に居合わせること。また、共通の困難を前に協力すること。

(2) 四字熟語となるように解答欄（かいとうらん）に当てはまる漢字を答えなさい。

① 温□知新　② 五里□中

③ 大□晩成　④ 朝三□四

(3) 四字熟語となるように解答欄に当てはまる漢数字を答えなさい。

① 唯（ゆい）□無□（それしかなく、他にはないこと。）

② □変□化（物事がさまざまに変化すること。）

③ 再□再□（繰（く）り返し、何度も何度も。）

④ □苦□苦（非常に苦しむこと。）

(4) 四字熟語となるように解答欄に当てはまる漢数字を答えなさい。

① □中□九（ほとんど、おおかた。）

② □載（ざい）□遇（ぐう）（きわめてまれな機会であること。）

③ □転□倒（とう）（苦しみでころげまわること。）

④ □刻□金（ひとときが大金にも相当するほどすばらしいこと。）

送り仮名(1)

送り仮名の付け方

送り仮名の付け方には、次のような原則がある。

- ●活用のある語…活用語尾(ごび)を送るのが原則。
- ●活用のない語…名詞は送り仮名を付けないのが原則。
  副詞・連体詞・接続詞は最後の音節を送るのが原則。

※動詞「学ぶ」の語幹と活用語尾

活用形	語幹	活用語尾	主な続き方
未然形	学	ば ぼ	—ない —う —よう
連用形	学	び ん	—ます —た —て
終止形	学	ぶ	—。
連体形	学	ぶ	—ので —とき
仮定形	学	べ	—ば
命令形	学	べ	—。

活用のある語の送り仮名

・動詞

原則 活用語尾を送る。

映(うつ)らない・映(うつ)ります・映(うつ)る。

(例外) 教(おそ)わる・味(あじ)わう・逆(さか)らう・始(はじ)まる

・形容詞

原則 活用語尾を送る。

快(こころよ)かろう・快(こころよ)かった・快(こころよ)くない・快(こころよ)い。

(例外) 語幹が「し」で終わる形容詞は、「し」から送る。

美(うつく)しい・楽(たの)しい・悲(かな)しい

(例外) その他の主な例外

大(おお)きい・明(あか)るい・冷(つめ)たい・危(あぶ)ない

・形容動詞

原則 活用語尾を送る。

立派(りっぱ)だろう・立派(りっぱ)だった・立派(りっぱ)でない・立派(りっぱ)になる・立派(りっぱ)だ。

(例外) 「か」「やか」「らか」を含(ふく)む形容動詞は、その部分から送る。

静(しず)かだ・穏(おだ)やかだ・朗(ほが)らかだ

関連する語の送り仮名

同じ漢字を含(ふく)む意味が関連する語は、原則として漢字の読みが共通するように送り仮名を付ける。

(例) 動(うご)く・動(うご)かす

※「動かす」は、「うごか-す」と語幹・活用語尾に分けられるが、「動す」とはならない。

確認テスト

(1) 次の――線部を漢字に直し、送り仮名を付けて答えなさい。

人形をあやつる。

〔　　〕

(2) 次の――線部を漢字に直し、送り仮名を付けて答えなさい。

ご要望をうけたまわる。

〔　　〕

(3) 次の――線部を漢字に直し、送り仮名を付けて答えなさい。

とてもかしこい人。

〔　　〕

(4) 次の――線部を漢字に直し、送り仮名を付けて答えなさい。

いちじるしい進歩。

〔　　〕

(5) 次の――線部を漢字に直し、送り仮名を付けて答えなさい。

なごやかな雰囲気(ふんいき)。

〔　　〕

(6) 次の――線部を漢字に直し、送り仮名を付けて答えなさい。

あきらかな間違(まちが)い。

〔　　〕

送り仮名 (2)

活用のない語の送り仮名

・名詞

[原則] 送り仮名を付けない。
月・山・彼（かれ）・何

（例外）他の読みと間違（まちが）えるおそれがあるものなどは最後の音節を送る。
後（うし）ろ・自（みずか）ら・情（なさ）け・勢（いきお）い・辺（あた）り

※活用のある語が変化して名詞になったもの（転成名詞）は、元の語の送り仮名の付け方にそろえる。

(動)動く → (名)動き
(形)重い → (名)重み
(形)正しい → (名)正しさ

・副詞

[原則] 最後の音節を送る。
必（かなら）ず・少（すこ）し・再（ふたた）び・全（まった）く・専（もっぱ）ら

（例外）主な例外
直（ただ）ちに

・連体詞・接続詞

[原則] 最後の音節を送る。
我（わ）が・故（ゆえ）に・及（およ）び

※連体詞・接続詞はひらがなで書くことも多い。

確認テスト

(1) 次の——線部を漢字に直し、必要なら送り仮名を付けて答えなさい。

うしろから声をかけられる。

［　　　　］

(2) 次の——線部を漢字に直し、必要なら送り仮名を付けて答えなさい。

しあわせが訪(おとず)れる。

［　　　　］

(3) 次の——線部を漢字に直し、必要なら送り仮名を付けて答えなさい。

たよりが届く。

［　　　　］

(4) 次の——線部を漢字に直し、必要なら送り仮名を付けて答えなさい。

世界でもっとも高い山。

［　　　　］

(5) 次の——線部を漢字に直し、必要なら送り仮名を付けて答えなさい。

あくる日の朝。

［　　　　］

(6) 次の——線部を漢字に直し、必要なら送り仮名を付けて答えなさい。

ねばりづよさが私の良さだ。

［　　　　］

説明的文章　指示語の内容の捉え方

　ガゼル、ヌー、シカ、トナカイなどの※反芻動物は、割合おとなしく、なかにはいくぶん敏捷さに欠けるものがいるにもかかわらず、なぜ肉食獣によって絶滅させられることなく、この地球上で繁栄しつづけてきたのだろうか。

　これは深遠な問題で、かんたんに答えられるものではないが、①かれらは何か生きるうえでたいへん有利な点をもっていたにちがいない。

　まず考えられることは、かれらの逃げ足の敏捷さとか群をつくっての防衛であるが、もう一つ草を主食にしてきたことをあげることができる。草は地球上いたるところに繁茂していて、その量が多いうえに繁殖力も高い。

　つぎに、かれらの胃袋がたいへん大きいことである。瘤胃といって四つの部屋に分かれており、食道に一番近い部屋を第一胃、つづいて第二胃、第三胃、第四胃とつづいて腸にいたる。とりわけ第一胃は特別に大きくて、ウシでは約二〇〇リットル、ヒトの赤ん坊が二人は入る。この胃はルーメンという名で呼ばれ、②ここにたくさんの草をためこんでいる。

　しかもかれらは、草をつくっている物質のなかでもっとも量の多いセルロースを消化できる。③このことはかれらが生きつづけるうえでたいへん有利にはたらいた。反芻動物は肉食獣の餌食になっても、それを補うに十分な子供が産めるほど、食に恵まれているのである。

（栗原康『共生の生態学』岩波書店　による）

※反芻動物＝一度のみこんだ食物を口に戻してかみ直す動物。

指示語の読み取り

説明的文章では、言葉や内容の繰り返しを避けるために**指示語**がよく使われる。指示語が表す内容は、次のようにして捉えるとよい。

①指示語を含む文に注目し、指示語の内容を押さえる。

②指示語が指す内容を探す。

・多くの場合、指示語の指す内容は指示語の前にある。

（例）私には大事にしている宝物がある。それは祖父からもらった時計だ。

・後に続く内容を指す場合もあるので注意する。

③探した内容を指示語に当てはめて、意味が通じるか確かめる。

（例）（私が）大事にしている宝物は祖父からもらった時計だ。

例題

――線部「これ」が指す内容として適当なものを選びなさい。

ア ガゼルやヌーといった反芻動物は割合おとなしい性質の動物で、なかには敏捷さに欠ける種もいること。

イ 反芻動物はおとなしく、敏捷さに欠ける種もいるのに、なぜ肉食獣に絶滅させられずに繁栄しているのかということ。

ウ おとなしい反芻動物が繁栄しているのは、かれらが生きるうえでたいへん有利な特徴(とくちょう)をもつことに要因があること。

〔　　〕

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線①「かれら」が指すものを選びなさい。

ア 反芻動物　**イ** 肉食獣　**ウ** ヒト

〔　　〕

(2) ――線②「ここ」が指すものを選びなさい。

ア 瘤胃　**イ** 食道　**ウ** 第一胃
エ 第二胃　**オ** 第三胃　**カ** 第四胃

〔　　〕

(3) ――線③「このこと」が指す内容を、解答欄(かいとうらん)に合うように本文中から三十字以上、三十五字以内で探し、最初と最後の五字を答えなさい。

□□□□□ ～ □□□□□ こと。

説明的文章　接続語の捉え方

現在、環境問題がさまざまに議論されています。一口に環境問題といっても、地球温暖化・オゾン層の破壊・熱帯林の減少・酸性雨・有機化合物や有毒金属による地球汚染など、多くの問題にわたっており、対策も個々の問題に応じて異なっています。逆に、原因はただ一つです。人間の諸活動が、環境問題を引き起こしているからです。地上に人類が現れて以来、地球環境は汚染され続けてきたと極論を言う人もいます。実際、人類の手で多くの種が絶滅させられました。しかし、人類も自然に生まれてきた生物の一つですから、その活動が環境に影響を与えるのは必然なのかもしれません。

ただ、人類は生産活動を行うという点で他の生物とは異なった存在であり、自然では作り得ない物質を生産し、その大量消費を行うようになったのも事実です。その結果、人類の活動が地球の環境が許容できる能力と匹敵するほどのレベルに達しており、自然では浄化しきれない人工化合物があふれ、新しい生命体を作る試みすらし始めています。人類は、意識しているかどうかは別として、環境を根本的に変えかねない事態を招いているのです。

かつては、「環境は無限」と考えられていました。□、環境の容量は人類の活動に比べて圧倒的に大きく、すべてを吸収処理してくれると思ってきたのです。（　）、廃棄物を平気で海や空に捨て、森林を切り、海や湖を埋立て、ダムを造ってきました。しかし、環境が無限でないことを、さまざまな公害によって学んできました。また、陸にも海にも砂漠化が進み（海にも砂漠化が進み、海藻が枯れていきます）、自然の生産力が落ち始めています。確かに、このままの消費生活を続けると、地球の許容能力を越え、※カタストロフィーが起こるかもしれません。人類の未来は、環境問題の危機をいかに乗り切るかにかかっていると言っても過言ではないでしょう。

（池内了『科学の考え方・学び方』岩波書店　による）

※カタストロフィー＝悲劇的な結末。破局。

例題

□に当てはまる接続語として、適当なものを選びなさい。

ア　しかし　　**イ**　つまり

ウ　ただし　　**エ**　ところで

〔　　〕

接続語の読み取り

特に説明的な文章では、接続語に注目すると内容が捉(とら)えやすくなる。それぞれの語句がどのような関係を表すのかを理解しておく。

順接	前の内容が、後の内容の原因・理由になる。	(例)だから、そこで、したがって、すると
逆接	前の内容から予想されることと逆の内容が後にくる。	(例)しかし、だが、けれども、ところが
並列(へいれつ) **累加(るいか)**	内容を並べる、付け加える。	(例)そして、また、しかも、および、なお
対比 **選択(せんたく)**	前後の内容を比べる、前後のどちらかを選ぶ。	(例)または、あるいは、それとも、もしくは
説明 **補足**	内容をまとめたり、理由や情報を補ったりする。	(例)つまり、なぜなら、ただし、たとえば
転換(てんかん)	話題や観点を変える。	(例)ところで、さて、では

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) (　)に当てはまる接続語として、適当なものを選びなさい。

ア だから　**イ** しかし
ウ なぜなら　**エ** ところで

[　　]

(2) 本文の内容に合うものを選びなさい。

ア 環境問題はさまざまな種類の問題にわたっているが、その対策としてはただ一つしかない。

イ 人類の生産活動によって生み出された人工化合物の中には、自然では浄化しきれないものがある。

ウ 自然の生産力をもとにもどすことによって、かつてのように環境を無限のものにすることができる。

[　　]

説明的文章　段落の要点・関係の捉え方

A　言語行動に用いられる言語記号には、キチンとした〈きまり〉があって、それに従わない勝手な記号を作り出して使うわけにはいかない。――一天にわかにかきくもってものすごい雷鳴（らいめい）がする。それを人に告げる場合、「雷がゴロゴロ鳴ってきた」と言っただけでは、何だか感じが出なくてものたりない。と思っても、自分ひとりで、「ガビダリ」というような記号を発明して、「ガビダリが……」と言ったりしたら、相手にはぜんぜん通じない。そこで、いっそうイキイキと感じを出すためにはどうするか。――〔カミナリ〕の〔カ〕のあたりに力を入れて、少し口の開きをせばめ加減に、〔ケ〕に近いような音にして発音してみると、いかにも《雷はいやなもの》という感じが出る。あるいは、〔ゴロゴロ〕の〔ゴ〕に力をこめて、少し引伸（ひきの）ばし気味に〔ゴーロゴロ〕と言ってみると、今度は、雷鳴のようすがよく伝わるようになる。（中略）

B　こんなぐあいで、記号を発明するのは無理だが、すでに通用している記号の中から適当なものを選び出す・それを組合わせる・それに加えて音声の出しかたを工夫（くふう）する・補助的な動作をあわせて行う、……というように、〈言語行動のしかた〉に工夫をこらすことはできる。その工夫がうまいかまずいかによって、自分の意図するとおりの効果があがったり、あがらなかったりする。すなわち、言語行動には、記号の〈きまり〉のわくからはずれない範囲（はんい）で、行動を有効に達成するために〈技術〉を加えることができる。

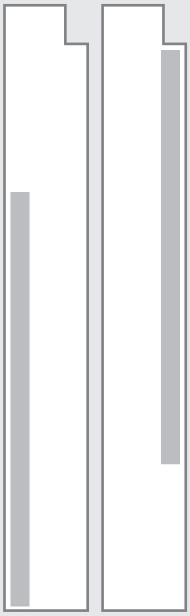
C　野球のバッターは、バッター・ボックスに入って、ピッチャーの球を打たなければならない。オレはもっと一塁（るい）ベースに近いところで打つんだ、などというわがままは許されない。これは野球の〈きまり〉である。が、バットの根本から何センチのところをにぎってかまえろ、とか、どんなふうに飛んでくる球を打て、とかいうようなルールはない。それは、バッターが工夫研究してみがくべき〈技術〉の問題である。コトバの場合も、きまりと技術とは、似たような関係にある。

（金田一春彦『話し言葉の技術』講談社 による。一部表記を変えた箇所がある）

段落の要点・関係

各段落の**要点**（中心となる内容）を捉（とら）えるには、次のような箇（か）所（しょ）・表現に注目するとよい。

・各段落の初めや終わり。



・「まとめ」や「筆者の意見」を表す文。

（例）つまり、……。　このように、……。
……と思う。　……べきだ。

各段落の要点や、段落の冒頭（ぼうとう）の接続語などに注目すると、段落どうしの関係がわかりやすくなる。

例題

本文のAとBの段落の関係について、正しく述べたものを選びなさい。

ア Aで示した内容について、Bでは根拠を述べている。

イ Aで示した一般的な意見に対して、Bで反論している。

ウ Aで示した要点に補足する内容を、Bで提示している。

［　　］

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) Cの段落の内容を正しく述べたものを選びなさい。

ア Bで述べたことをまとめ、結論と筆者の主張を簡潔に提示している。

イ Bで示した内容について、たとえを用いてわかりやすく説明している。

ウ Bに対して、別の事例を出すことで言語行動の特殊さを示している。

［　　］

(2) ――線部「コトバの場合も、きまりと技術とは、似たような関係にある」とあるが、本文中に示されている次の例のうち、言葉における技術に当たるのはどちらか。適当なものを選びなさい。

ア 雷に対して、それまでに通用していない「ガビダリ」という記号を発明する。

イ 雷の「カ」のあたりに力を入れ、「ケ」に近いような音にして発音してみる。

［　　］

説明的文章　段落の役割・要旨の捉え方

1 対話とは、真理を求める会話である。対話とは、何かの問いに答えようとして、あるいは、自分の考えが正しいのかどうかを知ろうとして、誰かと話し合い、真理を探求する会話のことである。ただ情報を検索すれば得られる単純な事実ではなく、きちんと検討しなければ得られない真理を得たいときに、人は対話をする。それは、自分を変えようとしている人が取り組むコミュニケーションである。

2 ショッピングや仕事でのやり取りは、自分の要望と相手の要望をすり合わせようとする交渉である。友人や恋人との会話は、よい関係を保ち、相手を理解し、互いに話を楽しもうとする交流である。これらの会話は有意義かもしれないが、真理の追求を目的としてはいない。対話は、何かの真理を得ようとして互いに意見や思考を検討し合うことである。

3 私たちは日常生活の中で、ほとんど対話する機会がないのではないだろうか。それは、真理の追求が日常生活で行われなくなっているからである。だが実は、対話をしなければならない場面は、日常生活の中にも、思ったよりもたくさんあるのだ。

4 仕事場でも、ただ当面の与えられた業務をこなすだけではなく、仕事全体の方向性や意味が問われる場合、たとえば、「良い製品とは何か」「今はどういう時代で、どのような価値を消費者は求めているのか」「環境問題に対して、我が社は頬かむりをしていていいのか」など真剣に論じるべきテーマは少なくないだろう。家庭でも、子どもの教育をめぐって、そもそも子どもにとっての良い人生とはなにか、そのために何を学んでほしいのか、親と子どもとはどういう関係なのか、子離れするとはどういうことか、これらのことについて家族で話し合う必要はないだろうか。地域でも、どのような地域を目指せばいいのか、住人はどのような価値を重んじているのか、以前からの住人と新しく来た人たちはどう交流すればよいか。本当はこうしたことについて膝を突き合わせて対話する必要があるのではないだろうか。

（河野哲也『人は語り続けるとき、考えていない　対話と思考の哲学』岩波書店　による）

例題

2段落の内容について、正しく述べたものを選びなさい。

ア　対話の具体的な事例を挙げ、1段落の内容をわかりやすく述べている。

イ　対話ではない事例を挙げ、1段落で示した対話の特徴を説明している。

ウ　対話の長所と短所を述べ、1段落の論を発展させながら筆者の主張を提示している。

〔　　〕

段落の役割と要旨

説明的文章を読むときには、各段落の文章中での役割に注目するとよい。

導入 **話題提示** **問い**	話題に導く。 話題を提示する。
根拠 **具体例** **答え**	根拠を示す。 例や対比を用いて具体的に説明をする。
まとめ **主張**	説明をまとめる。 筆者の主張を示す。

特に説明的文章では、「問い」を投げかけるかたちで**話題**が示されることが多い。「問い」と、それに対する「答え」に注目すると、文章の**要旨**（文章の中で最も伝えたいこと）を捉えやすくなる。

また、序論・本論・結論のまとまりにも注目するとよい。

・**序論**…話題を提示する。
・**本論**…事例や根拠を挙げて具体的に説明する。
・**結論**…内容をまとめる。主張を述べる。

（文章の構成の例）
・頭括型　**結論** → 本論
・尾括型　（導入） 本論 → **結論**
・双括型　**結論** → 本論 → **結論**

確認テスト

本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) 4段落の内容について、正しく述べたものを選びなさい。

ア　具体的な事例を挙げ、3段落の内容に説得力をもたせている。
イ　対照的な事例を挙げ、3段落から話題を転換している。
ウ　予想される反論を示し、3段落に補足説明を行っている。

〔　　〕

(2) 本文を、次の内容のまとまりで前半と後半に分けたとき、後半はどの段落から始まるか。段落番号を答えなさい。

前半　対話は、真理を探求する会話であるということの説明。
後半　日常生活における対話の必要性についての問題提起。

〔　　〕

(3) 次のそれぞれの会話は「交渉」「交流」「対話」のどれに当たるか。

ア　相手とのよい関係を保ち、互いに話を楽しもうとする会話。
イ　自分の要望と相手の要望をすり合わせるためにする会話。
ウ　真理を得ようとして互いに意見や思考を検討しあう会話。

交渉〔　　〕　交流〔　　〕　対話〔　　〕

文学的文章 場面・状況の捉え方

（ある日学校から帰った孝次は、母から、家を訪ねていた旧家の娘・幾子を蜜柑畑に連れて行き、蜜柑をもいでやるよう言われました。）

土間の暗さに慣れた孝次の眼には、その時、※セルの着物に※メリンスの兵古帯をしめた八、九歳の大人しい少女の姿が映っていた。そしてその少女の、顔の割にひどく大きい眼が孝次を見上げた時、孝次は堪まらない気恥ずかしさに襲われた。なぜか、この少女と並んで裏山の蜜柑畑へ登って行くことは自分には難しい仕事のような気がした。

「行くべえや。俺もいでやらあ」

その時孝次と一緒に学校から退けて来て、まだ其処に居た兵太郎が背後から声をかけた。

兵太郎のその言葉で孝次は、

「ざるへいっぱいもぐんかい」

と母親の方へ声をかけ、幾子の方は見向きもしないで土間を飛び出した。

孝次は兵太郎と並んで丘陵の斜面を登って行った。一度も背後を振り向かなかった。しかし地面を敲く小さい草履の音が、直ぐ自分の背後で聞えているのを、彼は両の耳を大きくして聞いていた。

蜜柑畑は、入江に面した丘陵の斜面を覆って見遥かすように拡がっていた。孝次の家の蜜柑畑は丘陵の背に近いところにあって、その場所柄のためか、村の沢山の蜜柑畑の中でも毎年色づくのが一番早いので知られていた。

孝次と兵太郎は、同じ一本の蜜柑の木に攀じ登った。そして黄色く熟れた果実を鋏で切った。ちょきんと鋏の音がすると蜜柑は木から離れ地面に落ちた。

（井上靖『晩夏——少年短篇集』中央公論新社　所収「蜜柑畑」による）

※セル＝薄手の毛織物。　※メリンスの兵古帯＝薄く柔らかい織物で作った子供の帯。

場面・状況の読み取り

文学的文章は、時・場所・登場する人物が変わる箇所に注目し、場面に分けながら読むとよい。場面を捉えることで、物語の展開や登場人物の心情の変化が読み取りやすくなる。

・いつ（時代、季節、時期、時刻）
・どこで（登場人物がいる場所、出来事が起きる場所）
・だれが（どんな人物が登場しているか）
・どうした（何をして、何があって、結果どうなったか）

また、場面が変わったときは、まずはその場面の状況を理解することが大切である。

・「いつ」「どこで」の出来事が描かれているか。
・「だれが」その場面に登場し、人物の設定や人物どうしの関係はどう描かれているか。

※「　」内の文（会話文）とそれ以外の文（地の文）で、登場人物の呼び方が異なる場合があるので整理しながら読む。登場人物が多い場合は相関図などを作りながら読み進めるとよい。

例題

場所の変化に注目して本文を分けたとき、蜜柑畑に向かう場面はどこから始まっているか。その最初の五字を答えなさい。

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) 孝次がいる場所を、本文の流れに沿って並べ替えなさい。

ア 丘陵の斜面　**イ** 土間　**ウ** 蜜柑畑

〔　→　→　〕

(2) 本文の状況を正しく述べたものを選びなさい。

ア 兵太郎は孝次から一緒に来るように頼まれ、蜜柑畑に行くことになった。

イ 幾子は土間の場面では登場せず、蜜柑畑の場面ではじめて登場する。

ウ 孝次と兵太郎は並んで丘陵の斜面を登っていき、蜜柑畑では同じ木に登った。

〔　〕

(3) ――線部「彼は両の耳を大きくして聞いていた」とは、誰のどのような様子を表しているか。適当なものを選びなさい。

ア 孝次の、後ろについてきている少女が気がかりな様子。

イ 孝次の、蜜柑畑に行かなければならないことに反発する様子。

ウ 兵太郎の、少女が斜面を登れるかどうか心配する様子。

エ 兵太郎の、後ろを見ようとしない孝次に困惑する様子。

〔　〕

文学的文章　心情・人物像の捉え方

「決めた。あたし、吹奏楽部に入る。千鶴も一緒にやろうよ」
しほりんに誘われるまでもなく、千鶴の気持ちも吹奏楽部へ傾いていた。
放課後の音楽室にいる自分を、千鶴はたやすく想像できた。すぐに上達するほど器用じゃなくても、まじめに練習を積んで、着実に成長していく自分。仲間や先輩たちともそれなりにうまくやっていく。ありありとイメージできる。できすぎる。
「あのね、わたし……中学生になったら、変わりたいって思ってたんだ」
千鶴は初めてしほりんに打ちあけた。
「今までとはちがう自分になりたくて。吹奏楽部は、すごくいいと思うし、すごくやってみたい。でも、それじゃ、今までのわたしと一緒って気もして……」
うまく言えない。①じれったく黙りこむ千鶴の横顔を、しほりんがじっと見つめている。千鶴が本気のとき、しほりんはいつもおなじくらいの本気さで何かを返そうとしてくれる。ちょうどいい言葉が見つからなくても、見つけだすまであきらめない。
けれど、この日は早かった。
「うん」
胸もとのスカーフをのぞきこむように、しほりんはこっくりうなずいて言ったのだ。
「わかるよ。千鶴の気持ち」
「え」
「あたしも、そんなふうに思うことあるし」
「しほりんも？」
「うん。でも、それでもあたし、千鶴は千鶴らしいことをしたほうがいいと思う」
「そうかな」
「わざと自分らしくないことをするより、千鶴は千鶴らしいことをして、今までの千鶴以上にそれをがんばって、その先に、今までとちがう千鶴がいるんじゃないのかな」
千鶴は千鶴らしいことをして、今まで以上にそれをがんばって、その先に、今までとちがう千鶴がいる――。
千鶴はその言葉を吸いこんだ。とたん、道のむこうに広がる夕焼け空が朝焼けみたいに光り方を変えた。
「うん。そうかも。そうならいいな」
②すうっと肩から力がぬけた。

（森絵都『クラスメイツ〈前期〉』ＫＡＤＯＫＡＷＡ　による）

例題

「千鶴」の心情が変化したことを、情景描写を通して表現している一文を本文中から探し、最初の三字を答えなさい。

心情・人物像の読み取り

文学的文章で心情を捉えるためには次の内容に注目する。
①「誰の」心情か（主語）
②「誰・何に対する」心情か（対象）
③「どんな」心情か（心中）
心中は直接書かれるだけでなく、会話、動作、表情、情景描写に表れることも多い。
（例）目を丸くした。思わず体をのけぞらせた。
→驚きなど
進む先にはどんよりとしたくもり空が広がっていた。
→憂鬱など

また、登場人物ごとの人物像を理解しておくと、物語の展開が捉えやすい。
・人物の設定（年齢・性格・職業）
・人物がおかれた状況・境遇
・人物の価値観や考え
などに注目して読み進めるとよい。

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ——線①「じれったく黙りこむ千鶴」とあるが、このときの千鶴の心情として適当なものを選びなさい。

ア 自分の思いをうまく言葉にできず、もどかしく思っている。
イ 相手が答えを返してくれず、戸惑いを感じている。
ウ 中学校ではちがう自分になれることを必死に願っている。

〔　　〕

(2) ——線②「すうっと肩から力がぬけた」から読み取れる千鶴の様子として適当なものを選びなさい。

ア あきれ果てる様子。
イ 迷いがなくなった様子。
ウ 本心をとりつくろう様子。

〔　　〕

文学的文章

表現・描写の捉え方

（夏休み、「私」の家に毎年の恒例行事として親戚が泊まりに来ました。洸兄とその姉のマリさんは、いつものように「私」やチエミの面倒を見てくれていましたが、高校生になっていたマリさんは、宿題をするという口実で一足先に帰ってしまいました。次の文章は洸兄が帰りの車に乗り込んだ場面です。）

洸兄とおばちゃんが手を振る、車の窓が遠ざかる。砂利道から出て、学校とは逆のほうへ、長い長い一本道を車は行く。次の集落に入るまで、ずっと車は見えていて、私たちは手を振り続ける。洸兄たちも、私たちが消えるまでえんえん手を振っている。

【赤い屋根の家の陰に、車がすっと隠れてしまうと、じいちゃんもばあちゃんもフーッと大きくひと息ついた。「終わった終わった」などと腰を伸ばしながら家のほうへ引っ込んでいく。いつもなら私とチエミもすぐそれに続くのだけれど、①チエミはうつむいて動かなかった。私もそこでじっとしていた。】

「ねえちゃん」

チエミがふいに顔を上げた。②ぎらぎらと濡れた瞳が、まっすぐに私を見た。

「マリちゃん、もう来ないよね」

来ないだろうね、とあやうく返しそうになるのを、ぎりぎりのところで呑み込む。

「わかんないよ。来年になってみなくちゃわかんないよ」

私は腰をかがめて、チエミの両手をにぎった。小さな手はとても熱い。

チエミがぼろんと大粒の涙をこぼして、思わずつられそうになるのをこらえた。うつむいたら足元で、蝉の死骸に蟻がたかっていた。蝉は、夏の陽に焼かれきってしまったかのように乾いていた。

（豊島ミホ『夜の朝顔』集英社 による）

表現・描写の特徴

文章は、表現や描写の仕方にさまざまな特徴がある。

●**文体**（文章の様式、スタイル）
・文末…常体「〜だ。〜である。」（硬い印象）
　　　　敬体「〜です。〜ます。」（やさしく語りかけるような印象）
・語句…和語（やわらかい語感）、漢語（硬い語感）、
　　　　外来語（新鮮で軽快な語感）

●**語り手**…誰の視点で描かれるか。
・一人称…ある人物（「私」など）の視点から語る。
・三人称…第三者の視点から語る。

●**象徴**や**情景描写**
象徴的なものや情景を通して人物の心情が描写されることがある。

●**表現技法**
比喩（直喩・隠喩・擬人法）、体言止め、倒置、対句、反復、省略などの表現技法を用いて印象を強める。

例題

【　】の箇所(かしょ)の表現の特徴を正しく述べたものを選びなさい。

ア　「私」の視点から、登場人物それぞれのしぐさや様子を描いている。
イ　文末を敬体にすることで、心情をやさしく語りかけるように描いている。
ウ　「私」の祖父母の視点から、親戚が帰ってほっとひと息つく家族の様子を描いている。

〔　　〕

確認テスト　本文を読んで、問いに答えなさい。

(1)　――線①「チエミはうつむいて動かなかった」とあるが、この表現について正しく述べたものを選びなさい。

ア　チエミのつらい心情を、チエミの様子を通して描いている。
イ　「私」とチエミのすれちがいを、しぐさによって描いている。
ウ　家族が感じた安堵(あんど)を、時間がとまったかのように描いている。

〔　　〕

(2)　――線②「ぎらぎらと濡れた瞳」は何を表しているか。適当なものを選びなさい。

ア　チエミの子どもらしい無邪気(むじゃき)な様子。
イ　チエミに真夏の日差しが照りつける様子。
ウ　チエミが涙を浮(う)かべている様子。

〔　　〕

文学的文章　主題の捉え方

嫁入り道具が、日増しに揃って行った。

姉が一時に大人びて映り、まぶしく見えることもあった。まぶしさが別離の日の悲しみや、父と共々この家に取り残される淋しさに変わって、激しく胸を打たれる日もあった。

ある日曜日の午後であったと思う、僕は姉と親戚へ行った。その帰り路に、姉が何気ない風に云った。

「節ちゃん、あたしが居なくなっても、さびしくない？」

「――――」

僕はだまっていた。

「お父様だって、お困りになるわね」

しばらく間を置いて、姉は思い切ったように、言葉をつづけた。

「あたし、節ちゃんに相談があるの。――鵠沼の、桂おばさま、ね、知ってるでしょう？」

「知ってるよ」

突然のことで、姉が何を云おうとするのか、僕には分からなかった。

桂おばさまというのは、死んだ母の遠縁に当たる、母より三つ四つ若い、美しい人であった。（中略）

「桂さんに、――あたしの代わりに、家へ来ていただいたらと思ったの。お父様に話したら、節雄が好ければ、っておっしゃるのよ」

ドキンとした。みんな、自分を可愛がってくれる人は行ってしまって、お体裁に、代わりの人を置いてゆこうとしている。――そんな気もした。

①「僕、嫌だ」

そういえば、桂さんはこの頃、二、三度家へ遊びに来ている。自分には何も云わず、みんなでそんな事を進行させていたに違いない、――そんな風にも想像した。

「このこと、あんまり突然だから、あなたには呑み込めないかも知れないけど、あたしがお嫁に行ってしまったら、お父様だって随分お困りになるし……」

「お父様は、勝手に旅行してればいいさ」

②僕はすげなく云い切った。姉は淋しそうに、そのまま黙った。

（永井龍男「胡桃割り」講談社 による）

主題の読み取り

作者が文章を通じて表現しようとしている中心的な内容を主題という。

物語の主題を捉えるには、次の点に注目するとよい。

・人物を通して描かれる価値観や考え、人物の心情の変化や成長。
・出来事の展開、各場面における人物の行動。
・作品の状況設定、時代背景。

例題

本文で描かれている「僕」の心情を、本文の流れに沿って並べ替えなさい。

ア 自分の周囲の人間が、自分の知らないところで話を進めていたことに反感をおぼえた。

イ 姉との別れがくることを悲しく思い、自分が家に取り残されてしまうことへのさびしさにおそわれた。

ウ 自分を可愛がってくれる人が、体裁だけ取り繕って、みないなくなってしまうのではないかと感じた。

〔　→　→　〕

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線①「そういえば……遊びに来ている」とあるが、ここで「僕」は何を考えているのか。適当なものを選びなさい。

ア 桂さんが、自分の母の遠縁に当たる親類だったということを思い起こしている。

イ 姉の代わりに、桂さんに自分の家に来てもらうべきかどうか決めかねている。

ウ みんなが自分のいないところで桂さんを家にむかえる話を進めていたのではないかと考えている。

〔　〕

(2) ――線②「僕はすげなく云い切った」とあるが、このときの「僕」の様子を正しく述べたものを選びなさい。

ア 父が困るとは思えず、桂さんが来る必要はないのではないかと考えをめぐらせている。

イ 突然のことで事態を受け入れることができず、どうすればよいかと途方に暮れている。

ウ 姉が居なくなる悲しさもあり、自分を置いて話が進んでいたことに反発し冷淡な態度をとっている。

〔　〕

随筆 事実と意見・感想の見分け方

私の小学生時代は戦後の混乱期だったから、大勢の子供を抱えて必死に生きていた父や母の姿を私はいつも遠くから眺めていたように思う。

米を買いにどこの農家に行ったらいいのか、衣類をどこで手に入れようかと相談している様子、借家を転々とするたび細い体で※大八車を黙って引いていた父の姿、そんなものが父や母からの一番強烈な私へのメッセージである。いってみれば、人生をひたむきに生きるということを、私は無言のうちに教えられていたのかもしれない。

それでも、父の心に直接触れたような気になったことが一度だけある。

A【それはもう私が中学に通っている頃なのだが、ある日父の書斎の机に乗っていた一枚の紙片を見つけた。そこには父独特の右上がりの字で、

子等いねて雨音近きこたつかな

という俳句が書かれていた。】

B【私はそれまで父が俳句を作ることなど知らなかったから、その一枚の紙が父の日記のように思えて、父の心の中を覗いてしまったような、バツの悪さを感じた。が、そうしたうしろめたさと同時に父の子供に対する思いを発見したことに興奮した。】

おそらく父は、私たちが寝静まったあと、部屋の隅の炬燵で一人何か下調べをしていたのだろう。その時ふと雨の音を聞いて思い浮べた句を何気なく書き留めていたにちがいない。

「子等いねて」ということばの中に、普段あまり感情をみせない父の、子供に対する生な情愛が感じられて、そのことばが私の心の中で温かく溶けていくようであった。

（森本毅郎『幸せのものさし』講談社 所収「日記」による）

※大八車＝大きな荷車の一種。

例題

Aと**B**の箇所は、事実と、意見・感想のどちらが中心に描かれているか。事実なら**ア**、意見・感想なら**イ**でそれぞれ答えなさい。

A〔　　〕 **B**〔　　〕

事実と意見・感想の区別

筆者の体験・見聞・感想などを、筆に任せて自由な形式で書いた文章を**随筆**（ずいひつ）という。随筆には、体験などを文学的に描いたもの、筆者の見方・考え方を説明的に述べたものなどさまざまな形式がある。

	話題	内容
文学的随筆	季節・自然・旅・日常・家族　など	体験や、それに対する感想・思いなど。
説明的随筆	言語・社会・科学・読書・生き方　など	ものの見方や筆者の考えなど。

随筆は、次の点に注意して読み進めるとよい。

①**話題**を捉（とら）える。
　題や、繰（く）り返し使われる語句に注目する。

②**事実**と**意見**・**感想**を区別する。
・事実……筆者の体験や見聞など。
・意見・感想……経験や見聞に対する筆者の思い・考え。
※意見・感想を表す文末表現
　（例）…と思う。…と感じる。…だろう。…べきだ。

③**主題**（筆者が特に伝えたい内容）を捉える。
※意見・感想の部分に描かれていることが多い。

確認テスト

本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線部「米を買いに……父の姿」とあるが、このような父と母の様子は、小学生時代の筆者にはどのような姿に感じられたのか。（　）に入る言葉を、本文中から十一字で書きぬきなさい。

（　　　　）姿。

(2) 本文の内容に合うものを選びなさい。

ア 大勢の子供を抱えて必死に生きる父の姿を見たことは、父の心に直接触れたと感じる出来事だった。

イ 父の俳句を見た筆者は、父の心の中を覗いてしまったかのようできまりが悪く感じた。

ウ 筆者の父はあまり感情をみせない人物だったので、強烈なメッセージのこもった俳句に筆者は困惑（こんわく）した。

〔　　〕

随筆　筆者の見方・考え方の読み取り

冬の林の最も大きな愉しみのひとつは、裸になった梢の姿を眺めることである。真冬の小さな固い芽は、萎縮して堪えているのでは決してなく、エネルギーの凝縮するさまであり、その不可思議な木の息が林全体に生気を与える。同じように葉はなくても、枯れた林と、生きている林の違いは余りにも大きい。

昔から画家たちは、じっと自然を見つめ続けて、梅は梅の枝、桜は桜の枝振りを画布にのせて来た。脇芽の出方、一本の枝の反り具合、枝と枝との間隔、それぞれに梅には梅の、桜には桜の性格がある。

ミツマタはその名の示す通り、枝分かれは常に三つの岐に分かれることを繰り返して伸びる。しかし、どのミツマタも決して同じミツマタではなく、一本一本が微妙に異なるその姿が、機械では造れない造化の神の妖しい業、自然の樹の姿である。

クヌギにしても、ナラにしても、林には一本として全く同じ枝の繰り返しはない。しかも、それぞれの枝の伸び方は、気ままのようでいて、結果としてはクヌギにはクヌギ、ナラにはナラの枝振りがある。

人の姿もまた同じようなものであろうか。それぞれに自己主張を続け、個性を誇ったところで、人には人の姿がある。また、どんな制服を着せて、同じ教育をしたところで、一人として全く同じ人間というものは出来上がらない。

植木屋がいかに梅を松のように剪定しても、梅は梅にしか育たないが、同時に、一本として同じ梅の木はない。

（大庭みな子「木の姿」による）

筆者の見方・考え方と主題

随筆に表れる筆者特有の見方や考え方を捉えると、**主題**が読み取りやすくなる。

①文章の題や、繰り返し使われる語句などに注目し、**話題**を読み取る。

②話題に対する**筆者の意見・感想**を読み取る。

③**筆者特有の思い・考え**を捉える。

※特に、表現技法や印象的な描写が使われている箇所、筆者特有の視点が表れている箇所に注目する。

例題

本文中から、次の内容が中心的に書かれている段落を探し、その最初の五字を答えなさい。

木々の姿をもとに考えた、人のあり方。

[　　　　　]

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) 本文中で描（えが）かれているクヌギやナラのあり方について、次の**A**と**B**は、人のどのようなあり方と対応しているか。適当なものをそれぞれ選びなさい。

A クヌギもナラも、一本として全く同じ枝の繰り返しはない。

B クヌギにはクヌギ、ナラにはナラの枝振りがある。

ア どんなに個性があるといっても、人には人の姿がある。

イ 同じ教育をしても、一人として全く同じ人間とはならない。

A［　　］ **B**［　　］

(2) 本文の内容に合うものを選びなさい。

ア 木は、同じ種であればどんな環境（かんきょう）でも同じ姿になるので、木と人では個性のあり方が根本的に異なる。

イ 木は、その種に特有の姿がありながらも一本として同じものがなく、人の姿に通じるものがある。

ウ 木は、どのように育てられるかによって姿が異なるので、梅が松のような枝振りに育つこともある。

［　　］

和歌―万葉・古今・新古今 (1)

和歌の世界

和歌は日本古来の定型の歌で、日本では古くからさまざまな人の詠んだ和歌を集めた歌集が作られてきた。代表的な歌集には『万葉集』『古今和歌集』『新古今和歌集』がある。

●万葉集

成立　**奈良時代**の末頃までに成立

歌風　素朴、力強い

現存する日本最古の歌集で、二十巻、約四千五百首の歌を収める。長い期間にさまざまな人によって編纂されており、大伴家持によっておおむね現在の形にまとめられたとされる。代表的な歌人は、額田王、柿本人麻呂、山部赤人、山上憶良、大伴家持など。

天皇、貴族のほか、兵士や農民といった民衆の歌も収められている。日本語の音を漢字で表す**万葉仮名**が用いられている。

（例）波都波流（初春）

年	時代	作品
	奈良	『万葉集』この頃までに成立
800	平安	
900		『竹取物語』『古今和歌集』
1000		『枕草子』『源氏物語』
1100		
1200	鎌倉	『新古今和歌集』

●古今和歌集

成立　**平安時代**初期

撰者　紀友則・**紀貫之**・凡河内躬恒・壬生忠岑

歌風　技巧的、理知的で、繊細、優美

天皇や上皇の命によって作られた歌集を勅撰和歌集といい、古今和歌集は、醍醐天皇の勅命で作られた、**最初の勅撰和歌集**である。二十巻、約千百首の歌を収める。代表的な歌人は、在原業平、小野小町、紀貫之など。

仮名で書かれた序文「**仮名序**」、漢文で書かれた「真名序」が収められている。古今和歌集の「仮名序」は紀貫之によって書かれたとされ、和歌の本質や※六歌仙への評、古今和歌集の編集の経緯などが記されている。

●新古今和歌集

成立　**鎌倉時代**初期

撰者　源通具・藤原有家・**藤原定家**・藤原家隆・藤原雅経・寂蓮法師

歌風　自然美や感情が、象徴的・幻想的に表現されている。体言止めなどの技巧が多用され、余情にあふれる。

後鳥羽上皇の命によって作られた、八番目の勅撰和歌集。二十巻、約千九百八十首の歌を収める。代表的な歌人は、西行法師・式子内親王など。

※六歌仙…僧正遍昭、在原業平、文屋康秀、喜撰法師、小野小町、大伴（大友）黒主。

確認テスト

(1) 次の①〜③の歌集が成立したとされる時代をそれぞれ選びなさい。

① 古今和歌集 〔　　〕
② 新古今和歌集 〔　　〕
③ 万葉集 〔　　〕

ア 奈良時代　イ 平安時代　ウ 鎌倉時代

(2) 次の①・②の歌集の撰者として適当な人物をそれぞれ選びなさい。

① 古今和歌集 〔　　〕
② 新古今和歌集 〔　　〕

ア 大伴家持　イ 紀貫之　ウ 藤原定家

(3) 次の中から最初の勅撰和歌集とされるものを選びなさい。

ア 古今和歌集　イ 新古今和歌集　ウ 万葉集 〔　　〕

(4) 次の説明に当てはまる歌集を選びなさい。

幅広(はば)い階層の人々の歌が収められており、素朴で力強い歌風である。日本語の音は漢字を用いて表されている。

ア 古今和歌集　イ 新古今和歌集　ウ 万葉集 〔　　〕

和歌の基礎(きそ)知識

和歌は五音と七音を基調としており、代表的な形式に短歌と長歌がある。

・**短歌**…五・七・五・七・七の三十一音の歌。

・**長歌**…五・七を三回以上繰(く)り返し、最後を多くは七・七で結ぶ歌。
　長歌の後には**反歌**(はんか)とよばれる歌が添(そ)えられ、長歌の意味を要約したり補足したりする。

音数が五音・七音の定型となっていないものもあり、音数が定型より多いものを**字余り**、定型より少ないものを**字足らず**という。

●句切れ

一首の中の意味上の切れ目を句切れという。短歌の句切れには、**初句切れ・二句切れ・三句切れ・四句切れ・句切れなし**、などがある。

（例）五（初句）・七（二句）／五（三句）・七（四句）・七（結句）…二句切れ

句切れの位置によって、歌のリズムは異なる。

・五七調…二句切れ・四句切れ。万葉調。

・七五調…初句切れ・三句切れ。古今(こきん)調・新古今調。

古今和歌集　仮名序

やまとうたは、人の心を種として、よろづの言(こと)の葉とぞなれりける。
やまと歌（和歌）は、人の心を種として、さまざまな言の葉（言葉）となったものである。

世の中にある人、ことわざ繁(しげ)きものなれば、
この世の中に生きる人々は、関わりのある出来事が多いものだから、

心に思ふことを、見るもの聞くものにつけて、言ひ出(いだ)せるなり。
託して、言い表すのである。

花に鳴く鶯(うぐひす)、水にすむ蛙(かはづ)※河鹿の声を聞けば、

生きとし生けるもの、いづれか歌を詠(よ)まざりける。
どれが歌を詠まないということがあろうか。

力をも入れずして天地(あめつち)を動かし、

目に見えぬ鬼神(おにがみ)をもあはれと思はせ、
精霊たちをもしみじみと感じさせ、

男女(をとこをんな)の仲をも和(やは)らげ、
親しくさせ、

猛(たけ)き武士(もののふ)の心をも慰(なぐさ)むるは、歌なり。
勇猛な　なごませるのは、

※河鹿…カジカガエル。清流に生息し、夏から秋にかけて澄んだ声で鳴く。

確認テスト

(1) 次の歌には、五音・七音の定型となっていない箇所（かしょ）がある。その箇所が、字余りならア、字足らずならイで答えなさい。

風になびく富士（ふじ）の煙（けぶり）の空に消えてゆくへも知らぬわが思ひかな
西行（さいぎょう）法師（新古今和歌集・雑歌中）

風になびく富士の煙が空にゆくえも知らず消えるように、行き先もわからない私の思いであるよ。

〔　　〕

(2) 次の三首は句切れが共通している。共通する句切れを、漢字で答えなさい。

さびしさはその色としもなかりけり真木（まき）立つ山の秋の夕暮れ
寂蓮（じゃくれん）法師（新古今和歌集・秋歌上）

さびしさはその色のせいだというのでもない。真木（杉やひのき）が茂る山の秋の夕暮れよ。

心なき身にもあはれは知られけり鴫（しぎ）立つ沢（さは）の秋の夕暮れ
西行法師（新古今和歌集・秋歌上）

ものの趣を感じることのないこの身にも、しみじみとした趣が感じられることだ。鴫が飛び立つ沢の秋の夕暮れよ。

見わたせば花も紅葉（もみぢ）もなかりけり浦（うら）の苫屋（とまや）の秋の夕暮れ
藤原定家（ふじわらのさだいえ）（新古今和歌集・秋歌上）

見渡すと、花も紅葉もないことだ。海辺の苫屋の辺りの秋の夕暮れよ。

□ 句切れ

(3) 古今和歌集の「仮名序」を書いたとされる人物を答えなさい。

〔　　〕

(4) 次の文の解答欄（かいとうらん）に当てはまる言葉を、本文中から書きぬきなさい。

古今和歌集の「仮名序」では、和歌というものは、人の心を□として、そこから生え育った□のようなものであると述べられている。

(5) ――線部「いづれか歌を詠まざりける」が表す内容として適当なものを選びなさい。

ア いつか歌を詠むことだろう
イ いつしか歌を詠まなくなった
ウ どれもみな歌を詠むのだ
エ どれも歌を詠むことはない
オ どれでも歌に詠むことができる

〔　　〕

和歌の表現技法

●枕詞

特定の語を導くために、その直前に置かれる言葉。主に五音で、直後にくる言葉が決まっている。通常は訳さない。後の語を修飾したり、リズムを整えたりする。

（例）　紀友則（古今和歌集・春歌下）

ひさかたの光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ

日の光がのどかなこの春の日に、どうして落ち着いた心もなく（桜の）花が散るのだろうか。

・おもな枕詞

しろたへの→衣・袖・雲 など　**ひさかたの**→光・日・空 など

たらちねの→ 母 など　**ちはやぶる**→神 など

●序詞

ある語句を導くために、その前で述べる言葉。歌ごとに創作され、音数や直後にくる言葉に決まりはない。枕詞より長いものが多い。省略せずに訳す。

（例）　東歌（万葉集）

多摩川にさらす手作りさらさらに何そこの児のここだ愛しき

多摩川にさらさらとさらす手織りの布のように、さらにさらに、どうしてこの娘がこんなにもいとしいのだろうか。

※「多摩川にさらす手作り」が「さらさらに」を導く。

●掛詞

一つの語に二つ以上の同音の言葉の意味を重ねたもの。

（例）　源宗于（古今和歌集・冬歌）

山里は冬ぞさびしさまさりける人目も草もかれぬと思へば

山里はとりわけ冬こそが寂しさがまさって感じられることだ。人の訪れも絶え、草も枯れてしまうと思うと。

※「かれ」は「人目も離れぬ（人の訪れもなくなってしまう）」「草も枯れぬ（草も枯れてしまう）」の二つがかかっている。

●縁語

ある言葉に関係の深い語を用いて、歌のおもしろみを高める。

（例）　式子内親王（新古今和歌集・恋歌一）

玉の緒よ絶えなば絶えねながらへば忍ぶることの弱りもぞする

（私の）命よ。絶えてしまうものなら絶えてしまえ。生きながらえていると、秘める力が弱まって（恋心を人に知られて）しまうかもしれないから。

※「絶え」「ながらへ」「弱り」は「緒」の縁語。

確認テスト

(1) 例に従って、次の和歌に含まれる枕詞に〰〰線を引きなさい。

（例）ひさかたの光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ

ちはやぶる神世も聞かず竜田河から紅に水くくるとは　在原業平（古今和歌集・秋歌下）

（不思議なことがあったという）神代の昔でも聞いたことがない。竜田川が（流れる紅葉で）から紅色に水をくくり染めにするとは。

(2) 次の二首に共通して含まれる枕詞を探し、書きぬきなさい。

あしひきの山のしづくに妹待つと吾立ち濡れぬ山のしづくに　大津皇子（万葉集）

山の木々から落ちるしずくに、あなたを待っていた私はすっかり立ち濡れてしまった。その山のしずくに。

吾を待つと君が濡れけむあしひきの山のしづくに成らましものを　石川郎女（万葉集）

私を待つといってあなたが濡れたというその山のしずくに、なれるものならなりたかったのに。

□□□□□

(3) 次の歌の〰〰線部は、「あかでも」を導いている。このような言葉を何というか答えなさい。

結ぶ手の滴ににごる山の井のあかでも人に別れぬるかな　紀貫之（古今和歌集・離別歌）

両手を合わせてすくい上げた手からしたたる滴で濁り、十分に飲むことができない山の井のように、満足できないまま、あなたと別れてしまうことだなあ。

〔　　　〕

(4) 次の歌の――線部は、ある言葉との掛詞になっている。訳を参考に、解答欄に当てはまる言葉を答えなさい。

世の中は何か常なるあすか川昨日の淵ぞ今日は瀬になる　よみ人知らず（古今和歌集・雑歌下）

世の中はいったい何が永遠であろうか（いや永遠のものなどない）。明日の名を持つ飛鳥川も、昨日は淵であったところが、今日は瀬となっている。

飛鳥川と□□の掛詞

(5) 次の歌には、「衣」に関係の深い「き」「なれ」「つま」「はる」が用いられている。このような言葉を何というか答えなさい。

唐衣きつつなれにしつましあればはるばるきぬる旅をしぞ思ふ　在原業平（古今和歌集・羇旅歌）

唐衣を着つづけてなじむように、慣れ親しんだ妻が（都に）いるので、はるばるやってきたこの旅のさびしさを思う。

〔　　　〕

万葉集

A

春過ぎて夏来るらし※白たへの衣干したり天の※香具山

春が過ぎて、夏が来たらしい。真っ白な衣が干してあるよ。天の香具山に。

持統天皇

B

東の野に炎の立つ見えてかへり見すれば月傾きぬ

東の野にあけぼのの光がさすのが見えて、振り返って見ると月は西に傾いている。

柿本人麻呂

C

君待つと吾が恋ひ居れば我が屋戸のすだれ動かし秋の風吹く

あなたを待って私が恋しく思っていると、我が家の戸のすだれを動かして秋の風が吹く。

額田王

※白たへ…コウゾなどの木の皮から作られる白い布。
香具山…奈良県橿原市にある山。畝傍山・耳成山と合わせて大和三山という。

D

天地の　分かれし時ゆ　神さびて　高く貴き
天と地が　神々しく
※駿河なる　富士の高嶺を　天の原　振り放け見れば
駿河にある　大空に　振り仰いで遠く見やると、
渡る日の　影も隠らひ　照る月の　光も見えず
（空を）渡る太陽の姿も隠れ、
白雲も　い行きはばかり　時じくそ　雪は降りける
（山にはばまれて流れが）行きとどこおり、時季にかかわらずに雪は降っている。
語り継ぎ　言ひ継ぎ行かむ　富士の高嶺は
言い継いでいこう

山部赤人

E

田子の浦ゆうち出でて見れば真白にそ富士の高嶺に雪は降りける

田子の浦を通って出て（遠くに）見ると、なんと真っ白に富士の高嶺に雪が降っているよ。

※駿河…現在の静岡県中央部。

確認テスト

和歌を読んで、問いに答えなさい。

(1) Aの歌は句切れが二か所ある。それぞれ漢字で答えなさい。

［　　］句切れ・［　　］句切れ

(2) Bの歌でうたわれている光景の時間帯を選びなさい。

ア　明け方　イ　真昼　ウ　夕方　エ　夜中

［　　］

(3) Cの歌にうたわれている心情を選びなさい。

ア　恋しい人を待っているときの切ない思い。
イ　恋しい人が待っているのではないかとときめく思い。
ウ　恋しい人とともに人を待つときの退屈(たいくつ)な思い。

［　　］

(4) Dの歌について、――線部の意味を選びなさい。

ア　分かれた時に　イ　分かれた時から　ウ　分かれた時まで

［　　］

(5) Eの歌は、Dの長歌に添(そ)えられたものである。このような歌を何というか。適当なものを選びなさい。

ア　東歌(あずまうた)　イ　旋頭歌(せどうか)　ウ　反歌(はんか)

［　　］

万葉集

F

瓜(うり)食(は)めば　子ども思ほ(オ)ゆ
栗(くり)食めば　まして偲(しぬ)はゆ
いづく(ズ)より　来たりしものぞ
まなかひ(イ)に　もとなかかりて　安眠(やすい)しなさぬ

山上憶良(やまのうえのおくら)

瓜を食べると、子どものことが思われる。
いっそうしのばれる。
（子どもというものはどんな縁があって）いったいどこから来たものなのか。
目の前に、　やたらと（子どもの面影が）ちらついて、安らかに眠らせてくれない。

G

反歌(はんか)

銀(しろかね)も金(くがね)も玉も何せむ(ン)にまされる宝(たから)子にしかめやも

銀も金も宝玉も　どうして優れた宝である子に及ぼうか（いや及びはしない）。

H

※多摩(たま)川にさらす手作りさらさらに何(なに)そこの児(こ)のここだ愛(かな)しき

東歌(あずまうた)

多摩川にさらさらとさらす手織りの布のように、さらにさらに、
どうしてこの娘がこんなにもいとしいのだろうか。

※多摩川…山梨県東部から東京都・神奈川県を流れ、東京湾に注ぐ川。

I

父母が頭(かしら)かき撫(な)で幸(さ)くあれて言ひ(イ)し言葉(けとば)ぜ忘れかねつる

防人歌(さきもりのうた)

父母が（私の）頭をなで、無事であれと言った言葉が忘れられない。

J

新(あら)しき年の初めの初春(はつはる)の今日降る雪のいやしけ吉事(よごと)

大伴家持(おおとものやかもち)

新しい年の初めの初春（正月）の今日降る雪のように、ますます重なれ、よいことよ。

東歌と防人歌

東国地方の歌を**東歌**という。東歌には民謡(みんよう)的な歌も多く、言葉には東国の方言がみられる。
また、防人やその家族の歌を**防人歌**という。防人は、古代、九州北部などに派遣(はけん)された兵士で、多くは東国から集められた。「父母が……」の歌は、駿河国(するがのくに)の防人・丈部稲麻呂(はせつかべのいなまろ)によるもの。

確認テスト　和歌を読んで、問いに答えなさい。

(1)　Fの歌にうたわれている思いとして適当なものを選びなさい。

ア　日々の食事や生活に感謝する思い。
イ　わが子を思い、いとしく感じる思い。
ウ　ささいなことが気になり、不安な思い。

〔　　〕

(2)　Gの歌の内容に合うものを選びなさい。

ア　どんなものであっても、子どもには及ばない。
イ　子どもというものは、金銀や宝玉と同じくらい尊い。
ウ　金銀や宝玉といったものは、子どものように大切である。

〔　　〕

(3)　例に従って、Hの歌に含まれる序詞に〰〰線を引き、序詞に導かれる言葉を□で囲みなさい。

(例)　結ぶ手の滴ににごる山の井の［あかでも］人に別れぬるかな

多摩川にさらす手作りさらさらに何そこの児のここだ愛しき

(4)　Iの歌から、「父母」が言った言葉を書きぬきなさい。

〔　　〕

(5)　Jの歌から、雪のように重なってほしいとうたわれているものを書きぬきなさい。

〔　　〕

(6)　次の歌は、古代の兵士の姿がうたわれているものである。このような歌を何というか。適当なものを選びなさい。

韓衣裾に取りつき泣く子らを置きてそ来ぬや母なしにして　他田舎人大島

衣の裾にとりすがって泣く子を、置いてきてしまった。母もいないのに。

ア　防人歌　　イ　旋頭歌　　ウ　反歌

〔　　〕

古今(こきん)和歌集

K ※人はいさ心も知らずふるさとは花ぞ昔の香(か)ににほ(オ)ひ(イ)ける

紀貫之(きのつらゆき)

人は、さあ、心がどう変わってしまったのかわかりません。(しかし、)昔なじみのこの土地は、梅の花が昔のままに香っていますよ。

(春歌上)

L 五月(さつき)待つ花橘(はなたちばな)の香をかげば昔の人の袖(そで)の香ぞする

※よみ人知らず

五月を待って咲く橘の花の香りをかぐと、昔親しんだ人の袖にたきしめた香の香りがする。

(夏歌)

M 思ひ(イ)つつ寝(ぬ)ればや人の見えつらむ(ン)夢と知りせば覚めざらましを

小野小町(おののこまち)

恋しく思いながら寝たので、あの人が(夢に)現れたのだろうか。夢とわかっていたならば、目覚めないでいただろうに。

(恋歌二)

※人はいさ…かつて奈良の長谷寺に参詣するたびに宿を借りていた人の家を、久しぶりで訪れたところ、家の主人から「このように昔のままに宿はありますよ」と言われ、そこに立っていた梅の花を折り取って詠んだ歌。「人」は家の主人を指す。

よみ人知らず…作者が不明であったり、作者の名前を記すことがはばかられる事情があったりする場合の表記。

新古今和歌集

N 春の夜の※夢の浮橋(うきはし)とだえして峰(みね)にわかるる横雲(よこぐも)の空

藤原定家(ふじわらのさだいえ)

春の夜のはかない夢がふと途切れて(目が覚めると)、峰から横雲がわかれただよいゆくあけぼのの空よ。

(春歌上)

O 道の辺に清水(しみづ)(ズ)流るる柳(やなぎ)かげしばしとてこそ立ちどまりつれ

西行法師(さいぎょう)

道のほとりに清水が流れている柳の木かげよ。ほんのしばらく(休もう)と思って、立ちどまったのであったが(涼しさに思わず長居してしまった)。

(夏歌)

P 玉の緒(を)(オ)よ絶えなば絶えねながらへ(エ)ば忍(しの)ぶることの弱りもぞする

式子内親王(しょくしないしんのう)

(私の)命よ。絶えてしまうものなら絶えてしまえ。生きながらえていると、秘める力が弱まって(恋心を人に知られて)しまうかもしれないから。

(恋歌一)

※夢の浮橋…『源氏物語』の巻の名をふまえたもの。浮き橋のように不安定ではかない夢。

確認テスト 和歌を読んで、問いに答えなさい。

(1) **K**の歌で、昔と変わらないものとしてうたわれているものを選びなさい。

ア 人の心　**イ** なじみの土地の人々
ウ 桜の花の姿　**エ** 梅の花の香り

〔　　〕

(2) **L**の歌の内容に合うものを選びなさい。

ア 五月に咲く花の香りが、昔の伝統を思い出させた。
イ 橘の香りが、昔親しんだ人のことを思い出させた。
ウ 人の袖の香りが、五月に咲いた花のことを思い出させた。

〔　　〕

(3) **M**の歌について、「夢と知りせば覚めざらましを」の意味を選びなさい。

ア 夢だと知っていたから、目覚めようとしたのに。
イ 夢だと知っていたならば、目覚めないでいただろうに。
ウ 夢だと知らせていれば、目覚めてくれただろうに。

〔　　〕

(4) **N**の歌で、夢から覚めた人物が見た風景がえがかれているのは何句目か。当てはまるものを全て選びなさい。

ア 初句　**イ** 二句　**ウ** 三句
エ 四句　**オ** 結句

〔　　〕

(5) **O**の歌の「しばしとてこそ立ちどまりつれ」の表す意味として適当なものを選びなさい。

ア 少しの間と思って立ちどまったが、思わず長い時間を過ごしてしまった。
イ しばしば立ちどまってしまったために、長い時間がかかってしまった。
ウ ゆっくり休もうと思って立ちどまり、ずいぶん長居をしてしまった。

〔　　〕

(6) **P**の歌にうたわれている心情を選びなさい。

ア 思いがけないことが起こったことへのとまどい。
イ 何気ないことから感じた、しみじみとした感動。
ウ 人に知られないようにしている、激しい恋心。

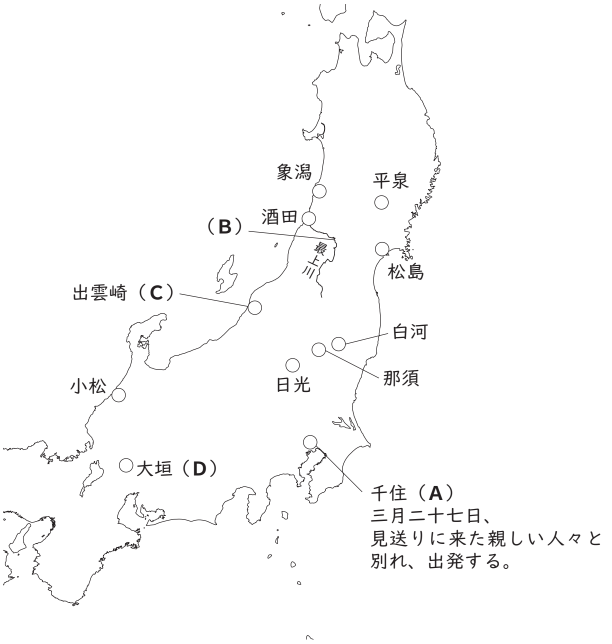
〔　　〕

古文 おくのほそ道 (1)

『おくのほそ道』の基礎知識

『おくのほそ道』は**江戸時代**前期の**松尾芭蕉**による紀行文。芭蕉（本名・宗房）は伊賀国出身の俳人で、俳諧の芸術性を高め、蕉風俳諧を創始した。

『おくのほそ道』には、芭蕉が四十六歳の元禄二（一六八九）年、門人・河合曾良とともに江戸を出発し、奥羽・北陸を経て美濃国大垣に至った旅について記されている。



A 行く春や鳥啼き魚の目は泪

過ぎ行く春よ。名残を惜しむかのように鳥は鳴き、魚も目に涙を浮かべているように感じられる。

B 五月雨をあつめて早し最上川

折からの梅雨の雨を集めて水がみなぎり、いちだんと流れが速い。この最上川よ。

C 荒海や佐渡によこたふ天河

日本海の荒海よ。海のかなたにある佐渡島にかけて天の川が横たわっている。

D 蛤のふたみに別れ行く秋ぞ

蛤が蓋と身にわかれるように、集ってくれた親しい人々と別れ、私は伊勢の二見が浦に行く、過ぎ行く秋よ。

俳諧

複数の人が長句（五七五）と短句（七七）を交互に詠み継いでいく文芸を**連歌**という。連歌は室町時代に流行し、連歌の中でも滑稽さを求めたものは、俳諧の連歌、略して**俳諧**とよばれた。また、連歌の最初の一句を**発句**という。発句には最初の句としてその時々の季節を表す語が求められた。

江戸時代になると、松尾芭蕉のほか、与謝蕪村、小林一茶といった俳人が現れ、発句は独立して鑑賞されるようになった。その後、明治時代の正岡子規らによって、近代俳句が確立した。

確認テスト

(1) 次の文の（　　）に当てはまる言葉をそれぞれ選びなさい。

『おくのほそ道』は（①）の前期に（②）によって書かれた紀行文である。

ア 室町時代　**イ** 安土桃山時代　**ウ** 江戸時代
エ 小林一茶　**オ** 松尾芭蕉　**カ** 与謝蕪村

①［　　　］　②［　　　］

(2) **A**～**D**の句の季語が表している季節をそれぞれ答えなさい。

A［　　　］　**B**［　　　］　**C**［　　　］　**D**［　　　］

(3) **A**と**C**の句は、含まれる切れ字と、句切れが共通している。共通して含まれる切れ字を書きぬき、句切れの種類を記号で答えなさい。

切れ字［　　　］　句切れ［　　　］

ア 初句切れ　**イ** 二句切れ　**ウ** 句切れなし

(4) 次の**ア**～**エ**の句を、おくのほそ道の行程の順となるように並べ替えなさい。

ア あらたふ（トウ）と青葉若葉の日の光（日光）
ああ尊いことだ。この日光山の青葉若葉に降り注ぐ初夏の日の光は。

イ 石山の石より白し秋の風（小松）
この那谷寺の石山の石よりも白く感じられる。この吹き過ぎる秋の風は。

ウ 象潟や雨に西施がねぶの花（象潟）
象潟よ。雨にけぶる風景を眺めると、古代中国の美女・西施が物思わしげに目を閉じる姿を思わせて、ねむの花が雨にぬれている。

エ 田一枚植ゑ（エ）て立ち去る柳かな（那須（蘆野））
あの西行が立ちどまったという柳の木かげで感慨にふけっていると、いつの間にか田一枚の田植えが終わって人々は去り、私も柳から立ち去ることだ。

［　　→　　→　　→　　］

『おくのほそ道』冒頭

※月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり。
月日は永遠の旅人であって、おとずれては過ぎ去る年もまた旅人である。

舟の上に生涯を浮かべ、馬の口とらへて老いを迎ふる者は、
舟の上で一生を送る者（船頭）や　馬のくつわを取って老年をむかえる者（馬子）は、

日々旅にして旅を栖とす。※古人も多く旅に死せるあり。
日々が旅であって　昔の人にも、多く、旅の中で死んだ人がいる。

予もいづれの年よりか、片雲の風にさそはれて、
私もいつの頃からか、ちぎれ雲が風に誘われるように、

①漂泊の思ひやまず、※海浜にさすらへて、
漂泊の思いがやまず、（近年は）海辺をさすらって、

去年の秋、※江上の破屋に蜘蛛の古巣をはらひて、やや年も暮れ、
隅田川のほとりのあばらやに（もどり、）蜘蛛の古巣を払って、やがて年も暮れたが、

春立てる霞の空に、※白河の関越えむと、
新春（新年）となり霞が立ちこめる空のもとで、白河の関を越えたいと、

そぞろ神の物につきて心をくるはせ、
そぞろ神がとりついて心をそわそわさせ、

※道祖神の招きにあひて取るもの手につかず。
道祖神が招いているようで何も手につかない。

②股引の破れをつづり、笠の緒付け替へて、※三里に灸据ゆるより、
つくろい、　灸をすえると、

※松島の月まづ心にかかりて、
松島の月のことがまず気にかかって、

住める方は人に譲りて、※杉風が別墅に移るに、
今まで住んでいた庵は人に譲って、杉風の別荘に移ったが、

E 草の戸も住み替はる代ぞ雛の家
わびしかった草庵も、あるじが住み替わる時が来た。
（これまでとは違って）雛人形をかざる華やかな家だよ。

※面八句を庵の③柱に懸け置く。
（という句を発句にした）面八句を（これまで住んでいた）庵の柱に掛けておいた。

※月日は～…李白の文章をふまえたもの。
古人…中国の李白・杜甫、日本の西行・宗祇など、人生の大半を旅に過ごした詩人・歌人を念頭におく。
海浜に～…一六八七年から翌年にかけて、芭蕉は鳴海（愛知県）、明石（兵庫県）などを旅した。
江上の破屋…江戸の深川（現在、東京都江東区西部）の隅田川のほとりにあった芭蕉庵のこと。江はここでは隅田川を指す。
白河の関…奥州への関所。現在の福島県にあった。　道祖神…道行く人を守る神。
三里…ひざがしらの下の外側のくぼんだ部分で、ここに灸をすえると足を丈夫にし、万病にきくという。
松島…現在の宮城県松島湾一帯。日本三景の一つ。
杉風が別墅…芭蕉の門人であった杉山杉風の別荘。
面八句…連歌・俳諧で、百韻（百句からなる連句）のときに、懐紙の一枚目の表に記す八句。

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線①「漂泊の思ひ」とはどのような思いか。適当なものを選びなさい。

ア あてのない旅に出たいという思い。
イ ものごとの移り変わりをむなしく感じる思い。
ウ 新たな仕事に取り組もうとする思い。

〔　　〕

(2) ――線②「股引の破れをつづり」とあるが、何のためにこのようなことをしているのか。適当なものを選びなさい。

ア あばらやの掃除（そうじ）をするため。
イ 旅の支度（したく）をするため。
ウ 道祖神への供え物とするため。

〔　　〕

(3) **E**の句に含（ふく）まれる季語と、季語が表す季節を答えなさい。

季語〔　　〕　季節〔　　〕

(4) **E**の句に含まれる切れ字を書きぬき、句切れの種類を**ア**～**ウ**で答えなさい。

切れ字〔　　〕　句切れ〔　　〕

ア 初句切れ　**イ** 二句切れ　**ウ** 句切れなし

(5) ――線③「庵」が指す建物として適当でないものを選びなさい。

ア 江上の破屋　**イ** 住める方
ウ 杉風が別墅　**エ** 草の戸

〔　　〕

古文 おくのほそ道(3)

平泉

三代の栄耀一睡のうちにして、※大門の跡は一里こなたにあり。
奥州藤原氏三代の栄華ははかなく消え、一里ほども手前にある。
※秀衡が跡は田野になりて、※金鶏山のみ形を残す。
まづ※高館に登れば、※北上川、※南部より流るる大河なり。
北上川が見え、これは南部地方から流れる大河である。
衣川は※和泉が城を巡りて、高館の下にて大河に落ち入る。
和泉が城のまわりを流れて、高館の下で北上川に流れ込む。
※泰衡らが旧跡は、※衣が関を隔てて※南部口をさし固め、
衣が関を（前に）置いて南部口をさし固め、
夷を防ぐと見えたり。
蝦夷の侵入を防ぐためのもののようである。
さても義臣すぐつてこの城に籠もり、①功名一時の草むらとなる。
それにしても（義経が）忠義の臣をえりすぐってこの高館に籠もったが、
②「国破れて山河あり、城春にして草青みたり」と、
と思い、
笠打ち敷きて時のうつるまで涙を落としはべりぬ。
笠を敷いて腰をおろし、いつまでも涙にくれていた。

F 夏草や兵どもが夢の跡
夏草よ。かつてこの地で功名を立てた兵たちも、今ではそれが夢のようにただ草むらが広がっている。

G 卯の花に※兼房見ゆる白毛かな　曾良
真っ白な卯の花に、兼房の白髪がしのばれることだ。

※大門の跡…奥州藤原氏の館である平泉館の南大門の跡。
秀衡が跡…秀衡の館である伽羅御所の跡。平泉館の中心部。
金鶏山…平泉館西方の小山。秀衡が築き、山頂に金の鶏を埋めたという言い伝えがある。
高館…源義経の館の跡。
北上川…岩手県北部から宮城県に向かって流れる川。平泉で衣川が合流する。
南部…南部地方。岩手県盛岡市を中心とした地方。　和泉が城…秀衡の三男である忠衡の館。
泰衡らが旧跡…泰衡ら奥州藤原氏一族の館を広く指す。泰衡は秀衡から伽羅御所を継いだ。
衣が関…高館の西方にあった関所。　南部口…平泉から南部地方への出入り口。
兼房…義経の物語に登場する老臣で、最後まで義経に付き従った。

奥州藤原氏

平安時代後期、東北地方に勢力をのばした豪族、藤原清衡とその子孫を、**奥州藤原氏**という。奥州藤原氏は**平泉**を中心にさかえ、秀衡の時代には挙兵前の**源義経**が身を寄せていた。壇の浦の戦いののち、義経は兄・頼朝と対立し、奥州藤原氏のもとに逃れた。しかし、秀衡の死後、頼朝の圧力に屈した泰衡によって義経は自害に追い込まれ、泰衡もまた頼朝に滅ぼされた。

・奥州藤原氏
藤原清衡―基衡―秀衡―泰衡

確認テスト

本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) 本文の内容に合うものを選びなさい。

ア 秀衡の館や金鶏山は、形を残していた。
イ 北上川は、南部地方から平泉に流れる。
ウ 衣川は、和泉が城の下で北上川に合流する。

〔　　〕

(2) ――線①「功名一時の草むらとなる」の意味を選びなさい。

ア 戦いの功名も一時のことで、その跡はただ草むらとなっている。
イ 戦いの功名とは草むらのようなもので、無益なものである。
ウ 戦いの功名はここにある草むらのように、今でも残っている。

〔　　〕

(3) ――線②「国破れて山河あり」は、漢詩「春望(しゅんぼう)」を思い起こしたものである。「春望」の作者を答えなさい。

〔　　〕

(4) Fの句に含(ふく)まれる切れ字を書きぬき、句切れの種類をア～ウで答えなさい。

ア 初句切れ　イ 二句切れ　ウ 句切れなし

切れ字〔　　〕　句切れ〔　　〕

(5) Gの句に含まれる季語と、季語が表す季節を答えなさい。

季語〔　　〕　季節〔　　〕

平泉

かねて耳驚かしたる※二堂開帳す。経堂は※三将の像を残し、
以前から話に聞いて驚嘆していた二堂が開かれていた。経堂には三将の像があり、

光堂は三代の棺を納め、※三尊の仏を安置す。

※七宝散り失せて、玉の扉風に破れ、
（かつてかざられていた）七宝は散りうせて、宝玉をちりばめた扉も長年の風に傷み、

金の柱霜雪に朽ちて、既に頽廃空虚の草むらとなるべきを、
金箔の柱も霜や雪で朽ちて、もう廃墟の草むらとなるはずのところを、

※四面新たに囲みて、甍を覆ひて風雨を凌ぎ、
（鞘堂で）四方を新しく囲んで、瓦の屋根を覆って風雨をしのぎ（このおかげで）、

しばらく千歳の記念とはなれり。
当分の間は千年の昔をしのぶことができる記念として残っているのである。

H 五月雨の降り残してや光堂
五月雨もここだけは降り残した（降らなかった）のだろうか。
光堂だけは今も昔の姿をとどめている。

※二堂…中尊寺の経蔵（経堂）と金色堂（光堂）の二堂。
三将…清衡・基衡・秀衡。三代も同じ。
三尊の仏…阿弥陀如来・観世音菩薩・勢至菩薩。
七宝…仏教における金・銀・瑠璃などの七種の宝。
四面～…鎌倉時代末期、光堂を保護するため、堂を覆う鞘堂が建てられ、以後補修、維持されている。

中尊寺

中尊寺は平泉にある奥州藤原氏ゆかりの寺院。境内には経蔵（経堂）・金色堂（光堂）などが建ち並ぶ。

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) 本文の内容に合うものを選びなさい。

ア 芭蕉は以前から二堂のことを聞き知っていた。
イ 経堂には奥州藤原氏三代の棺が納められていた。
ウ 光堂は既になく、草むらとなってしまっていた。

〔　〕

(2) ——線部「しばらく千歳の記念とはなれり」とあるが、なぜ光堂は残っているのか。適当なものを選びなさい。

ア 玉の扉によって、風が吹きつけるのを防いでいたから。
イ 金箔の柱があることで、霜や雪にも朽ちなかったから。
ウ 四方を囲み、瓦で覆って風雨をしのいでいたから。
エ 平泉には雨や雪が降ることがなかったから。

〔　〕

(3) **H**の句に含まれる季語と、季語が表す季節を答えなさい。

季語〔　　　〕　季節〔　〕

(4) **H**の句に含まれる切れ字を書きぬき、句切れの種類を**ア**〜**ウ**で答えなさい。

切れ字〔　　　〕　句切れ〔　〕

ア 初句切れ　**イ** 二句切れ　**ウ** 句切れなし

古文　おくのほそ道 (5)

立石寺

平泉を後にした芭蕉と曾良は、山道を通って出羽国に向かい、
※尾花沢にしばらくとどまりました。

山形領に※立石寺といふ山寺あり。※慈覚大師の開基にして、
慈覚大師の開かれた寺で、
殊に清閑の地なり。一見すべきよし、人々の勧むるによつて、
とりわけ清く静かな土地である。
①尾花沢よりとつて返し、その間七里ばかりなり。
引き返し（たが）、（尾花沢から立石寺の）その間は七里ほどである。
日いまだ暮れず。麓の※坊に宿借り置きて、山上の堂に登る。
（到着した時には）日はまだ暮れていない。
岩に巌を重ねて山とし、松柏年ふり、土石老いて、
岩の上に大きな岩が重なって山となっていて、松やひのきも年月がたち、土も石も古びて、
苔滑らかに、岩上の院々扉を閉ぢて物の音聞こえず。
苔が滑らかにおおい、岩の上の十二院は扉を閉じていて物音も聞こえない。
岸を巡り岩を這ひて仏閣を拝し、
崖のふちをめぐって岩の上をはうようにして仏閣に参拝したが、
②佳景寂寞として心澄みゆくのみおぼゆ。
ただただ心が澄みわたるように感じられる。

Ⅰ　閑かさや岩にしみ入る蝉の声
なんという静けさだろう。ただ岩にしみ入るように蝉の声だけが聞こえている。

この後、芭蕉と曾良は、最上川を舟で下りました。

※尾花沢…現在の山形県尾花沢市。現在は「おばなざわ」と呼ぶ。
立石寺…現在の山形県山形市にある天台宗の寺。現在は「りっしゃくじ」と称される。
慈覚大師…平安時代初期の僧、円仁。
坊…宿坊。参詣者なども宿泊した。

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) 本文の内容に合うものを選びなさい。

ア 立石寺は慈覚大師が開いた山寺で、山形領にある。
イ 芭蕉が立石寺に着いた時にはもう日が暮れていた。
ウ 山の上の堂の近くの木々は若々しく、苔ひとつなかった。

〔　　〕

(2) ——線①「尾花沢よりとつて返し」とあるが、なぜ尾花沢から立石寺に向かったのか。適当なものを選びなさい。

ア 慈覚大師にお会いしようと思ったから。
イ 一度は立石寺を見るべきだと人々が勧めたから。
ウ 立石寺の山のふもとにある宿に泊(と)まろうと思ったから。

〔　　〕

(3) ——線②「佳景寂寞」とはどのような様子か。適当なものを選びなさい。

ア すばらしい景色が、ひっそりと静まり返る様子。
イ みすぼらしい景色が、さびしく広がる様子。
ウ 山寺らしい景色が、雄大(ゆうだい)に連なる様子。

〔　　〕

(4) **Ⅰ**の句に含(ふく)まれる季語と、季語が表す季節を答えなさい。

季語〔　　〕　季節〔　　〕

(5) **Ⅰ**の句に含まれる切れ字を書きぬき、句切れの種類を記号で答えなさい。

切れ字〔　　〕　句切れ〔　　〕

ア 初句切れ　**イ** 二句切れ　**ウ** 句切れなし

漢文の訓読

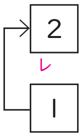
漢文を日本語の規則に従って読むことを**訓読**という。漢字だけで書かれた原文を**白文**といい、これに**訓点**を加えたものを**訓読文**という。主な訓点には、送り仮名・返り点・句読点がある。

●**送り仮名**…漢字の右下に、カタカナで送り仮名を書く。訓読では、「て・に・を・は」といった助詞や、助動詞なども補う。

●**返り点**…漢文を日本語の語順で読むため、漢字の左下に補う。

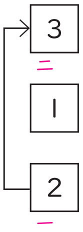
・**レ点**……下から上に一字返って読むことを表す。

（例）



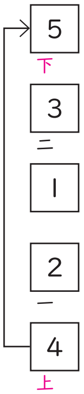
・**一・二点**…下から上に二字以上返って読むことを表す。

（例）



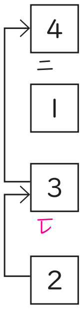
・**上・下点**…一・二点をはさみ、さらに返って読むことを表す。

（例）



・**㆑**……一点とレ点を組み合わせたもの。先にレ点に従って下から上に一字返り、さらに二字以上返って読む。

（例）



●**句読点**……語句や文の切れ目を表すために補う。

訓読文を、漢字仮名交じり文に書き改めたものを**書き下し文**という。訓読文を書き下し文に直すときは、次のような決まりがある。

・送り仮名はひらがなに改める。
・返り点が示す順に従って書き改める。
・漢字は原則そのままだが、「之(の)」「不(ず)」などの助詞・助動詞はひらがなに改める。

〈白文〉 学而時習之

〈訓読文〉 学ビテ而時ニ習フ㆑之ヲ、

〈書き下し文〉 学びて時に之を習ふ、

「学而時習之」の「而」のように、訓読で読まず、書き下し文でも省略する文字を**置き字**という。

（例） 学ビテ**而**(置き字)時ニ習フ㆑之ヲ、（学びて時に之を習ふ、）

確認テスト

(1) 返り点に従って、次の□に読む順の数字を書きなさい。

□レ□□レ□レ□

(2) 返り点に従って、次の□に読む順の数字を書きなさい。

□レ□二□レ□□一

(3) 返り点に従って、次の□に読む順の数字を書きなさい。

□下□□二□□一□上

(4) 返り点に従って、次の□に読む順の数字を書きなさい。

□二□□一レ□□

(5) 次の数字の順に従って□を読むように、返り点を書き入れなさい。

6　1　2　3　5　4

(6) 次の書き下し文となるように、訓読文に返り点を書き入れなさい。

天命を知る。

知ル天命ヲ。

(7) 次の書き下し文となるように、訓読文に返り点を書き入れなさい。

心の欲する所に従へども、

従ヘドモ心ノ所ニ欲スル、

(8) 次の訓読文を書き下し文に直し、解答欄(かいとうらん)に当てはまる言葉を書き入れなさい。ただし「不」は助動詞に当たる言葉、「而」「矣」は置き字である。

子曰(ハク)、「過(あやまチテ)而不(ざル)レ改(メ)、是(ヲ)謂(いフト)レ過(チト)矣。」

子曰はく、

「［　　　　　　　　］、

是を過ちと謂ふ。」と。

論語（2）

『論語』は、今から二千五百年以上前の古代中国の思想家・※孔子と、その弟子たちの言行録。孔子は仁や礼にもとづく政治を理想として、諸国に自らの思想を説いて回った。当時の混乱した時代にあってはその考えは受け入れられなかったが、孔子の教えはのちに儒教として広まった。

①子曰はく、「学びて時に之を習ふ、②亦説ばしからずや。
言われることには、学んで、機会があるごとに復習する、
朋遠方より来たる有り、亦楽しからずや。
友が遠方から訪ねてくる、
人知らずして慍みず、亦君子ならずや。」と。
世の人が自分を認めてくれなくても不満をいだかない、なんと徳の高い人格者ではないか。

子曰、「学而時習レ之、不二亦説一乎。
有下朋自二遠方一来上、不二亦楽一乎。
人不レ知而不レ慍、不二亦君子一乎。」　（※学而）

子曰はく、「吾十有五にして学に志す。三十にして立つ。
私は十五歳にして学問を志した。　三十歳にして思想の基礎が確立した。
四十にして惑はず。五十にして天命を知る。
惑うことがなくなった。　天から与えられた自らの使命を自覚した。
六十にして耳順ふ。
他人の言葉を素直に聞き入れることができるようになった。
七十にして心の欲する所に従へども、矩を踰えず。」と。
心の望むままに行動しても、　人の道を外れることがなくなった。

子曰、「吾十有五而志二于学一。
三十而立。四十而不レ惑。
五十而知二天命一。六十而耳順。
七十而従二心所一レ欲、不レ踰レ矩。」　（為政）

子曰はく、「③故きを温めて新しきを知れば、以て師たるべし。」と。
師となる資格がある。

子曰、「温レ故而知レ新、可二以為一レ師矣。」　（為政）

子曰はく、「学びて思はざれば則ち罔し。
学ぶだけで自ら考えることがなければ、明確に理解することができない。
思ひて学ばざれば則ち④殆し。」と。
自分で考えるだけで学ぶことがなければ、危険である。

子曰、「学而不レ思則罔。思而不レ学則殆。」　（為政）

※孔子…春秋時代の魯の国の思想家で、名は丘。一般に敬称で孔子と呼ばれる。
学而…論語の各編は、「子曰」を除いた各編の初めの句から名付けられる。「為政」も同様。

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線①「子」の説明として適当なものを選びなさい。
ア 子どもを表す言葉で、ここでは弟子を指している。
イ 相手を指す語句で、ここでは聞き手を指している。
ウ 男子に対する敬称で、ここでは孔子を指している。
〔　　〕

(2) ――線②「亦説ばしからずや」の意味を選びなさい。
ア もう一度喜ぶことではない
イ なんとうれしいことではないか
ウ さらに説明が必要である
〔　　〕

(3) 【　】の箇所は、年齢を表す言葉の由来となった。次の年齢を表す言葉をそれぞれア～カから選びなさい。
十五歳〔　　〕　三十歳〔　　〕　四十歳〔　　〕
五十歳〔　　〕　六十歳〔　　〕　七十歳〔　　〕
ア 志学　イ 耳順　ウ 従心
エ 而立　オ 知命　カ 不惑

(4) ――線③「故きを温めて新しきを知れば」の意味を選びなさい。
ア 昔からの友との旧交を温めて、新しい知人ができるようになれば
イ 過去のことは捨て去ってしまい、より新しいことを知るようにすれば
ウ 古い物事や学問に習熟して、そこから新たな知識が発見できるようになれば
〔　　〕

(5) ――線④「殆し」とあるが、なぜ危険だといっているのか。適当なものを選びなさい。
ア 自分の考えだけに頼っていると、独断に陥ってしまうから。
イ 人の意見ばかり聞いていると、考えがまとまらないから。
ウ 先人の知識を学んでも、それが正しいとは限らないから。
〔　　〕

子曰はく、「※由、女に之を知ることを誨へんか。
由よ、おまえに知っているとはどういうことであるかを教えよう。
之を知るを之を知ると為し、知らざるを知らずと為す。
知っていることを知っていることとして、知らないことを知らないこととする。
①是れ知るなり。」と。
それが知っているということである。

子曰ハク、「由、誨ヘン二女ニ知ルコトヲレ之ヲ乎か。
知ルヲレ之ヲ為シレ知ルト之ヲ、不ざルヲレ知ラ為スレ不ずトレ知ラ。是レ知ルなりト也。」（為政）

子曰はく、
「【之を知る者は、之を好む者に如かず。
何かを（詳しく）知っているという人は、（それだけだと）それを好きだという人に
之を好む者は、之を楽しむ者に如かず。】」と。
何かを好きだという人は、（それだけだと）それを楽しむ人に

子曰ハク、
「知ルレ之ヲ者ハ、不レ如カ二好ムレ之ヲ者一ニ。
好ムレ之ヲ者ハ、不レ如カ二楽シムレ之ヲ者一ニ。」（雍也）

子曰はく、
「②君子は和して同ぜず。小人は同じて和せず。」と。

子曰ハク、
「君子ハ和シテ而不レ同ゼ、小人ハ同ジテ而不レ和セ。」（子路）

※子貢問ひて曰はく、
子貢が尋ねて言うことには、
「一言にして以て終身之を行ふべき者有りや。」と。
一言で（表せて）一生それを行うべきことがあるでしょうか。
子曰はく、
「其れ恕か。③己の欲せざる所は、人に施すこと勿かれ。」と。
それは恕（思いやり、慈しみ）だな。

子貢問ヒテ曰ハク、
「有リ下一言ニシテ而可ベキ二以テ終身行フレ之ヲ者上乎やト。」
子曰ハク、
「其レ恕乎か。己ノ所ハレ不ルレ欲セ、勿カレトレ施スコト二於人一ニ。」（衛霊公）

※由…孔子の弟子、仲由。一般に子路と呼ばれる。直情の人として知られる。
子貢…孔子の弟子。弁舌にすぐれる。

確認テスト

本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線①「是れ知るなり」とあるが、知っているとはどういうことであるといっているのか。適当なものを選びなさい。

ア 知っていることと知らないことを区別し、自分の知識を正しく認識すること。

イ たとえ知らないことがあっても、知っているふりをして堂々とふるまうこと。

ウ 物事をよく知っている人とそうではない人を見分け、他人から積極的に学ぼうとすること。

［　　］

(2) 【　】について、より望ましいと述べられている人物の順に並べ替えなさい。

ア 之を好む者　　イ 之を知る者　　ウ 之を楽しむ者

［　　→　　→　　］

(3) ――線②「君子は和して同ぜず。小人は同じて和せず」について、君子と小人はそれぞれどのような人物だと述べられているか。二つずつ選びなさい。

君子［　　・　　］　小人［　　・　　］

ア 人と調和する。　　イ 人と調和はしない。

ウ 何にでも同調する。　　エ むやみに同調はしない。

(4) ――線③「己の欲せざる所は、人に施すこと勿かれ」が表す意味となるように、（　）に当てはまる言葉を選びなさい。

自らがしてほしくないことを、（　）。

ア 人にしないだろう

イ 人にしてほしい

ウ 人にしてはならない

［　　］

初恋

島崎藤村

①まだあげ初めし前髪の
林檎のもとに見えしとき
前にさしたる花櫛の
花ある君と思ひけり

やさしく白き手をのべて
林檎をわれにあたへしは
薄紅の秋の実に
人こひ初めしはじめなり

②わがこころなきためいきの
その髪の毛にかかるとき
③たのしき恋の盃を
君が情に酌みしかな

林檎畠の樹の下に
④おのづからなる細道は
誰が踏みそめしかたみぞと
問ひたまふこそこひしけれ

文語定型詩と口語自由詩

昔の書き言葉を用いて表現された詩を**文語詩**、現代の話し言葉を用いて表現された詩を**口語詩**という。また、音数に一定のきまりがある詩を**定型詩**、きまった音数などの規則にしばられない詩を**自由詩**という。

江戸時代までの日本では、詩はおもに漢詩を指していたが、明治時代に西洋の詩を翻訳する中で**文語定型詩**が生まれた。さらに明治時代末期頃になると、話し言葉を用いて自由な音数で表現する**口語自由詩**が広まるようになった。

確認テスト 詩を読んで、問いに答えなさい。

(1) 詩を、使われている言葉や形式、内容から分類したときに、「初恋」に当てはまるものを次から二つ選びなさい。

ア 文語定型詩　イ 口語自由詩
ウ 叙情詩　エ 叙景詩　オ 叙事詩

〔　・　〕

(2) 「初恋」で、初めて恋心を抱いたことがうたわれているのは第何連か。漢数字で答えなさい。

第□連

(3) ――線①「まだあげ初めし前髪」の意味を選びなさい。

ア まだ結い上げたばかりの前髪
イ まだ結い上げたことのない前髪
ウ まだ結い上げたことしかない前髪

〔　〕

(4) ――線②「こころなきためいき」の意味を選びなさい。

ア 思いやりがなく、無愛想なためいき
イ 本心ではない、表面的なためいき
ウ 思わず、無意識についたためいき

〔　〕

(5) ――線③「たのしき恋の盃を／君が情に酌みしかな」に用いられている表現技法として、適当なものを選びなさい。

ア 体言止め　イ 倒置　ウ 対句　エ 比喩

〔　〕

(6) ――線④「おのづからなる細道」とはどのような道か。適当なものを選びなさい。

ア 二人が樹の下で見つけた、自然のままに草で覆われている道。
イ 二人が何度も樹の下に行き来するうちに自然にできた道。
ウ 二人が林檎畠を訪れる以前からあった、昔のままの道。

〔　〕

俳句

俳句の基礎知識

●定型・季語

俳句は**五**・**七**・**五**の十七音からなり、それぞれ**上五**・**中七**・**下五**という。定型より音数が多いものを**字余り**、少ないものを**字足らず**という。

俳句には季節を表す語である季語を詠み込む。

（例）赤い椿（六音）白い椿と落ちにけり　河東碧梧桐

（季語の例）
- 春……梅、桜、たんぽぽ
- 夏……梅雨、五月雨、若葉
- 秋……名月、天の川、鈴虫
- 冬……雪、時雨、大根
- 新年……初春、門松

※季語は「歳時記」などで調べることができる。

季語を詠み込む、五・七・五の定型で詠む、という俳句のきまりごとを**有季定型**という。これに対して、季語のない俳句を**無季俳句**、自由な音律の俳句を**自由律俳句**という。

（自由律俳句の例）咳をしても一人　尾崎放哉

●切れ字・句切れ

「**や・かな・けり**」など、句の切れ目を示す言葉を切れ字という。切れ字は、感動の中心を表したり、句に余情をもたせたりする働きもある。一句の中での言葉や意味の切れ目を句切れという。切れ字や、その他の言い切りの表現があるところなどに句切れがある。

- 初句切れ…五／七・五
- 二句切れ…五・七／五
- 中間切れ…中七の途中で切れる

などがある。

俳句五句

A　いくたびも雪の深さを尋ねけり　正岡子規

B　桐一葉日当たりながら落ちにけり　高浜虚子

C　をりとりてはらりとおもきすすきかな　飯田蛇笏

D　万緑の中や吾子の歯生え初むる　中村草田男

E　分け入つても分け入つても青い山　種田山頭火

発句と俳句

江戸時代以降、俳諧の連歌の最初の一句（発句）が独立して鑑賞されるようになった。その後、明治時代の俳諧革新運動によって、近代俳句が確立した。

確認テスト　俳句を読んで、問いに答えなさい。

(1) A～Dの句の季語をそれぞれ書きぬき、季語が表す季節を答えなさい。

A 季語〔　　〕季節〔　　〕
B 季語〔　　〕季節〔　　〕
C 季語〔　　〕季節〔　　〕
D 季語〔　　〕季節〔　　〕

(2) A～Dの句に含(ふく)まれる切れ字をそれぞれ書きぬきなさい。

A〔　　〕
B〔　　〕
C〔　　〕
D〔　　〕

(3) A～Eの中から、中間切れの句を探し、記号で答えなさい。

〔　　〕

(4) A～Eの中から、自由律俳句を探し、記号で答えなさい。

〔　　〕

(5) A～Eの中から、体言止めが用いられている句を探し、記号で答えなさい。

〔　　〕

(6) 次の①～⑤は、A～Eのどの句について述べたものか。それぞれ記号で答えなさい。

① 草木の生命力と我(わ)が子の姿が呼応するように捉(とら)えられている。
② 病床(びょうしょう)にあって外の景色が気にかかる心情がうたわれている。
③ 旅の中、ひたすら深い山道を歩む作者の姿が感じられる。
④ 落ち葉がゆったりと静かに舞(ま)い落ちる様子が描(えが)かれている。
⑤ 穂のやわらかな感触(かんしょく)が、ひらがなの表記からも伝わってくる。

①〔　　〕②〔　　〕③〔　　〕④〔　　〕⑤〔　　〕

鑑賞文　俳句を楽しむ (1)

A 啄木鳥や落葉をいそぐ牧の木々　　水原秋櫻子『葛飾』

この句の季語は上五の「啄木鳥」です。高い木の上で木をつつくこの鳥は、秋の季語になっています。この句では、「啄木鳥」という四音の季語の下に切字「や」がついて、ここで意味的に切れる構造になっています。イメージとしては、

啄木鳥や／落葉をいそぐ牧の木々

という感じで、中七・下五は啄木鳥とは別の情報です。「牧」とは牧場のことです。晩秋の牧場では辺りに啄木鳥の木をつつく音が響く中、木々がどんどんと葉を落としてゆく、そんな情景を詠んだ句です。

このように、「や」という切字はその名の通り、そこで意味的に切れることを表す切字なのです。短い俳句の中に、二つの情報を効率よく詠み込むために、「や」という切字は欠かすことができません。そして、この句のように二つの情報を詠み込んだ句のことを、俳句では「取り合わせ」と呼んでいます。上五に「や」を用いたこの句は、典型的な取り合わせの句だと言えます。

では、もう少し深くこの句を鑑賞してみましょう。この句は、どんなものとどんなものの取り合わせになっているでしょうか。

皆さんが啄木鳥の存在に気付くとすれば、おそらくは木をつつくドラミングの音で認識するのではないでしょうか。つまり、上五の「啄木鳥や」は聴覚的な情報と言えます。一方、中七・下五の落葉は目で見るもの、つまりは視覚的な情報です。この句は、聴覚と視覚を取り合わせることで、晩秋の牧場の風景をよりリアルに描いているのです。

（佐藤郁良『俳句を楽しむ』岩波書店　による）

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) **A**の句で詠まれている季節を、「春・夏・秋・冬」のいずれかで答えなさい。

〔　　〕

(2) **A**の句に含(ふく)まれる切字を書きぬきなさい。また、句切れの種類を選び、記号で答えなさい。

ア 初句切れ　**イ** 二句切れ　**ウ** 中間切れ

切字〔　　〕　句切れ〔　　〕

(3) 「取り合わせ」とはどのような句のことか。本文中から十二字で書きぬきなさい。

(4) **A**の句はどのような内容の取り合わせになっているか。（　）に当てはまる言葉を本文中からそれぞれ探し、最初の三字を答えなさい。

（①十字）が牧場に響くという聴覚的な情報と、（②十六字）光景という視覚的な情報。

①

②

鑑賞文　俳句を楽しむ (2)

B 金亀子擲つ闇の深さかな　　高浜虚子

『虚子全集』

　この句の季語は「金亀子」、かなぶんの仲間で夏の季語です。その下の「擲つ」という動詞は、強く投げるという意味です。まずは、この句がどのような場面を詠んだものかを考えてみましょう。

　ヒントは「金亀子」という昆虫の習性にあります。こがねむし、かなぶんなどの甲虫は、夜になると灯りを目がけて飛んできます。現代の都会ではちょっと考えられないかもしれませんが、昔はエアコンなどもなく窓を開け放っていましたから、家の中にこがねむしが飛び込んできてしまったのでしょう。作者はそれを捕まえて、窓の外へ強く放り投げた（＝擲った）のです。さあ、その後このこがねむしはどうなったでしょうか。

　それを考える上でポイントになるのが、後半の「闇の深さかな」という部分です。もし、放り投げたこがねむしが隣の家の壁にあたって鈍い音を立てたりしたら、「闇の深さ」という把握にはならなかったでしょう。おそらく、このこがねむしは真っ暗な闇の中へすうっと音も立てずに消えていったのではないでしょうか。そこで気付いた夏の夜の「闇の深さ」が、この句における作者の感動の中心なのです。それを表しているのが、句末に置かれた「かな」という切字の働きです。

　つまり、「かな」という切字の働きは、「や」のようにそこで意味的に切れることを表すのではなく、「かな」の使われている箇所が一句の感動の中心であることを表すことにあります。また、「や」を使って切った句の多くは「取り合わせ」の句になりますが、虚子のこの句は取り合わせではありません。上五から下五までが一つのフレーズになっていて、「金亀子」のことだけを詠んでいます。このように、季語のことだけを詠んだ句のことを「一物仕立て」と言います。すべての俳句は、「取り合わせ」か「一物仕立て」のどちらかだと考えて差し支えありません。

（中略）

　ちなみに、先程の虚子の句を「けり」を使って次のように書き換えたら、印象はどう変わるでしょうか。

金亀子闇の深さへ擲ちけり

　この形だと、こがねむしを放り投げたという行為に句の中心が移ることになります。「闇の深さ」は初めから作者の認識の中にあったことになってしまうでしょう。虚子の感動は、「闇の深さ」の発見にあるわけですから、これでは句の内容が大きく変わってしまうことになります。

（佐藤郁良『俳句を楽しむ』岩波書店　による）

確認テスト

本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) Bの句に含(ふく)まれる季語を書きぬきなさい。

〔　　　〕

(2) Bの句に含まれる切字を書きぬきなさい。

〔　　　〕

(3) 「一物仕立て」とはどのような句のことか。本文中から十二字で書きぬきなさい。

(4) Bの句における作者の感動の中心は何か。適当なものを選びなさい。

ア　夏の夜、灯りを目がけて家の中に飛び込(こ)み、捕まえられてしまったこがねむしの姿。

イ　夏の夜の闇に向かって、捕まえたこがねむしを放り投げようとする作者の動き。

ウ　放り投げたこがねむしが音もなく消えていったことで気付いた、夏の夜の闇の深さ。

〔　　　〕

40億年、いのちの旅 (1)

新しく誕生した生きものが、新しい種として定着し、ある期間存在し続けるためには、自然環境、生息場所、食物など、その種が環境に適応できる能力があり、その環境のなかにその種を受け入れる余地がなければなりません。

新しい種の生きものは、元の種と似ていますから、①食べ物も生息場所も元の集団と似ているはずです。すると、元の集団とそれらをめぐって競争になります。食べ物や生息場所を変えて自分たちの居場所をつくって、はじめて共存が可能になります。

また、自然環境、生息場所、食物などに変化が起きたとき、新しい環境に適した性質をもつ種が優先的に勢力をのばすことになります。これまでに地球上に現れて存続してきた生きものたちは、それぞれが自分の生息環境を確保できたのです。

食べものに適応した有名な例は、※ダーウィンが進化論を提唱するきっかけとなったとされる※ガラパゴス諸島とその近海のココス島に生息する②ダーウィンフィンチとよばれる鳥です。この鳥は一四種に分類されていますが、種類によって食べものが異なり、色や大きさも少しずつ違っています。

最も特徴的なのはくちばしで、オウムのような太いくちばしのものや、ペンチのようなもの、細長い※ラジオペンチのようなものなどさまざまです。これらはそれぞれ、種子を食べるため、かたい果実をくだくため、③花のみつを吸うために適しています。これは、種の分化とともに、これまでの種とは別の食べものを食べることができるようになった種が、生きのびてきたことを示しています。

（伊藤明夫『40億年、いのちの旅』岩波書店 第2章による）

※ダーウィン…チャールズ・ロバート・ダーウィン（一八〇九―一八八二年）。イギリスの自然科学者。

ガラパゴス諸島…南アメリカ・エクアドル領の諸島で、エクアドル本土の西方の太平洋上に位置する。正式名称はコロン諸島。

ラジオペンチ…先端が細くなっているペンチ。小さな部品をつまんだり細工したりする工具。

確認テスト　本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ——線①「それら」が指す内容として適当なものを選びなさい。

ア　新しい種の生きもの
イ　食べ物や生息場所
ウ　自然環境などの変化

〔　　〕

(2) ——線②「ダーウィンフィンチとよばれる鳥」の例を通して、筆者が示そうとしていることを選びなさい。

ア　さまざまな食べものに適応した種の存在が、ダーウィンが進化論を提唱するきっかけとなったこと。
イ　ガラパゴス諸島周辺は、食べ物が異なるさまざまな種の鳥が生息する豊かな環境であること。
ウ　元の種とは異なる食物に適応した種は、生息環境を確保でき、存続することができたということ。

〔　　〕

(3) ——線③「花のみつを吸う」とあるが、花のみつを吸うのに適したものは次のうちどれか。適当なものを選びなさい。

ア　オウムのような太いくちばし
イ　ペンチのようなくちばし
ウ　細長いラジオペンチのようなくちばし

〔　　〕

40億年、いのちの旅 (2)

①新しい種が誕生すると、それによってさらに別の生きもののなかに新しい種が生まれる可能性が出てきます。新しく誕生した生きもの自身が新しい食べ物となって、それを食べる新しい生きものを誕生させる可能性があるからです。

たとえば、花が咲く新しい植物が誕生すると、昆虫（チョウ、ハチ、アブなど）のなかにその花のみつを好んで吸う新しい種の出現を可能にします。すると、この新しい種の昆虫を好んで捕食する小動物（クモ、カエル、カメレオンなど）の新しい種が出ます。そしてさらに、新たに現れた小動物を獲物とする肉食動物（トリ、ワニなど）の新しい種が出現するというのです。

こうして、新しい種の出現は、食べ物をめぐる新たな上下関係（食物連鎖）を可能にし、新しい種の出現を可能にして、多様性が増すことになります。そして、今までにはなかった新しい生態系、生きものたちの社会が生まれるのです。

ところで、②花と昆虫との関係は、一方通行ではありません。昆虫はみつや花粉を求めて花から花へと飛びまわっていて、花が昆虫にえさを与えているようにみえますが、花をおとずれる昆虫は、自分で動きまわることのできない植物の生殖のために、花粉の運び手として役立っています。花と昆虫はおたがいに、相手の生存に欠かせない存在なのです。

この関係のなかには、ある決まった種の植物の花粉を決まった種の昆虫が運ぶという、③一種対一種に近い関係のものがあることも知られています。つまり、この植物か昆虫のどちらかがいなくなったら、残されたほうも生きてはいけなくなる可能性が高いのです。

（伊藤明夫『40億年、いのちの旅』岩波書店　第2章による）

生態系

ある地域に生息する生物群や、その環境などの機能的なつながり、まとまりを生態系という。生物同士は、生態系の中で、食物連鎖や共生などの関係でつながっている。

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線①「新しい種が誕生すると……可能性が出てきます」とあるが、これについて本文の内容に合うものを選びなさい。

ア 新しい種が生まれるためには、その種を好んで捕食する別の種が存在することが必要である。
イ 新しい種が生まれると、新しい食物連鎖の関係が生まれるなど、種の多様性が増す可能性がある。
ウ 新しい種が生まれることで、その環境にそれ以上新しい種が出現することは不可能になる。

[　　]

(2) ――線②「花と昆虫との関係は、一方通行ではありません」とあるが、これについて本文の内容に合うものを選びなさい。

ア 昆虫が、花からえさとなるみつや花粉を得ているというのは、誤った見方である。
イ 昆虫は、花からみつや花粉をうばうなど、花にとって生存をおびやかす存在である。
ウ 昆虫が生存のためのえさを花から得ようとすることで、花も生存が可能になっている。

[　　]

(3) ――線③「一種対一種に近い関係」について、本文の内容に当てはまらないものを選びなさい。

ア 二つの種が、たがいに相手の生存に必要な役割を担っている。
イ 片方の種がいなくなると、もう片方の種の生存が難しくなる。
ウ 生存に欠かせない種をめぐって、二つの種が競争している。

[　　]

40億年、いのちの旅 (3)

　種の絶滅は進化の過程で自然に起きることでもありますが、①現在進んでいる種の絶滅は、これとは異なって、生息地の破壊や環境の悪化、過剰な捕獲や採取、森林の伐採、外来生物の持ちこみによる生態系のかく乱など、私たちヒトの活動をおもな原因としています。

　過去の大量絶滅においては、絶滅に向かう期間が少なくとも一〇〇万年以上の長期にわたって起こったものですが、現在、地球では世界で毎年四万種の生物が絶滅しているといわれており、過去五億年間の平均的なペースの何百倍、何千倍ものはやさで、生物たちが姿を消しているといわれています。

　環境省が作成した絶滅のおそれのある種のリスト（レッドリスト）によると、日本に生息する哺乳類の約二三％、鳥類の約一三％、爬虫類の約一九％、両生類の約二二％、汽水・淡水魚類の約二五％、維管束植物の約二〇％が絶滅のおそれのある種とされています。これらには、タガメ、メダカ、エビネ、キキョウ、サクラソウなど、かつては私たちのまわりで普通にみられた動物や植物もふくまれています。

　ほかの生きものたちが絶滅してしまってヒトだけが生きのびられる世界などありえませんし、ましてや、物質的に豊かで安全な生活などもありえません。

　②生きものたちには一つ一つに個性があり、すべてが直接に、間接に支えあって生きています。そのなかの一つの生物種が欠けたことによって、その影響が生態系のシステム全体におよぶ可能性もあります。食物連鎖の下位のものの絶滅により、上位の生きものが影響を受け、生態系が変化することはしばしば指摘されています。

（中略）

　くりかえしになりますが、生きものは、生活場所や食べ物などをほかの生きものと違うものにすることにより競争をさけ、それぞれの生活環境に適合するように分化してきました。そして、③このことが多様性を生み出す結果になってきたのです。さらに、それぞれの生きものはたがいに有機的にからみあい、影響をおよぼしあいながら地球の生態系を形づくっています。

　四〇億年にわたる「いのち」の旅をいまに伝える、生きものたちの多様性。それをこれからも引きついでいくのは、現在、生きものの頂点にいる私たちの責務です。しかし、これからもこのままほかの生きものたちを圧迫し続けてしまったら、地球環境はさらに悪化し、ヒトは自ら絶滅する危機をまねいてしまうかもしれません。

　歴史に目を向け、それが鳴らす警鐘に耳をかたむけ、ヒトが長い歴史のなかで得てきた文化や科学をほかの生きものと共存するために使うことが求められています。

　ホモ・サピエンスとは、ラテン語で「知恵のある人」という意味です。その名にふさわしく、私たちは知恵を出しあって、自滅の道を歩まないようにしたいものです。

（伊藤明夫『40億年、いのちの旅』岩波書店　第6章による）

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ——線①「現在進んでいる種の絶滅」の特色として述べられているものを二つ選びなさい。

ア 種が進化する過程で絶滅が起こっている。
イ ヒトの活動が原因で絶滅が起こっている。
ウ ある種が絶滅に向かう期間は一〇〇万年以上にわたる。
エ 過去の絶滅にないはやさで種の絶滅が進んでいる。

〔 ・ 〕

(2) ——線②「生きものたちには……生きています」とあるが、ここからどのようなことが言えるか。本文の内容に合うものを選びなさい。

ア ある種が絶滅したとしても、生態系の中に絶滅した種の代わりの役割をはたす生物が存在するはずだということ。
イ 生態系の中でより食物連鎖の上位の生物のほうが、食物連鎖の下位の生物よりも絶滅の可能性が低いということ。
ウ 一つの種の絶滅は、他の種の生存にも関係することであり、生態系全体に影響をおよぼす可能性があるということ。

〔 〕

(3) ——線③「このこと」とは何か。適当なものを選びなさい。

ア それぞれの種が、他の種と異なるあり方で環境に適応し、分化してきたこと。
イ それぞれの種が、有機的にからみあい、豊かな生態系を形づくっていること。
ウ それぞれの種が、これまでの生物の歴史の中で生まれた多様性を示していること。

〔 〕

対話をデザインする――伝わるとはどういうことか (1)

今、対話とは何かと考えると、どのように説明できるでしょうか。とても簡単にいえば、「相手と話すこと」ということになるでしょうか。

しかし、一方的に相手に話しかけても、その相手がこちらの言っていることに耳を傾けてくれるかどうかは、だれも保証できません。

相手の目をしっかり見て、きちんと語りかけること、巷の話し方講座等ではこんなアドバイスがあるかもしれません。そのとき、しばしば出るのは、①「思ったことを感じるままに話してはダメだ」という意見ですね。思ったことを感じるままに話すと、お互いに感情的になってしまい、解決すべきことがなかなかうまく運ばない等々。

しかし、「思ったことを感じるままに話す」ことそれ自体が悪いことだとは、わたしは決して思いません。むしろ「思ったことを感じるままに話すべき」であるとさえ思うほどです。

ただ一つ、思ったことを感じるままに話すと、それがおしゃべりになってしまうという大きな課題があります。

ここでいう「おしゃべり」とは、相手に話しているように見えながら、実際は、相手のことを考えない活動だからです。少しむずかしくいうと、他者不在の言語活動なのです。

でも、②相手があって話をしているのだから、他者不在とはいえないのではないかという質問も出そうですね。

たしかに、おしゃべりをしているときは、相手に向かって話しかけてはいますが、ほとんどの場合、何らかの答えや返事を求めて話しているのではなく、ただ自分の知っている情報を独りよがりに話しているだけではないでしょうか。そこでは、他者としての相手の存在をほぼ無視してしゃべっているわけです。だからこそ、思ったことを感じるままに話すことには注意が必要なのです。

「あのことが、うれしい、悲しい、好きだ、嫌いだ」というように、自分の感覚や感情をそのままことばにして話していても、相手は、「へえー、そうですか」と相槌を打つだけ。今度は相手も自分の思いを語りはじめ、それぞれに感じていることや思っていることを吐き出すと、お互いなんだかすっきりして、なんとなく満足する。こういうストレス発散の点では、おしゃべりもそれなりの効果をもっていますが、その次の段階にはなかなか進めません。

このように、いわゆるおしゃべりの多くは、かなり自己完結的な世界の話ですから、そのままでは、それ以上の発展性がないのです。その意味では、おしゃべりは、相手に向かって話しているように見えても、実際は、モノローグ（独り言）に近いわけでしょう。表面的には、ある程度、やりとりは進むように見えますが、それは、対話として成立しません。ここに③モノローグであるおしゃべりと※ダイアローグとしての対話の大きな違いがあるといえます。

（細川英雄『対話をデザインする――伝わるとはどういうことか』筑摩書房　による）

※ダイアローグ…二人以上による問答、対話。

確認テスト　本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ——線①「『思ったことを感じるままに話してはダメだ』という意見」とあるが、次の文がこの意見に対する筆者の考えとなるように、解答欄(かいとうらん)に当てはまる言葉を本文中から十字で探し、書きぬきなさい。

「思ったことを感じるままに話す」こと自体は悪いことではないが、思ったことを感じるままに話すと、

[　　　　　　　　　　]活動

になってしまうという課題がある。

(2) ——線②「相手があって話をしている……質問も出そうですね」とあるが、この質問に対する筆者の考えとして適当なものを選びなさい。

ア　「おしゃべり」は相手に向かって話しかけているので、たしかに他者不在の活動とはいえない。

イ　「おしゃべり」は独りよがりに話しているだけで、相手の存在を無視しているので、他者不在の活動である。

ウ　「おしゃべり」によってお互いがすっきりすることもあるので、他者不在の活動ではない面もある。

〔　　〕

(3) ——線③「モノローグであるおしゃべり」に当てはまるものを選びなさい。

ア　こちらに耳を傾けてくれるように話す。

イ　相手の答えや返事を求めるものである。

ウ　自己完結的な活動であり、発展性がない。

〔　　〕

対話をデザインする――伝わるとはどういうことか⑵

　ちょっと余談になりますが、カルチャーセンターの講演会や大学の講義などでも、こうしたモノローグはよく見られます。本来、聴衆や学生に語りかけているはずなのだけれど、実際は、自分の関心事だけを自己満足的にとうとうと話している、これはまさにモノローグの世界ですね。

　これに対して、ダイアローグとしての対話は、常に他者としての相手を想定したものなのです。自分の言っていることが相手に伝わるか、伝わらないか、どうすれば伝わるか、なぜ伝わらないのか、そうしたことを常に考えつづけ、相手に伝えるための最大限の努力をする、その手続きのプロセスが対話にはあります。

　対話成立のポイントはむしろ、話題に関する他者の存在の有無なのではないかとわたしは考えます。実際のやりとりに他者がいるかどうかだけではなく、話題そのものについても「他者がいる話題」と「いない話題」があるということなのです。つまり、その話題は、他者にとってどのような意味を持つかということが対話の進展には重要だということです。

　したがって、ダイアローグとしての対話行為は、モノローグのおしゃべりを超えて、他者存在としての相手の領域に大きく踏み込む行為なのです。

　言い換えれば、一つの話題をめぐって異なる立場の他者に納得してもらうために語るという行為だともいえますし、ことばによって他者を促し交渉を重ねながら少しずつ前にすすむという行為、すなわち、人間ならだれにでも日常の生活や仕事で必要な相互関係構築のためのことばの活動だといえるでしょう。

　では、このようなダイアローグとしての対話によって人は何を得ることができるのでしょうか。あるいは、今、対話について考えることは、わたしたちにとってどのような意味を持つのでしょうか。

　まずあなたは対話ということばの活動によって相手との人間関係をつくっています。

　その人間関係は、あなたと相手の二人だけの関係ではなく、それぞれの背負っている背景とつながっています。

　その背景は、それぞれがかかわっている※コミュニティと深い関係があります。

　相手との対話は、他者としての異なる価値観を受け止めることと同時に、コミュニティとしての社会の複数性、複雑さをともに引き受けることにつながります。

　だからこそ、このような対話の活動によって、人は社会の中で、他者とともに生きることを学ぶのです。

　このように、対話は、個人と個人が何かの話題について話し合うことだけではなく、それぞれの個人がことばを使って自由に活動できる社会の形成へという可能性にもつながっていきます。なぜなら、ことばを使って自分の考えていることを他者に伝えるという行為は、自分自身の個人的な私的領域から他者という未知の存在へ働きかける公的領域への行為だからです。

（細川英雄『対話をデザインする――伝わるとはどういうことか』筑摩書房　による）

※コミュニティ…共同体、地域社会。

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線部「プロセス」の意味を選びなさい。

ア 意味　**イ** 過程　**ウ** 傾向（けいこう）　**エ** 目標

〔　　〕

(2) 「ダイアローグとしての対話」について正しく述べたものを選びなさい。

ア 対話が成立するためには、話す話題が相手にとってどのような意味を持つかが重要である。

イ 対話で他者が存在する話題を扱（あつか）うときは、相手の領域に踏み込まないように注意すべきである。

ウ 対話の進展には、話題について、自分と相手が同じ立場で語り合うことがポイントである。

〔　　〕

(3) 本文の内容に当てはまらないものを選びなさい。

ア モノローグは、常に他者としての相手を想定し、自分の言葉が相手に伝わるかを意識することにつながっている。

イ ダイアローグとしての対話は、ことばの活動を通じて相手との人間関係を築くことにもつながっている。

ウ 対話を通してつくられた人間関係は、自分と相手だけではなく、それぞれが背負う背景ともつながっている。

〔　　〕

読書の価値（1）

日頃、本を読むことで、いろいろなものが頭の中に※インプットされる。多くは「知識」というデータである。これを頭の倉庫に沢山※ストックしている人が、いわゆる「知識人」とか「博学」などと呼ばれているようだ。

　なんでも知っている人を、「歩く辞書」などと形容するように、覚えた知識をすぐに披露できれば、周囲から尊敬される。少なくとも、これまではそうだった。そういう人が「先生」と呼ばれ、教えを乞う人々が集まったのである。

　しかし、その辞書は、つまり本である。辞書は歩かない。生きていない。だから、辞書を使う人が、言葉から調べなければならない。発音の順番で並んでいるので、少なくとも読み方を知っていれば、その意味を調べることができる。国語辞典や百科事典や英和辞典などがこれである（英語では、読み方ではなく、スペルを知っている必要がある）。

　昔は、辞書というものが今ほど一般的ではなかっただろう。編纂することも難しいし、印刷して安く配布する技術もなかった。だから、①「歩く辞書」的な人が重宝された。

　そもそも、頭の中に知識をインプットするのは何故だろう？　どうして頭の中に入れなければならないのか。それは、咄嗟のときに辞書など引いていられなかったり、人にきくことができない環境であれば、頭にストックしている価値がある。今は、みんながスマホを持っていて、なんでも手軽に検索できるのだから、この価値は下がっているだろう。

　であれば、苦労して覚えなくても、ただ辞書を買って持っていれば良いではないか、という話になる。②ネットに依存している現代人の多くが、これに近い方針で生きているようにも見えてしまう。

　しかし、そうではない。知識を頭の中に入れる意味は、その知識を出し入れするというだけではないのだ。頭の中で考えるときに、この知識が用いられる。じっくりと時間をかけて考えるならば、使えるデータがないかと外部のものを参照できるし、人にきいたり議論をすることもできるが、一人で頭を使う場合には、そういった外部に頼れない。では、どんなときに一人で頭を使うだろうか？

　それは、「思いつく」ときである。

　ものごとを発想するときは、自分の頭の中からなにかが湧いてくる。これは、少なくともインプットではない。ただ、言葉としてすぐに外に出せるわけでもなく、※アウトプットの手前のようなものだ。面白いアイデアが思い浮かんだり、問題を解決する糸口のようなものを思いついたりする。このとき、まったくゼロの状態から信号が発生する、とは考えられない。そうではなく、現在か過去にインプットしたものが、頭の中にあって、そこから、どれかとどれかが結びついて、ふと新しいものが生まれるのである。

（森博嗣『読書の価値』NHK出版　による。一部省略した箇所がある）

※インプット…入力。　ストック…ためておくこと。　アウトプット…出力。

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線①「『歩く辞書』的な人が重宝された」のはなぜだと考えられるか。本文の内容に合うものを選びなさい。

ア さまざまな知識を覚え、それをすぐに披露することは、尊敬に値する(あたい)ことだったから。

イ 人々が知識を得るためには、知識人に本を編纂してもらわなければならなかったから。

ウ 昔は今ほど辞書が一般的でなく、知識をすぐに聞きだせる人はありがたい存在だったから。

〔　　〕

(2) ――線②「ネットに……見えてしまう」とあるが、ここで述べられている方針に当てはまるものを選びなさい。

ア 日頃から本を読み、いろいろな知識を蓄える(たくわ)ことが大切だ。

イ ネット検索で調べられるので、物事を覚える必要はない。

ウ 調べる手間を省くためには、知識を身につけるべきである。

〔　　〕

(3) 知識を頭の中にインプットすることに対して、筆者はどのように考えているか。適当なものを選びなさい。

ア スマホで何でも手軽に検索することができるようになった現在では、知識をインプットすることの価値はなくなっている。

イ 単純な知識のインプットには現在では価値がないが、人と議論するときなどには知識をインプットする価値がある。

ウ 新しいものごとを思いつくときなどには頭の中の知識を使うので、知識をインプットすることには現在でも価値がある。

〔　　〕

読書の価値 (2)

一般に、アイデアが豊かな人というのは、なにごとにも興味を示す、好奇心旺盛な人であることが多い。これは、日頃からインプットに積極的だということだ。ただ、だからといって、本を沢山読んでいれば新しい発想が湧いてくるのか、というとどうもそれほど簡単ではない。おそらく、それくらいのことは、ある程度長く人生を歩んできた人ならご存じだろう。

いずれにしても、いつでも検索できるのだからと頭の中に入れずにいる人は、このような発想をしない。やはり、自分の知識、あるいはその知識から自身が構築した理屈、といったものがあって、初めて生まれてくるものだ。そういう意味では、頭の中に入れてやることは意味がある。テストに出るからとか、知識を人に語れるからとか、そういった理由以上に、①頭の中に入った知識は、重要な人間の能力の一つとなるのである。

また、発想というのは、連想から生まれることが多い。これは、直接的な関連ではなく、なんとなく似ているものなどから引き出される。現在受けた刺激に対して、「なにか似たようなものがあったな」といった具合に※リンクが引き出される。人間の頭脳には、これがかなり頻繁にあるのではないか、と僕は感じている。

「これと同じことがどこかであったな」と思いつく、いわゆる※デジャヴも同じである。思いついたときには、言葉になっていない。なっていないから、「なんとなく……」と思いつく。思いついたとわかるのに、何を思いついたのか、なかなか引き出せない。それは、視覚的な情景だったり、もっと別の感覚(たとえば嗅覚)であったりする。ただ似ているというだけで、「そうそう、あのときと同じ」で終わってしまうこともある。むしろその方が多い。あるいは、考えても考えても、どうしても思い出せないこと、つまり、思いつきを逃してしまうこともある。夢を思い出せないみたいに、たしかに一度は自分の頭に浮かび上がったのに、煙のように消えてしまうのだ。

しかし、ときには「もしかしたら、あれが使えるのではないか」となったり、「これは、あれとなにか関係があるのでは」となったりして、そこから考えていった結果、新しいアイデアに辿り着けることがある。思いついただけでは、ただのアイデアであり、使いものになるかどうかは、実際に試してみたり、もう少し調べてみたり、あるいは正しいかどうか計算してみたりしないとわからない。それらの確認が、自分ではできないこともある。使えるかどうかも、やはり知識がないと判断できない。でも、②この段階では、他者に協力を求めることも、コンピュータを利用することもできる。

(森博嗣『読書の価値』NHK出版 による)

※リンク…結びつけられたこと。関連すること。
デジャヴ…それまで一度も経験したことがないのに、かつて経験したことがあるかのように感じること。

確認テスト　本文を読んで、問いに答えなさい。

(1)　――線①「頭の中に入った知識は、重要な人間の能力の一つとなる」とあるが、筆者はなぜこのように述べているのか。適当なものを選びなさい。

ア　本を沢山読むようにすることで、好奇心旺盛な人になることができるから。

イ　頭の中に知識があってこそ、新しい発想が生まれてくるようになるから。

ウ　テストや会話などで知識を外に出すためには、まずは頭の中に入れる必要があるから。

〔　　〕

(2)　――線②「この段階」とはどのような段階か。適当なものを選びなさい。

ア　沢山の知識をインプットしている段階。

イ　新しいアイデアを考えている段階。

ウ　刺激に対するリンクが引き出される段階。

エ　思いついたアイデアを検証する段階。

〔　　〕

(3)　「連想」について本文の内容に合うものを二つ選びなさい。

ア　現在受けた刺激に直接的な関連がないものは、なにか似たようなことがあったと感じても思い出すことはできない。

イ　なにか似たようなことがあったと感じても、ただ似ていることを思い出すだけで終わってしまうことも多い。

ウ　現在受けた刺激に対して似たようなことを連想し、そこから考えを進めて新しいアイデアに辿り着けることがある。

エ　なにか似たようなことを連想し、それをきっかけに思いついたアイデアは、使いものになることが多い。

〔　　・　　〕

読書の価値 (3)

さて、このような連想のきっかけになる刺激とは、どんなものだろうか。それはさまざまで、そもそも刺激だと感じない些細なものかもしれない。実際、そういったものに敏感か鈍感かで、連想が起動するか、そのまま見逃すかが決まっているようにも考えられる。

日頃、人間はそんなに多くを経験するわけではない。自分の生活や仕事の範囲であれば、毎日はさほど変化はない。ときどき、旅行をすると刺激的なインプットがあるように感じるのは、それらが日常のものとは違っているから、いわば自分から遠く離れた情報だからである。距離的に遠く離れるという意味ではない。知識的、興味的に遠いということである。

現代は、旅行にいかなくても、TVやネットを通して、世界中の情報にアクセスできるので、日常から離れた刺激は、選り取りみどりである。ところが、たとえば、TVであれば、毎日、毎週、同じ番組を見て、ぼんやりと時間を過ごすようになって、結局はそれが日常になってしまう。日常になれば、刺激は薄くなる。薄くなったと、おそらく自覚できるだろう。「ああ、なんか面白いことがないかな」と欠伸をしたくなる気持ちこそが、誰にでも備わっている人間の好奇心の発動といえるだろう。

連想のきっかけとなる刺激は、日常から離れたインプットの量と質に依存している。そして、その種のインプットとして最も効率が良いのが、おそらく読書だ、と僕は考えているのだ。

読書以外にももちろんある。僕の場合は、自然の観察や、手を使った工作なども、ほとんど同じくらい刺激がある。これは個人差があるだろう。電車に乗って、車窓の流れる風景を眺めているときも、いろいろ思いつくが、目で見ている数々のもの、街や村、看板、人々、構造物、地形なども刺激になるようだ。

しかし、誰にでも共通して効果があるのは、やはり読書だと思う。それは、そこにあるものが、人間の個人の頭から出てきた言葉であり、その集合は、人間の英知の結晶だからである。本には、日常から距離を取る機能がある。本を開き、活字を読み始めるだけで、一瞬にして遠くまで行ける感覚がある。時間を遡ることも容易だし、自分以外の人物の視点でものを見ることもできる。経験したことのない感情も知ることができるし、人の思考の流れを辿ることだってできる。

（森博嗣『読書の価値』ＮＨＫ出版　による）

確認テスト　本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) 連想がより起きるようにするためにはどうすればよいか。本文の内容に合うように、解答欄（かいとうらん）に当てはまる言葉を本文中から七字で探し、書きぬきなさい。

［　　　　　　　］インプットを増やす。

(2) 本文の内容に合うものを選びなさい。

ア 旅行で刺激的なインプットがあるように感じられるのは、旅行で得られる情報が、自分の普段（ふだん）の知識や興味から遠いものだからである。

イ 現代ではネットで世界中の情報にアクセスできるので、どこに旅行したとしても刺激的な情報は得られなくなってしまっている。

ウ TVは自分の生活や仕事から離れた情報を得ることができるので、毎日、毎週TVにふれているうちに、自分の日常を変えてしまう力がある。

〔　　〕

(3) 「読書」について、筆者の考えに合うものを選びなさい。

ア 読書で得られる情報は人類の英知の一部であり、どんな人にとっても刺激が得やすい。

イ 本には日常から距離を取る機能があり、日常的に読書をするのは誤った習慣である。

ウ 誰にでもその人に合う本があり、自分と同じ視点でものごとを捉（とら）えた本が読書の効果が高い。

〔　　〕

羊と鋼の森（1）

（ピアノ調律師の板鳥に憧れる「僕（外村）」は、板鳥が所属する北海道の楽器店に就職し、先輩である柳のもとで見習いを始めました。「僕」はまだ顧客のピアノの調律を許されていませんでしたが、あるとき店の顧客である佐倉家の由仁からピアノの修理に来て欲しいとたのまれました。由仁はふたごの妹で、姉の和音とともにピアノを弾いています。）

ピアノは木でできた精密な楽器だ。湿度に注意するよう、調律師なら誰でも叩き込まれている。専門学校でも再三教え込まれてきた。本州にあった専門学校では、秋冬は湿気に気をつけるよう言われてきた。湿度が高いと木が膨張する。螺子が緩む。鋼は錆びる。音はあっけなく変わってしまう。でも、ここでは違う。湿度で音が変わってしまうのは同じだが、秋冬に気をつけなければいけないのは、乾燥だ。湿度の低さのほうなのだ。

「ありがとうございます」

ふたごの声が揃った。

「たぶんこれでもうだいじょうぶだと思います」

試しに鍵盤を押すと、自然に※ハンマーが上がった。簡単な作業だった。

「ちょっと弾いてみていいですか」

「もちろんです」

由仁がピアノの前の椅子にすわった。和音もすわった。ああ、このための椅子二脚だったのだ、と思うまもなく連弾が始まった。

【音の粒がぱっと広がった。くるくるくるっとした曲だった。何という曲なのか知らない。ふたごたちはいきいきとしていた。黒い瞳からも、上気した頬からも、肩先に垂らした髪の先からも、生きるエネルギーが立ち上るようだった。そのエネルギーを指先で変換してピアノに注ぐ。それが音楽に生まれ変わる。たしかに楽譜があって、そこに必要な音符が書かれているのだろうけれど、奏でられる音楽は完全にふたごたちのものだった。今ここで聴いている僕のためのものだった。】

「素晴らしかった」

力を込めて拍手をした。

①素晴らしいという言葉だとか、拍手だとか、僕からはそんな音しか出せないのが歯がゆい。こんな言葉で、こんな拍手で、今のふたりの演奏を称えられるとは思えない。

「ありがとうございました」

ふたごがにこにことお辞儀をする。

「こんなによろこんでもらったのは初めて」

「うん、初めて。ねー」

「ねー」

そんなわけはないだろう、と思う。②そんなわけがない。謙遜しているのだろう。

（宮下奈都『羊と鋼の森』文藝春秋 による）

※ハンマー…ピアノの中にあり、弦を叩いて音を出させる。多くは羊の毛を使ったフェルトでできている。

確認テスト

本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) 【　】の箇所の表現の仕方について、正しく述べたものを選びなさい。

ア 「僕」の視点から、ふたごの演奏の素晴らしさを印象的に表現している。

イ ふたごの視点から、演奏中の感情や思いを、比喩を用いて表現している。

ウ 第三者の視点から、「僕」の様子やふたごの演奏を写実的に表現している。

〔　〕

(2) ——線①「素晴らしい……歯がゆい」とあるが、このときの「僕」の様子を正しく述べたものを選びなさい。

ア ふたごの演奏を素晴らしいものだと感じはしたが、自分の作業がうまくいったかどうかに気を取られている。

イ ふたごの演奏があまりに素晴らしく、ふたりの演奏にふさわしい称賛の表現が思いつかないのをもどかしく思っている。

ウ ふたごの演奏を十分には理解することができず、力を込めた拍手をすることでなんとかその場を取り繕っている。

〔　〕

(3) ——線②「そんなわけがない」とあるが、「僕」はなぜこのように思っていると考えられるか。適当なものを選びなさい。

ア ふたごの演奏に対する「僕」の拍手に、ふたごがうれしそうにお辞儀をし、感謝の言葉を述べていたから。

イ ふたごの演奏を称えることができなかったので、よろこんでもらったという言葉は場にそぐわないものだったから。

ウ ふたごの演奏が素晴らしいものだったので、演奏をこれほどよろこんでもらったのが初めてだとは思えなかったから。

〔　〕

羊と鋼の森 (2)

（柳のもとでピアノ調律師の見習いをしている「僕（外村）」は、あるとき店の顧客である佐倉家のふたご・和音と由仁からピアノの修理をたのまれました。その帰り際、「僕」はふたごに引き留められます。）

「それでは、僕はこれで」

帰ろうとすると、ふたごに引き留められた。

「乾燥のせいでしょうか、いつもより少し全体的に音程が上がっているような気がするんです」

「微妙に気持ち悪い感じがします」

口々に言い出した。確かに少し気になるところはあった。でも、おかしいと言うほどではない。触らなくてだいじょうぶだと思った。触るとしても、僕じゃない。柳さんだ。

それなのに、①魔が差したとしか言いようがない。今の連弾で、完全に胸が熱くなってしまっていた。できるんじゃないか。微妙なずれだけを直せばいい。ふたごがもっと気持ちよくピアノを弾けるように。

ピアノは一台ずつ違う。わかっているつもりで、わかっていなかったのだ。初めて触るピアノ。乾燥しすぎている部屋。暑くないのに汗をかいた。緊張しているつもりもないのに指が震えた。わずかに回せばいいだけのピンを回しすぎてしまう。戻そうとして指が滑る。いつもなら難なくこなせる作業に途轍もない時間がかかった。少しだけ、少しだけ、と思いながら、望まぬほうに音がずれていくのがわかる。粒はまったく揃わない。やればやるほどずれて、焦ればさらに音の波をつかまえられなくなった。時間ばかりがどんどん経ち、②嫌な汗をぐっしょりかいた。今まで習ってきたことも、店で毎日練習していることも、どこかへ飛んでしまった。

そのとき、胸のポケットに入れていた携帯が震えた。ピアノから離れ、表示を見る。柳さんだった。今最もかけてきてほしくない相手であり、最もかけてきてほしい相手でもあった。

（中略）

「ん、どうした、外村。何かあったの」

テレパスか、と思う。こちらの気配が伝わったのだろうか。観念した。

「柳さん、すみません。明日の朝一で調律を一件入れていただきたいんです」

③気力を振り絞って、電話の向こうの柳さんに頭を下げた。

「佐倉さんのところ、今見ているんですが、触ってかえってだめにしてしまいました」

柳さんは三秒ほど黙っていてから、わかった、と言った。

なさけなかった。それ以上に、申し訳なかった。どうしても今日弾きたくて僕を見つけて連れてきたのに、結局は僕がだめにしてしまった。ふたごに申し訳ない。今日はもう弾けない。柳さんにも申し訳ない。店にも申し訳ない。勝手に触って勝手にだめにして、明日調律をし直すとしても代金は取れないだろう。

（宮下奈都『羊と鋼の森』文藝春秋　による）

確認テスト

本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ——線①「魔が差した」とあるが、これはどういうことか。適当なものを選びなさい。

ア　ふたごから音程がおかしいと指摘（してき）があったが、自分ではそれほどおかしいようには思えなかったということ。

イ　確かに少しおかしいところはあったが、ピアノを直すのは柳さんであるべきだと思ったということ。

ウ　自分が直すべきではないのに、ついこれくらいの作業なら自分でできると思ってしまったということ。

〔　　〕

(2) ——線②「嫌な汗をぐっしょりかいた」とあるが、このときの「僕」の様子として適当なものを選びなさい。

ア　ふたごにもっと気持ちよくピアノを弾いてほしいと思い、一心不乱に作業に取り組んでいる。

イ　いつもなら難なくこなせる作業でも、初めて触るピアノなので時間がかかり、いらだっている。

ウ　自分がやるべきでない調律に手を出したうえに作業がうまくいかず、焦りを感じている。

〔　　〕

(3) ——線③「気力を振り絞って、電話の向こうの柳さんに頭を下げた」とあるが、このときの「僕」の様子として適当でないものを選びなさい。

ア　自分の調律がうまくいかなかったことを柳さんに知られないよう、なんとか取り繕（つくろ）おうとしている。

イ　勝手な判断でピアノをだめにした自分へのなさけない気持ちを何とか堪（こら）え、柳さんに助けを求めようとしている。

ウ　柳さんに迷惑（めいわく）をかけることになる申し訳なさから気が重いが、正直に事情を打ち明けようとしている。

〔　　〕

羊と鋼の森 (3)

（ピアノ調律師の見習いをしている「僕（外村）」は、あるとき、店の顧客である佐倉家のふたご・和音と由仁のピアノの調律に失敗してしまいました。）

「生意気かもしれないけど、やろうとしてること、すごくよくわかったんです。凛とした音でした。欲しかった音だ、って思いました。だから、うまくいかなくてもぜんぜん嫌な感じじゃなかった。たぶん、もうちょっと、ほんのちょっとの何かなんだと思います」

和音も口を開いた。

「私もそう思います。いくらうまくまとまってたって、全部冴えない音に合わせられちゃったらがっかりだもの。これくらい挑戦してる音、私も好きです」

挑戦か。僕は何に挑戦しようとしたのだろう。①唇を噛むしかない。挑戦などしていない。ただの身の程知らずだった。

「申し訳なかったです」

頭を下げたとき、思いがけず涙が滲みそうになった。

「明日の朝、柳が――いつもの調律師が、来ます。ほんとうにすみませんでした」

「いいえ、無理に頼んだのはこっちですから」

もう一度謝ってから、部屋を出た。②鞄がやけに重かった。ぜんぜんだめだ、と思った。（中略）

夜になって、急激に気温が下がっていた。フロントガラスが曇る。のろのろと運転して、クラクションを何度も鳴らされながら帰った。

店に戻ると、一階のシャッターは下りているものの、二階にはまだ電気がついていた。そう遅い時間ではないが、ピアノ教室が入っていない曜日には、六時半に店を閉めてしまう。人が残っていないといいと思った。

通用口から入って、二階へ上る。二つ提げた鞄が重い。誰もいないことを期待してドアを開けると、③今日に限って板鳥さんがいた。出先から戻ったばかりなのか、外出用のジャケットを着ている。まともに顔を見ることができなかった。あんなに憧れたのに。板鳥さんから学びたいことがたくさんあったはずだったのに。僕の技術は未熟などという域にさえ達していない。板鳥さんに教わることなど何ひとつないだろう。

「お疲れさまでした」

穏やかな声をかけられて、いえ、としか言えなかった。それ以上口を開くと気持ちが崩れてしまいそうだった。

（宮下奈都『羊と鋼の森』文藝春秋　による）

確認テスト　本文を読んで、問いに答えなさい。

(1)　――線①「唇を噛むしかない」とあるが、このときの「僕」の様子として適当なものを選びなさい。

ア　調律がうまくいかなかった以上ふたごに反論するわけにもいかず、おとなしくその場をやり過ごしている。

イ　ふたごの言葉に励(はげ)まされ、自分がどのような音の調律に挑戦しようとしたのか自問自答している。

ウ　みずからの技量もわきまえずに調律をしようとした自分がなさけなく、くやしさをこらえている。

〔　　〕

(2)　――線②「鞄がやけに重かった」とあるが、これはどういうことを表しているか。適当なものを選びなさい。

ア　調律に失敗してしまった「僕」が、深く気を落としていること。

イ　調律に必死に取り組んだ「僕」に、ふたごが感謝していること。

ウ　調律に挑戦した「僕」が、なにか大切なものをつかんだこと。

〔　　〕

(3)　――線③「今日に限って板鳥さんがいた」とあるが、これはどういうことか。適当なものを選びなさい。

ア　もう店を閉めてしまう時間だったが、いつものように板鳥さんが残っていたということ。

イ　調律に失敗し誰にも会いたくないときに、よりによって憧れていた板鳥さんがいたということ。

ウ　自分が調律について学びたいときに、都合よく出先から戻ったばかりの板鳥さんがいたということ。

〔　　〕

羊と鋼の森 (4)

「板鳥さん」
震えそうになる声を抑える。
「調律って、どうしたらうまくできるようになるんですか」
聞いてから、ばかな質問だと思った。うまくどころか、調律の基本さえできなかった。半年間は先輩について見て覚える。そういう決まりなのに、勝手に破ったのは自分だ。※もう少しのところでふりかえって、亡き妻が冥界へ戻ってしまったオルフェウスの神話を思い出した。ほんとうにもう少しだったんだろうか。近くに見えて、きっとほんとうは果てしなく遠かったのだろうと思う。
「そうですねえ」
板鳥さんは考え込むような顔をしてみせたが、実際に考えていたのかどうかはわからない。板鳥さんのつくる音が、ふっと脳裏を掠めた。初めて聴いたピアノの音。僕はそれを求めてここへきた。あれから少しも近づいてはいない。もしかしたら、これからもずっと近づくことはできないのかもしれない。①初めて、怖いと思った。鬱蒼とした森へ足を踏み入れてしまった怖さだった。
「いったいどうしたら」
僕が言いかけると、
「もしよかったら」
板鳥さんがチューニングハンマーを差し出した。チューニングピンを締めたり緩めたりするときに使うハンマーだ。
「これ、使ってみませんか」
差し出されたまま柄を握った。持ってみると、ずしりと重いのに手にひたっとなじんだ。
「お祝いです」
お祝いという言葉の意味を計りかねて、②怪訝そうな顔をしていたのだろう。
「ハンマーは要りませんか」
聞かれて、思わず、要ります、と答えていた。森は深い。それでも③引き返すつもりはないのだとはっきり気づいた。
「すごく使いやすそうです」
「すごく使いやすそうなだけでなく、実はすごく使いやすいのです。よかったらどうぞ。私からのお祝いです」
板鳥さんは穏やかに言った。
「何のお祝いですか」
こんな日に。記憶にある限り、僕の人生でいちばんだめだった日に。
「なんとなく、外村くんの顔を見ていたらね。きっとここから始まるんですよ。お祝いしてもいいでしょう」
「ありがとうございます」
④お礼の語尾が震えた。板鳥さんは僕を励まそうとしてくれているのだ。森の入口に立った僕に、そこから歩いてくればいいと言ってくれているのだ。

（宮下奈都『羊と鋼の森』文藝春秋　による）

※もう少しの〜…亡くなった妻を取り戻すために冥界にいったオルフェウスが、冥界を出るまで振り返ってはならないという条件を破ったために妻を連れ帰ることができなかったというギリシャ神話の話を指している。

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線①「初めて、怖いと思った」とあるが、どういうことを怖いと思ったのか。適当なものを選びなさい。

ア 半年間は先輩のもとで見て覚えるという決まりなのに、その決まりを勝手に破り調律がうまくいかなかったこと。

イ 板鳥さんの調律するようなピアノの音を、自分は決して調律することができるようにならないのではないかということ。

ウ 調律について板鳥さんのようになりたいと思ってはいるものの、自分の悩みをうまく言葉にすることができないこと。

〔　〕

(2) ――線②「怪訝そうな顔」とあるが、これはどのような顔か。適当なものを選びなさい。

ア 板鳥さんが自分の問いに答えてくれないことに不満な顔。

イ 板鳥さんに近づくことができるのか不安に感じる顔。

ウ 板鳥さんの発言の意図がわからず、不審に思う顔。

〔　〕

(3) ――線③「引き返すつもりはない」とはどういうことを表しているのか。適当なものを選びなさい。

ア これからは調律を先輩について見て覚えるようにし、もう二度と決まりを破るつもりはないということ。

イ お祝いという言葉の意味は計りかねるものの、ハンマーを受け取らないつもりではないということ。

ウ 自分も板鳥さんのつくる音に近づけるよう、調律の道をあきらめるつもりはないということ。

〔　〕

(4) ――線④「お礼の語尾が震えた」とあるが、このときの「僕」の心情として適当なものを選びなさい。

ア 優しく励ましてもらったことで、かえって自分に対するなさけない気持ちを強く感じ、くやしさをかみしめている。

イ 憧れている板鳥さんが、ここから調律の道を進んでくればいいと自分を励ましていることに気づき、感極まっている。

ウ 勝手なことをしたために叱られるのではないかと不安だったが、穏やかに励ましてもらったので、緊張がほぐれている。

〔　〕

風に恋う (1)

（千間学院高校吹奏楽部は、吹奏楽コンクール西関東大会で推薦団体に選ばれ、全日本への出場を決めました。本番の前日、コーチの不破瑛太郎は一年生の茶園基と三年生の鳴神玲於奈だけを練習会場の体育館に残し、ソロパートを決める最後のオーディションを行います。）

「私が先に吹きます」

玲於奈がそう宣言し、※オーボエのリードを口に咥える。息を吸う音に、天井から響いていた雨音が掻き消された。①じっとりと湿った体育館に木漏れ日が差すみたいに、オーボエが歌う。同じソロなのに、同じ音符を追っているのに、自分が吹くのとは全然違う。

【やっぱり、祈りだ。最後のコンクールでソロを吹き切って終わりたいと願う音。新しい場所へ行くから、自分の過ごした場所を名残惜しく撫でる。そんな演奏だった。】

でも、それでも、ソロは僕が吹きたい。玲於奈の演奏を聞き届け、基は楽器を構えた。

「玲於奈」

※サックスを抱きしめて、二歳年上の幼馴染みの名前を呼ぶ。同じものに憧れて、一緒に吹奏楽を始めた、幼馴染みを。

「見てて」

自分がそう言えば、玲於奈は、絶対に見ていてくれる。オーボエを両手で抱えて、玲於奈は基の方へ体を向けた。正面から、基を見た。

マウスピースを口に含んで、息を吹き込んだ。胸の中に滞留する精一杯の祈りを、音にのせる。自分は不破瑛太郎と音楽を続けるために全日本のステージに立つ。ソロを吹く。お前にはあと二年ある。玲於奈に譲ってやればいいのに。耳の奥で、そんな声がする。西関東大会が終わってからずっと、②そう思う自分がいた。弱い自分。優しい自分。でも、やっぱり弱い自分。

最後だとか、来年もあるとか、そんなんじゃない。この時間は、いつ終わるかわからない貴重で愛しいものなのだ。

玲於奈と一緒のコンクールは、明日が最後だ。だから僕は、全力で玲於奈に勝つ。

最後の音の残響が、いつもより長く聞こえた。がらんとした体育館のフロアに響き、遠くから雨音が忍び寄ってくる。

「ありがとう」

瑛太郎の声に、基ははっと我に返った。

彼は静かな目をしていた。でも、歯を食いしばっているのがわかった。

その目が、玲於奈へ向く。

「すまない」

③間髪入れず瑛太郎は言った。擦れ声で、ガラスを噛み砕くような苦しそうな言い方で。

そしてすぐに基へと視線を移し、言った。

ソロはお前だ、と。

（額賀澪『風に恋う』文藝春秋　による）

※オーボエ、サックス…いずれも管楽器の一種。

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) 【 】の箇所の表現について、正しく述べたものを選びなさい。

ア 玲於奈の視点から、演奏に込める思いを述べている。

イ 基の視点から、玲於奈の演奏に感じたことを述べている。

ウ 瑛太郎の視点から、競い合う二人の姿を述べている。

〔　　〕

(2) ――線①「じっとりと湿った体育館に木漏れ日が差すみたいに、オーボエが歌う」とあるが、この表現について正しく述べたものを選びなさい。

ア 体育館の外で降っていた雨が上がり、空が晴れ渡る様子を写実的に表現している。

イ 玲於奈が演奏に込める祈りの強さを、倒置を用いて強調して表現している。

ウ オーボエの美しい音が体育館に響く様子を、直喩と擬人法を用いて表現している。

〔　　〕

(3) ――線②「そう思う」とあるが、「そう」が指す内容が書かれた一続きの二文を探し、最初と最後の三字を答えなさい。ただし、句読点も一字に含む。

□□□ ～ □□□

(4) ――線③「間髪入れず瑛太郎は言った」とあるが、このときの瑛太郎の様子として適当なものを選びなさい。

ア 二人の演奏がともに素晴らしいものだったため、基と玲於奈のどちらをソロに指名するか決めかねて途方に暮れている。

イ 演奏の出来から基をソロに指名することを決めたが、玲於奈にも奮起してほしいとあえてきびしい態度をとっている。

ウ 基がソロにふさわしいと思うものの、最後のコンクールに臨む玲於奈をソロに指名しないことを、つらく感じている。

〔　　〕

風に恋う ⑵

（全日本吹奏楽コンクールの前日、茶園基と鳴神玲於奈は、練習会場の体育館でソロパートを決める最後のオーディションを受けました。吹奏楽部のコーチ・不破瑛太郎は、基をソロに指名しました。）

「ちょっと一人になりたいんで、私だけ電車で帰っちゃ駄目ですか？」

ホテルの場所、頭に入ってますから。笑みまでこぼしながら、玲於奈はそう続けた。瑛太郎が口を開きかけ、閉じる。だいぶ間を置いてから、首を横に振った。

「悪いな、一人じゃ帰せない」

そう言って、瑛太郎は基の腕を掴んだ。強く強く、引かれる。

①「俺と茶園はちょっとトイレに行って来るから、戻ったらタクシーを呼んで帰るぞ」

玲於奈を一人残し、基と瑛太郎は体育館を出た。一歩外に出ると、湿気が体にまとわりつく。扉をしっかり閉めた瑛太郎は、誰一人ここを通さないという顔で扉に寄りかかった。

サックスを首から提げたまま、基も体育館の外壁に背中を預ける。外はすっかり暗くなって、雨脚が強くなっていた。サッシの下から雨粒を眺めていたら、水滴がメガネのレンズに当たった。丸い雫が、いくつもいくつも、レンズに模様を作る。

瑛太郎に肩を掴まれた。

「お前は泣いちゃ駄目だ」

低い声で、そう言われる。

「わかってます」

瞬きを繰り返して、②込み上げて来たものを体の奥へ戻す。肩にのった瑛太郎の手に、一際力がこもった。痛い。指が肩にめり込みそうだ。

「二人で吹かせてやりたかった」

ぽつりと、彼がそんなことを言う。臆病で幼くて優しいことを言う。

「ソロを前半と後半で分けるとか、掛け合いにするとか、そんなことばかり、ここ数日、ずっと考えてた」

「駄目ですよ」

即答して、唇を噛んだ。そうしないと、涙があふれてきそうだった。

「ぶつかり合うから、音楽は輝くんだ。仲良しこよしじゃなくて、戦って、たくさんの敗者が出て、そうやって、磨かれていくんだ」

③そう思わないとやっていられない。吹奏楽なんて、やっていられない。コンクールなんて、やっていられるか。

「そうだな」

瑛太郎の掌は強ばったままだった。伝わってくる震えに、基は目を伏せた。ずっと一緒に練習してきたアルトサックスをもう一度抱きしめ、金色のボディに額を擦りつけた。

ずっと、聞こえる。

玲於奈の泣き声が、体育館から聞こえてくる。

（額賀澪『風に恋う』文藝春秋 による）

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ——線①「俺と茶園はちょっとトイレに行って来る」とあるが、瑛太郎はなぜこのように言っているのか。適当なものを選びなさい。

ア 玲於奈のつらい気持ちを思い、トイレに行くことを口実にしばらく玲於奈を一人にしようと思ったから。

イ 基に対して、玲於奈こそつらいのだから泣くべきではないということを注意しようと思ったから。

ウ 表立っては許可を出せないものの、一人で帰ってよいということを玲於奈に暗に伝えようと思ったから。

〔　　〕

(2) ——線②「込み上げて来たもの」とは何を指しているか。本文中から書きぬきなさい。

〔　　〕

(3) ——線③「そう思わないとやっていられない」とあるが、このときの基の様子として適当なものを選びなさい。

ア ぶつかり合うから音楽は輝くのだと思っていたが、ソロを二人で吹かせてやりたかったという瑛太郎の言葉に、それまでの自分の信念がゆらぐのを感じている。

イ ぶつかり合うから音楽は輝くのだとわかってはいるが、玲於奈のことを思うとつらく、これも必要なことだと何とか自分に言い聞かせようとしている。

ウ ぶつかり合うから音楽は輝くのだと考える基にとって、瑛太郎や玲於奈の態度は理解できるものではなく、音楽に対する考えの違(ちが)いにいらだちを覚えている。

〔　　〕

水を縫う（1）

（手芸が好きな「僕（松岡清澄）」は、高校に入学後、後ろの席の宮多雄大から声をかけられるようになりました。「僕」は中学生のころ仲の良い友だちがおらず、祖母にそのことを心配されていました。）

昼休みの教室には、机をくっつけたいくつもの島ができていた。大陸と呼びたいような大所帯もある。中学の給食の時間とは違う。めいめい仲の良い相手と昼食をともにすることができる。

入学式から半月以上過ぎた。僕は教卓の近くの、机みっつ分の島にいる。宮多を中心とする、五人組のグループだ。

【宮多たちは、にゃんこなんとかという僕の知らないスマホゲームの話で盛り上がっている。猫のキャラクターがたくさん出てきて戦うのだという。ゲームをする習慣がないから、意味がよくわからない。さっきからぜんぜん会話に入れない。課金とかログインボーナスという単語が飛び交っている。もう、相槌すら打てなくなってきた。】

祖母の顔を思い出して、①懸命に話についていこうとした。だって友だちがいないのは、よくないことなのだ。家族に心配されるようなことなのだから。

「なあ、松岡くんは」

宮多の話す声が、途中で聞こえなくなった。ふいに※高杉くるみが視界に入ったから。

世界地図なら、砂粒ほどのサイズで描かれる②孤島。そこに彼女はいた。箸でつまんだたまごやきを口に運んでいる。唇の両端がきゅっと持ち上がった。虚勢を張るわけでもなく、おどおどするでもなく、たまごやきを味わっている。その顔を見た瞬間「ごめん」と口走っていた。

「え」

「ごめん。俺、見たい本あるから席に戻るわ」

③ぽかんと口を開ける宮多たちに、背を向ける。

図書室で借りた、世界各国の民族衣装に施された刺繍を集めた本を開く。宮多たちがこの本に興味を示すとは到底思えない。わかってもらえるわけがない。ほんとうは『明治の刺繍絵画名品集』というぶあつい図録がよかった。残念ながらそちらは貸出禁止になっていたのだ。どのように糸を重ねてあるか、食い入るように眺める。ここはこうなって、こうなってて。勝手に指が動く。

（寺地はるな『水を縫う』集英社　による）

※高杉くるみ…「僕」と小学校、中学校が一緒だった生徒で、変わっているとみなされていた彼女のことを、「僕」はかっこいいと思っていた。

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) 【 】の箇所の表現について、正しく述べたものを選びなさい。

ア 「僕」の視点から、話の意味がよくわからず、グループの会話に入れない思いを描いている。

イ 五人のそれぞれの視点から、ゲームの話がだんだん盛り上がっていく状況を描いている。

ウ 第三者の視点から、グループの五人の思いがすれ違っていく様子を客観的に描いている。

〔　　〕

(2) ――線①「懸命に話についていこうとした」のはなぜか。最も適当なものを選びなさい。

ア せっかく友だちになることができた同級生が、どんなゲームに興味を持っているのか知りたいと思ったから。

イ たとえ意味がわからなかったとしても、友だちなのだからほどほどに話を合わせてやり過ごそうと思ったから。

ウ 友だちがいないのは、家族に心配されるようなよくないことなので、話についていくべきだと思ったから。

〔　　〕

(3) ――線②「孤島」は何を表しているか。適当なものを選びなさい。

ア どの机ともつくことなく、ただ一つ置かれている机。

イ 昼食のなかで、とりわけ楽しみにしているたまごやき。

ウ 一人で不安そうに過ごしている高杉くるみの姿。

〔　　〕

(4) ――線③「ぽかんと口を開ける」とあるが、この様子を表す言葉として適当なものを選びなさい。

ア あっけにとられる　　イ 途方に暮れる

ウ お茶を濁す　　エ 気をもむ

〔　　〕

水を縫う ⑵

（ある日の昼休み、「僕（松岡清澄）」は、ゲームの話をしていた宮多たちから離れ、自分の席に戻ってしまいました。その日、下校していた「僕」のスマートフォンに宮多からのメッセージが届きました。）

「昼、なんか怒ってた？　もしや俺あかんこと言うた？」

違う。声に出して言いそうになる。宮多はなにも悪いことをしていない。ただ僕があの時、①気づいてしまっただけだ。自分が楽しいふりをしていることに。

　いつも、ひとりだった。

　教科書を忘れた時に気軽に借りる相手がいないのは、心もとない。ひとりでぽつんと弁当を食べるのは、わびしい。でもさびしさをごまかすために、自分の好きなことを好きではないふりをするのは、好きではないことを好きなふりをするのは、もっともっとさびしい。

　好きなものを追い求めることは、楽しいと同時にとても苦しい。②その苦しさに耐える覚悟が、僕にはあるのか。

　文字を入力する指がひどく震える。

「ちゃうねん。ほんまに本読みたかっただけ。刺繍の本」

　ポケットからハンカチを取り出した。祖母に褒められた猫の刺繍を撮影して送った。すぐに既読の通知がつく。

「こうやって刺繍するのが趣味で、ゲームとかほんまはぜんぜん興味なくて、自分の席に戻りたかった。ごめん」

　ポケットにスマートフォンをつっこんだ。数歩歩いたところで、またスマートフォンが鳴った。

「え、めっちゃうまいやん。松岡くんすごいな」

③そのメッセージを、何度も繰り返し読んだ。

　わかってもらえるわけがない。どうして勝手にそう思いこんでいたのだろう。

　今まで出会ってきた人間が、みんなそうだったから。だとしても、宮多は彼らではないのに。

　いつのまにか、また靴紐がほどけていた。しゃがんだ瞬間、川で魚がぱしゃんと跳ねた。波紋が幾重にも広がる。太陽の光を受けた川の水面が風で波打つ。まぶしさに目の奥が痛くなって、じんわりと涙が滲む。

　きらめくもの。揺らめくもの。目に見えていても、かたちのないものには触れられない。すくいとって保管することはできない。太陽が翳ればたちまち消え失せる。だからこそ美しいのだとわかっていても、願う。布の上で、あれを再現できたらいい。（中略）

　どんな布を、どんなかたちに裁断して、どんな装飾をほどこせばいいのか。それを考えはじめたら、いてもたってもいられなくなる。

　それから、明日。明日、学校に行ったら、④宮多に例のにゃんこなんとかというゲームのことを、教えてもらおう。好きじゃないものを好きなふりをする必要はない。でも僕はまだ宮多たちのことをよく知らない。知ろうともしていなかった。

　靴紐をきつく締め直して、歩く速度をはやめる。

（寺地はるな『水を縫う』集英社　による）

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ——線①「気づいてしまった」とあるが、何に気づいたのか。本文中から十五字で探し、最初と最後の三字を答えなさい。

□□□～□□□

(2) ——線②「その苦しさ」とは、ここではどのような苦しさを指しているか。適当なものを選びなさい。

ア 自分が本当に好きなことを、好きではないふりをするという苦しさ。

イ 好きなものを追い求めることで、ひとりになってしまうという苦しさ。

ウ 興味がないのに興味があるようにふるまい、さびしさを感じるという苦しさ。

〔　　〕

(3) ——線③「そのメッセージを、何度も繰り返し読んだ」とあるが、このときの「僕」の様子を表した一文となるように、（　）に当てはまる内容を選びなさい。

送られてきたメッセージが（　）、好きなものをわかってもらえるわけがないと思い込んでいた自分に気づかされている。

ア 意外にも素直な称賛の言葉であったことに驚き

イ 誤解が解けたことがわかるものだったので安心し

ウ 今まで出会った人間とは異なるもので疑わしく思い

〔　　〕

(4) ——線④「宮多に例の……教えてもらおう」とあるが、「僕」はなぜこのように思ったのか。最も適当なものを選びなさい。

ア 自分の好きなことを理解してくれた宮多に感謝し、自分も宮多たちの好きなものを好きなふりをするべきだと思ったから。

イ 自分が宮多たちのことを知ろうともしていなかったことに気づかされ、宮多たちのことを少しでも知ろうと思ったから。

ウ 自分は刺繍をすることだけが趣味だと考えていたが、宮多たちに合わせてゲームにも興味を持つべきだと思ったから。

〔　　〕

故郷（1）

きびしい寒さのなかを、※二千里のはてから、別れて二十年にもなる故郷へ、私は帰った。

もう真冬の候であった。そのうえ故郷へ近づくにつれて、空模様はあやしくなり、冷い風がヒューヒュー音を立てて、※船のなかまで吹きこんできた。※苫のすき間から外をうかがうと、鉛色の空の下、わびしい村々が、いささかの活気もなく、あちこちに横たわっていた。①おぼえず寂寥の感が胸にこみあげた。

ああ、これが二十年来、片時も忘れることのなかった故郷であろうか。

私のおぼえている故郷は、まるでこんなふうではなかった。私の故郷は、もっとずっとよかった。その美しさを思いうかべ、その長所を言葉にあらわそうとすると、しかし、その影はかき消され、言葉は失われてしまう。やはりこんなふうだったかもしれないという気がしてくる。そこで私は、こう自分に言いきかせた。もともと故郷はこんなふうなのだ——進歩もないかわりに、私が感じるような寂寥もありはしない。そう感じるのは、自分の心境が変っただけだ。なぜなら、②こんどの帰郷はけっして楽しいものではないのだから。

こんどは、故郷に別れを告げに来たのである。私たちが長いこと※一族で住んでいた古い家は、今はもう他人の持ち物になってしまった。明け渡しの期限は今年いっぱいである。どうしても旧暦の正月の前に、住みなれた古い家に別れ、なじみ深い故郷をあとにして、私がいま暮らしを立てている異郷の地へ引っ越さねばならない。

あくる日の朝はやく、私はわが家の表門に立った。屋根には一面に枯草の※やれ茎が、折からの風になびいて、③この古い家が持ち主を変えるほかなかった理由を説きあかし顔である。いっしょに住んでいた親戚たちは、もう引っ越してしまったあとらしく、ひっそり閑としている。自宅の庭さきまで来てみると、母はもう迎えに出ていた。あとから八歳になる甥の宏児も飛び出した。

母は機嫌よかったが、④さすがにやるせない表情は隠しきれなかった。私を坐らせ、休ませ、茶をついでくれなどして、すぐ引っ越しの話はもち出さない。宏児は、私とは初対面なので、離れたところに立って、じっと私のほうを見つめていた。

だが、とうとう引っ越しの話になった。私は、あちらの家はもう借りてあること、家具も少しは買ったこと、あとは家にある道具類をみんな売りはらって、その金で買い足せばよいこと、などを話した。

（竹内好訳『魯迅文集Ⅰ』筑摩書房 所収「故郷」による）

※二千里…今の中国の一里は約五百メートル。ここでは遠い距離を表している。
船…魯迅の故郷である浙江省などでは水路が多く、水運が発達している。
苫…スゲ・カヤなどの草を編み、舟や小屋などにかけて雨露をしのぐもの。
一族…大家族制度では、血縁のある数家族が集住し、共同で生活する。
やれ茎…折れ、しなびた茎。

確認テスト　本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線①「おぼえず寂寥の感が胸にこみあげた」のはなぜか。適当なものを選びなさい。

ア 真冬の帰郷だったため、あまりに寒さが厳しかったから。
イ 故郷が、記憶にあるものに比べあまりにわびしかったから。
ウ 片時も忘れることがなかった故郷にようやく到着したから。

〔　　〕

(2) ――線②「こんどの帰郷はけっして楽しいものではない」とあるが、なぜこんどの帰郷は楽しいものではないのか。適当なものを選びなさい。

ア 厳しい寒さの中を、二千里も離れた地から帰郷したから。
イ 故郷が、覚えていたものとあまりにも違っていたから。
ウ もともと故郷は進歩のないものだと思い知らされたから。
エ 家を明け渡し、故郷に別れを告げるための帰郷だから。

〔　　〕

(3) ――線③「この古い家が持ち主を変えるほかなかった理由を説きあかし顔である」とはどういうことか。適当なものを選びなさい。

ア もう「私」の親戚が引っ越してしまったことが、家屋からわかるということ。
イ 家を明け渡さねばならないわけが、家屋の様子からわかるということ。
ウ 心情の変化のために、故郷の屋根の見た目も違って見えるということ。

〔　　〕

(4) ――線④「さすがにやるせない表情は隠しきれなかった」とあるが、このときの母の心情として適当なものを選びなさい。

ア 故郷が変わってしまったことを、つらく感じている。
イ 「私」に、引っ越しを打ち明けることをためらっている。
ウ 住みなれた家を離れなければならず、せつなく思っている。

〔　　〕

(5) 本文を時間の変化に注目して二つの場面に分けたとき、二つ目の場面はどこからはじまるか。最初の三字を答えなさい。

故郷（2）

「一、二日休んだら、親戚廻りをしてね、そのうえで発つとしよう」と母は言った。

「ええ」

「それから、閏土ね。あれが、いつも家へ来るたびに、おまえの噂をしては、しきりに会いたがっていましたよ。おまえが着くおよその日取りは知らせておいたから、いまに来るかもしれない」

　このとき突然、私の脳裡に①不思議な画面がくりひろげられた――紺碧の空に金色の丸い月がかかっている。その下は海辺の砂地で、見わたすかぎり緑の西瓜がうわっている。そのまん中に十一、二歳の少年が、②銀の首輪をつるし、鉄の※刺叉を手にして立っている。そして一匹の「※猹」を目がけて、ヤッとばかり突く。すると「猹」は、ひらりと身をかわして、かれの股をくぐって逃げてしまう。

　この少年が閏土である。かれと知りあったとき、私もまだ十歳そこそこだった。もう三十年近い昔のことである。そのころは、父もまだ生きていたし、家の暮らし向きも楽で、私は坊っちゃんでいられた。ちょうどその年は、わが家が大祭の当番にあたっていた。この祭の当番というのが、三十何年目にただ一回順番が廻ってくるとかで、ごく大切な行事だった。正月に、祖先の像を祭るのである。さまざまの供物をささげ、祭器もよく吟味するし、参詣の人も多かったので、祭器をとられぬように番をする必要があった。私の家には「忙月」がひとりいるだけである（私の郷里では、雇い人は三種類ある。年間とおして決った家で働くのが「長年」、日ぎめで働くのが「短工」、自分でも耕作するかたわら、年末や※節季や年貢集めのときなどに、決った家へ来て働くのが「忙月」とよばれた）。ひとりでは手が足りぬので、かれは自分の息子の閏土に祭器の番をさせたいが、と私の父に申し出た。

　父はそれを許した。私もうれしかった。というのは、かねて閏土という名は耳にしていたし、おなじ年ごろなこと、また※閏月の生まれで、※五行の土が欠けているので父親が閏土と名づけたことも承知していたから。かれは罠をかけて小鳥を取るのがうまかった。

　それからというもの、来る日も来る日も新年が待ちどおしかった。新年になれば閏土がやってくる。待ちに待った年末になり、ある日のこと、母が私に、閏土が来たと知らせてくれた。飛んでいってみると、かれは台所にいた。つやのいい丸顔で、小さな毛織りの帽子をかぶり、キラキラ光る銀の首輪をはめていた。それは父親の溺愛ぶりを示すもので、どうか息子が死なないようにと神仏に願をかけて、その首輪でつなぎとめてあるのだ。かれは人見知りだったが、私にだけは平気で、そばに誰もいないとよく口をきいた。半日もせずに私たちは仲よくなった。

（竹内好訳『魯迅文集Ⅰ』筑摩書房　所収「故郷」による。一部表記を変えた箇所がある）

※刺叉…柄の先に二股に分かれた金具を付けた武器。

猹…アナグマに似た動物とされる。猹は魯迅の造字。　節季…決算期。普通、盆と暮れ。

閏月…旧暦は一年が三百五十四日であり、そのままでは季節とのずれが生じていく。このため、数年おきに一年を十三か月とし、ある月を繰り返してずれを修正する。この月を閏月という。

五行の～…古代中国で万物のもととなると考えられた五つの元素（木・火・土・金・水）を五行という。中国では生まれた年・月・日・時の四つに干支を当てはめる風習があり、ここでは閏土の生まれた年月日時には、土に属する干支がないということ。

確認テスト　本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線①「不思議な画面」が具体的にえがかれている箇所の最初と最後の三字を答えなさい。ただし句読点も字数に含む。

□□□～□□□

(2) ――線②「銀の首輪」について、次の解答欄に当てはまる言葉を、本文中から書きぬきなさい。

銀の首輪は、閏土の父親が、息子が死なないよう願ってつけさせているもので、□□□□□□□を示すものである。

(3) 「私」と閏土について**誤って**述べたものを選びなさい。

ア 「私」が閏土と出会ったのは三十年ほど前で、そのころの「私」の家は経済的に余裕があった。

イ 閏土は大祭の当番にあたる家の息子で、正月になると祭器をとられないために番をしていた。

ウ 二人は同じ年ごろで、年末のある日にはじめて出会うと、半日もせずに仲よくなった。

〔　　〕

(4) 本文について正しく述べたものを選びなさい。

ア 本文では、母の言葉をきっかけに、「私」が閏土と出会ったころのことについて回想がはじまる。

イ 本文では、過去の母との対話の回想から、現在の場面にもどって「私」の家の新年の様子がえがかれる。

ウ 本文では、「私」の少年時代の回想のあと、現在の場面にもどって閏土との出会いがえがかれる。

〔　　〕

故郷(3)

（三十年ほど前、「私」は閏土と知りあい、仲よくなりました。）

そのとき何をしゃべったかは、おぼえていない。ただ閏土が、※城内へ来ていろいろ珍しいものを見たといって、はしゃいでいたことだけは記憶に残っている。

あくる日、鳥を捕ってくれと頼むと、かれは、

「だめだよ。大雪が降ってからでなきゃ。おいらとこ、砂地に雪が降るだろ。そうしたら雪をかいて、すこし空地をこしらえるんだ。それから、大きな籠を持ってきて、短いつっかえ棒を※かって、くず籾をまくんだ。そうすると、小鳥が来て食うから、そのとき遠くのほうから、棒にゆわえてある縄を引っぱるんだ。そうすると、みんな籠から逃げられないんだ。何だっているぜ。※稲鶏だの、角鶏だの、鳩だの、藍背だの……」

それからは雪の降るのが待ちどおしくなった。

閏土はまた言うのだ。

「今は寒いけどな、夏になったら、おいらとこへ来るといいや。おいら、昼間は海へ貝がら拾いに行くんだ。赤いのも、青いのも、何でもあるよ。※『鬼おどし』もあるし、『観音さまの手』もあるよ。晩には父ちゃんと①西瓜の番に行くのさ。おまえも来いよ」

「泥棒の番？」

「そうじゃない。通りがかりの人が、喉がかわいて西瓜を取って食ったって、そんなの、おいらとこじゃ泥棒なんて思やしない。番するのは、あな熊や、はりねずみや、猹さ。月のある晩に、いいかい、ガリガリって音がしたら、猹が西瓜をかじってるんだ。そうしたら手に刺叉をもって、忍びよって……」

「咬みつかない？」

（中略）

「刺叉があるじゃないか。忍びよって、猹を見つけたら突くのさ。あん畜生、りこうだから、こっちへ走ってくるよ。そうして股をくぐって逃げてしまうよ。なにしろ毛が油みたいに滑っこくて……」

こんなにたくさん珍しいことがあろうなど、それまで私は思ってもみなかった。海には、そのような五色の貝がらがあるものなのか。西瓜には、こんな危険な経歴があるものなのか。私は西瓜といえば、②果物屋に売っているものとばかり思っていた。

「おいらとこの砂地では、高潮の時分になると『跳ね魚』がいっぱい跳ねるよ。みんな蛙みたいな足が二本あって……」

ああ、閏土の心は神秘の宝庫で、③私の遊び仲間とは大ちがいだ。こんなことは私の友だちは何も知ってはいない。閏土が海辺にいるとき、かれらは私と同様、高い塀に囲まれた中庭から四角な空を眺めているだけなのだ。

惜しくも正月は過ぎて、閏土は家へ帰らねばならなかった。別れがつらくて、私は声をあげて泣いた。

（竹内好訳『魯迅文集Ⅰ』筑摩書房　所収「故郷」による。
一部表記を変えた箇所がある）

※城内…町の中。中国では町全体が城壁に囲まれていた。
かって…支えにして、つっぱりにして。
稲鶏だの〜…いずれも鳥の名とされるが詳細不明。
『鬼おどし』〜…鬼おどし・観音さまの手、ともに貝がらの名とされるが詳細不明。

確認テスト　本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線①「西瓜の番」とあるが、これはどのようなことをするのか。適当なものを選びなさい。

ア　泥棒が西瓜を取って食べないように番をする。
イ　あな熊などが西瓜をかじらないように番をする。
ウ　果物屋に売られている西瓜を見張る番をする。

〔　　〕

(2) ――線②「果物屋に売っているものとばかり思っていた」とあるが、これはどういうことを表しているか。適当なものを選びなさい。

ア　西瓜は果物屋に売られているものだと勘違い（かんちがい）していたということ。
イ　果物屋に売られていなかったので、西瓜を知らなかったということ。
ウ　西瓜を果物屋に売っているものとしてしか見ていなかったということ。

〔　　〕

(3) ――線③「私の遊び仲間とは大ちがいだ」とあるが、どのように違うのか。適当なものを選びなさい。

ア　閏土が珍しいことをよく知っているのに対し、「私」や「私」の遊び仲間は狭（せま）い世界のことしか知らない。
イ　閏土や「私」の遊び仲間がいろいろなものごとに詳（くわ）しいのに対し、「私」はものごとの経験が少ない。
ウ　閏土や「私」が裕福（ゆうふく）な暮らしをしているのに対し、「私」の遊び仲間は経済的なゆとりがない。

〔　　〕

故郷（4）

（「私」は自宅で甥（おい）の話し相手をしていました。）

「まあまあ、こんなになって、ひげをこんなに生やして」不意にかん高い声がひびいた。

びっくりして頭をあげてみると、私の前には、頬骨（ほおぼね）の出た、唇（くちびる）のうすい、五十がらみの女が立っていた。両手を腰（こし）にあてがい、※スカートをはかないズボン姿で足を開いて立ったところは、まるで製図用の脚（あし）の細いコンパスそっくりだった。

私はドキンとした。

「忘れたかね？ よく抱（だ）っこしてあげたものだが」

①ますますドキンとした。さいわい、母があらわれて口添（ぞ）えしてくれた。

「ながいこと家にいなかったから、見忘れてしまってね。おまえ、おぼえているだろ」と私に向（むか）って「ほら、筋むかいの楊（ヤン）おばさん……豆（とう）腐（ふ）屋の」

そうそう、思い出した。そういえば子どものころ、筋むかいの豆腐屋に、楊おばさんという人が一日じゅう坐（すわ）っていて、「※豆腐屋小町（こまち）」と呼ばれていたっけ。しかし、その人なら白粉（おしろい）を塗（ぬ）っていたし、頬骨もこんなに出ていないし、唇もこんなにうすくはなかったはずだ。それに一日じゅう坐っていたのだから、こんなコンパスのような姿勢は、見ようにも見られなかった。そのころ噂（うわさ）では、かの女のお蔭（かげ）で豆腐屋は商売繁昌（はんじょう）だとされた。たぶん年齢（ねんれい）のせいだろうか、私はそういうことにさっぱり関心がなかった。そのため見忘れてしまったのである。

（中略）

「忘れたのかい？ なにしろ身分のあるお方は②眼（め）が上を向いているからね……」

「そんな訳じゃないよ……ぼくは……」私はどぎまぎして、立ちあがった。

「それならね、お聞きなさいよ、迅（シュン）ちゃん。あんた、金持ちになったんでしょ。持ち運びだって、重くて不便ですよ。こんなガラクタ道具、じゃまだから、あたしにくれてしまいなさいよ。あたしたち貧乏（びんぼう）人には、けっこう役に立ちますからね」

「ぼくは金持ちじゃないよ。これを売って、その金で……」

「おやおや、まあまあ、知事さまになっても金持ちじゃない？ げんにお妾（めかけ）が三人もいて、お出ましは八人かきの轎（かご）で、それでも金持ちじゃない？ フン、だまそうたって、そうはいきませんよ」

返事のしようがないので、私は口を閉じたまま立っていた。

「ああ、ああ、金がたまれば財布（さいふ）のひもをしめる。財布のひもをしめるからまたたまる……」コンパスは、ふくれっつらで背を向けると、ぶつぶつ言いながら、ゆっくりした足どりで出ていった。行きがけの駄賃（だちん）に母の手袋（てぶくろ）をズボンの下へねじこんで。

（竹内好訳『魯迅文集Ⅰ』筑摩書房　所収「故郷」による。一部表記を変えた箇所がある）

※スカートを～……当時の中国の女性はズボンの上にひだのあるスカートを着けていたが、労働の際にはこのスカートをとった。

豆腐屋小町……原文の豆腐西施を訳したもの。西施は古代中国の女性で美人のたとえ。ここでは日本で美人のたとえとされる小野小町を当てている。

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ——線①「ますますドキンとした」のはなぜか。適当なものを選びなさい。

ア ひさびさに会った楊おばさんが、子どものころとはずいぶん違って（ちが）いたから。

イ 見知っているような口ぶりで声をかけられたが、相手が誰（だれ）だかわからなかったから。

ウ 自分が金持ちであると嫌味（いやみ）を言われ、返事のしようがなかったから。

〔　　〕

(2) ——線②「眼が上を向いている」とはここではどういうことを表しているか。適当なものを選びなさい。

ア お金のことばかり考えているということ。

イ 身分がある人の言いなりになるということ。

ウ 身分が低いものを気にかけないということ。

〔　　〕

(3) 本文の内容に合うものを選びなさい。

ア 昔と同じコンパスのような楊おばさんの姿勢を見て、「私」は楊おばさんのことを思い出した。

イ 金持ちであることを否定する「私」に、楊おばさんは非難するような口ぶりで言い返した。

ウ 道具をくれるよう求められた「私」は、楊おばさんの帰り際（ぎわ）に、母の手袋を手渡（てわた）した。

〔　　〕

故郷（5）

　ある寒い日の午後、私は食後の茶でくつろいでいた。表に人の気配がしたので、ふり向いてみた。思わずアッと声が出かかった。いそいで立ちあがって迎（むか）えた。

　来た客は閏土（ルントー）である。ひと目で閏土とわかったものの、その閏土は、①私の記憶（きおく）にある閏土とは似もつかなかった。背丈（せたけ）は倍ほどになり、昔のつやのいい丸顔は、いまでは黄ばんだ色に変（かわ）り、しかも深い皺（しわ）がたたまれていた。眼（め）も、かれの父親がそうであったように、まわりが赤くはれている。私は知っている。海辺で耕作するものは、一日じゅう潮風に吹（ふ）かれるせいで、よくこうなる。頭には古ぼけた毛織りの帽子（ぼうし）、身には薄手（うすで）の綿入れ一枚、全身ぶるぶるふるえている。紙包みと長いきせるを手にさげている。その手も、私の記憶にある血色のいい、まるまるした手ではなく、太い、節くれ立った、しかもひび割れた、松の幹のような手である。

　私は感激で胸がいっぱいになり、しかしどう口をきいたものやら思案がつかぬままに、ひとこと、

「ああ閏（ルン）ちゃん――よく来たね……」

　つづいて言いたいことが、あとからあとから、数珠（じゅず）つなぎになって出かかった。角鶏（チアオチー）、跳（は）ね魚、貝がら、猹（チャー）……だがそれらは、何かでせきとめられたように、頭のなかをかけめぐるだけで、口からは出なかった。

　かれはつっ立ったままだった。喜びと寂（さび）しさの色が顔にあらわれた。唇（くちびる）が動いたが、声にはならなかった。最後に、②うやうやしい態度に変って、はっきりこう言った。

「旦那（だんな）さま！……」

　③私は身ぶるいしたらしかった。悲しむべき厚い壁（かべ）が、ふたりの間を距（へだ）ててしまったのを感じた。私は口がきけなかった。

　かれはうしろを向いて、「水生（シュイション）、旦那さまにお辞儀（じぎ）しな」と言って、かれの背に隠（かく）れていた子どもを前へ出した。これぞまさしく三十年前の閏土であった。いくらか痩（や）せて、顔色が悪く、銀の首輪もしていない違（ちが）いはあるけれども。「これが五番目の子でございます。世間へ出さぬものですから、おどおどしておりまして……」

（竹内好訳『魯迅文集Ⅰ』筑摩書房　所収「故郷」による。
一部表記を変えた箇所がある）

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線①「私の記憶にある閏土とは似もつかなかった」について、次の各選択肢を、『私』の記憶にある閏土」と、「現在の閏土」に分け、記号で答えなさい。

ア 顔はつやのいい丸顔である。
イ 顔には深い皺がある。
ウ 眼のまわりが赤くはれている。
エ 手は血色がよく、まるまるしている。
オ 手は太く、節くれ立ち、ひび割れている。

「私」の記憶にある閏土［　　］
現在の閏土［　　］

(2) ――線②「うやうやしい」の意味を選びなさい。

ア 親しみがあり、誠実なさま。
イ 遠慮がなく、ぶしつけなさま。
ウ 若くて、物事に慣れていないさま。
エ 相手を敬い、丁重にふるまうさま。

［　　］

(3) ――線③「私は身ぶるいしたらしかった」とあるが、このときの「私」について正しく述べているものを選びなさい。

ア 身分や境遇の違いの中で自分と閏土が隔てられてしまったことに強い衝撃を受けている。
イ 思いがけない閏土の言い方によって、自分と閏土の立場の違いを思い出している。
ウ 閏土が自分の記憶にある姿と異なることに驚き、時間の流れを改めて感じている。

［　　］

故郷 (6)

母と宏児(ホンル)が二階からおりてきた。話し声を聞きつけたのだろう。

「ご隠居(いんきょ)さま、お手紙は早くに頂きました。まったく、うれしくてたまりませんでした、旦那(だんな)さまがお帰りになると聞きまして……」と閏土(ルントー)は言った。

「まあ、①何だってそんな、他人行儀(ぎょうぎ)にするんだね。おまえたち、むかしは兄弟の仲じゃないか。むかしのように、②迅(シュン)ちゃん、でいいんだよ」と母は、うれしそうに言った。

「めっそうな、ご隠居さま、なんとも……とんでもないことでございます。あのころは子どもで、なんのわきまえもなく……」そしてまたも水生(シュイション)を前に出してお辞儀(じぎ)させようとしたが、子どもははにかんで、父親の背にしがみついたままだった。

「これが水生？　五番目だね。知らない人ばかりだから、はにかむのも無理ない。宏児や、あちらでいっしょに遊んでおやり」と母は言った。

言われて宏児は、水生をさそい、水生もうれしそうに、そろって出ていった。母は閏土に席をすすめた。かれはしばらくためらったあと、ようやく腰(こし)をおろした。長ぎせるをテーブルに立てかけて、紙包みをさし出した。

「冬場は、ろくなものがございません。少しばかり、青豆の乾(ほ)したのですが、自分とこのですから、どうか旦那さまに……」

私は、暮らし向きについて訊(たず)ねた。かれは首を振(ふ)るばかりだった。

「とてもとても。今では六番目の子も役に立ちますが、それでも追っつけません……世間は物騒(ぶっそう)だし……どっちを向いても金は取られ放題、きまりも何も……作柄(さくがら)もよくございません。作ったものを売りに行けば、何度も税金を取られて、※元は切れるし、そうかといって売らなければ、腐(くさ)らせるばかりで……」

首を振りどおしである。顔にはたくさんの皺(しわ)がたたまれているが、まるで石像のように、その皺は少しも動かなかった。苦しみを感じはしても、それを言いあらわすすべがないように、しばらく沈黙(ちんもく)し、それからきせるを取りあげて、黙々(もくもく)とたばこをふかした。

母が都合をきくと、家に用が多いから、あすは帰らねばならぬという。それに昼飯もまだというので、自分で台所へ行って、飯をいためて食べるようにすすめた。

かれが出ていったあと、③母と私とはかれの境遇(きょうぐう)を思ってため息をついた。子だくさん、凶作(きょうさく)、重い税金、兵隊、※匪賊(ひぞく)、役人、地主、みんなよってたかってかれをいじめて、デクノボーみたいな人間にしてしまったのだ。母は、持っていかぬ品物はみんなくれてやろう、好きなように選ばせよう、と私に言った。

午後、かれは品物を選び出した。長テーブル二個、椅子(いす)四脚(きゃく)、※香炉(こうろ)と燭台(しょくだい)ひと組、大秤(おおばかり)一本。そのほか藁灰(わらばい)もみんな欲しいといった。

（竹内好訳『魯迅文集Ⅰ』筑摩書房　所収「故郷」による。
一部表記を変えた箇所がある）

※元は切れる…売値が原価を下まわること。　匪賊…集団で略奪を行う盗賊。
香炉と燭台…香をたくための器とろうそくの台。いずれも祭具。

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線①「何だってそんな、他人行儀にするんだね」とあるが、閏土はなぜこのような態度をとっているのか。最も適当なものを選びなさい。

ア 身分や立場の違いをわきまえるべきだと考えているから。
イ 「私」に長く会わなかったので、距離を感じているから。
ウ 子どものころからの親しみを礼儀で示そうとしているから。

〔　〕

(2) ――線②「迅ちゃん」とあるが、閏土はこの人物のことを何と呼んでいるか。適当なものを選びなさい。

ア ご隠居さま　**イ** 旦那さま　**ウ** 水生

〔　〕

(3) ――線③「母と私とはかれの境遇を思ってため息をついた」とあるが、このときの母と「私」の様子として適当なものを選びなさい。

ア 昔と違って閏土の口数が少ないことをいぶかしく思っている。
イ 閏土の暮らし向きが苦しいものであることをなげいている。
ウ 世間が物騒でつらいものであることに怒りをいだいている。

〔　〕

(4) かつての「私」と閏土の関係を表す言葉を本文中から四字で探し、書きぬきなさい。

□□□□

(5) 本文中には、宏児と水生が、かつての「私」と閏土のようにすぐに仲よくなることが読み取れる一文がある。その文の最初の三字を答えなさい。

□□□

故郷 (7)

(閏土と再会した数日後、「私」たちは故郷から旅立ちました。)

船はひたすら前進した。両岸の緑の山々は、たそがれのなかでうす墨色に変り、つぎつぎと船尾に消えた。

私といっしょに窓辺にもたれて、暮れてゆく外の景色を眺めていた宏児が、ふと問いかけた。

「おじさん、ぼくたち、いつ帰って来るの?」

「帰って来る? どうしてまた、行きもしないうちに、帰るなんて考えたんだい?」

「だって、水生がぼくに、家へ遊びに来いって」

大きな黒い眼を見はって、かれはじっと考えこんでいた。

私も、私の母も、はっと胸をつかれた。(中略)

古い家はますます遠くなり、故郷の山や水もますます遠くなる。だが名残り惜しい気はしない。自分のまわりに眼に見えぬ高い壁があって、そのなかに自分だけ取り残されたように、気がめいるだけである。西瓜畑の銀の首輪の小英雄のおもかげは、もとは鮮明このうえなかったのが、今では急にぼんやりしてしまった。これもたまらなく悲しい。

母と宏児とは寝入った。

私も横になって、船の底に水のぶつかる音をききながら、いま自分は、自分の道を歩いているとわかった。思えば私と閏土との距離はまったく遠くなったが、若い世代はいまでも心がかよい合い、げんに宏児は水生のことを慕っている。せめてかれらだけは、私とちがって、たがいに隔絶することのないように……とはいっても、かれらがひとつ心でいたいがために、私のように、むだの積みかさねで魂をすりへらす生活を共にすることは願わない。また閏土のように、打ちひしがれて心が麻痺する生活を共にすることも願わない。また他の人のように、やけをおこして野放図に走る生活を共にすることも願わない。希望をいえば、かれらは新しい生活をもたなくてはならない。①私たちの経験しなかった新しい生活を。

希望という考えがうかんだので、②私はどきっとした。たしか閏土が香炉と燭台を所望したとき、私は相変らずの偶像崇拝だな、いつになったら忘れるつもりかと、心ひそかにかれのことを笑ったものだが、いま私のいう希望も、やはり手製の偶像に過ぎぬのではないか。ただかれの望むものはすぐ手に入り、私の望むものは手に入りにくいだけだ。

まどろみかけた私の眼に、海辺の広い緑の砂地がうかんでくる。その上の紺碧の空には、金色の丸い月がかかっている。思うに希望とは、もともとあるものともいえぬし、ないものともいえない。③それは地上の道のようなものである。もともと地上には道はない。歩く人が多くなれば、それが道になるのだ。

(竹内好訳『魯迅文集Ⅰ』筑摩書房 所収「故郷」による。一部表記を変えた箇所がある)

時代背景

『故郷』では古い時代の風習が象徴的に登場し、語り手の「私」を通して社会に対する批判や新しい時代への希望が訴えられている。ここには、作品が発表された当時の社会に対する魯迅の思いが反映されている。

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線①「私たちの経験しなかった新しい生活」とあるが、これに対して、「私」の世代が経験した生活を、本文中から十五字以上二十字以内で三つ探し、それぞれ最初の三字を答えなさい。

(2) ――線②「私はどきっとした」とあるが、「私」は何に気付いてこのように感じたのか。適当なものを選びなさい。

ア 私が思う希望というものは、地上の道のようなものではないかということ。

イ 閏土が香炉と燭台で偶像崇拝をするのを、心の中でひそかに笑っていたこと。

ウ 若い世代に新しい生活を望むのは、偶像崇拝と変わらないのではないかということ。

エ 私が望むものより閏土が望むもののほうがすぐに手に入るので、笑うのはおかしいということ。

〔　〕

(3) ――線③「地上の道のようなものである」とあるが、これはどういうことを表しているか。最も適当なものを選びなさい。

ア もともと地上には道がないように、実際には存在しないものだということ。

イ 同じ願いのもとに進む人が増えれば、確かなものになるのだということ。

ウ 具体的な道筋を示さなければ、行動する人は増えないのだということ。

〔　〕

自由と不自由 (1)

（次の文章は、筆者が大学の授業で行った課題について述べたものです。筆者は芸術を生み出す心について研究しており、あるとき学生に新聞紙と雑誌だけでちぎり絵をつくる課題を出しました。）

最初は、材料だけを制限して、テーマは「自由」に設定していた。でもそうすると、※大学生でもキャラクターものが多くなる。そこで、テーマにも枠(わく)を与(あた)えることにした。※モチーフは植物に限定する。それも「もしも自分が植物だったら、こんな植物」という※むちゃぶりだ。すぐに好きな植物が思い浮(う)かび、図鑑(ずかん)などで形を確認(かくにん)しながら制作に入った学生もいたが、なんとなく好きな色を集めているうちに形になった、という学生もいた。ヒマワリ、ユリ、バラなどの花をはじめ、さまざまな種類の草花、木、食虫植物、海藻(かいそう)、くだものに野菜、想像上の植物も出てきた。

できあがった作品を廊下(ろうか)に展示した。自画像は、自分がさらされるようで気恥(は)ずかしいものだが、身代わりの植物ならあまり恥ずかしくない。でも、その人らしさは、植物の種類だけでなく、ちぎり方にも表れていた。几帳面(きちょうめん)にちぎって細部まで表現したものがあれば、大胆(だいたん)にちぎって、もとの写真や文字を※テクスチャとして活(い)かした※コラージュ風のものもあった。

こうして課題を試(ため)すうちに、案外、枠を与えた方が学生もやる気を出すことがわかって、調子にのって無理難題を考えるようになった。限られた材料や、むちゃぶりテーマだと、上手(じょうず)・下手(へた)の問題よりも、アイデアや工夫(くふう)の力がものをいう。

逆説的だが、不自由な方が自由になれるのかもしれない。すべてが自由だといわれると、無重量空間にぽんと放り出されたような不安な気分になる。でもそこに枠があると、とっかかりができる。こわしやすい簡単な枠があれば、思いきり枠をこわせるのだ。そうして枠をこわすのが気持ちいいのは、こわすという行為(こうい)のなかに「自由」を感じるからなのではないか。

（齋藤亜矢『ルビンのツボ――芸術する体と心』岩波書店　所収
「自由と不自由」による）

※大学生でも～…この授業でテーマを自由に設定したところ、キャラクターもののちぎり絵ばかりになってしまった。
モチーフ…ここでは、主題を構成するもの。　むちゃぶり…無理難題を投げかけること。
テクスチャ…表面の質感。
コラージュ…画面をさまざまなものの切り貼りで構成した芸術作品。

確認テスト　本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) 本文中には、筆者の経験したことと、経験をもとに筆者が考えたことが記されている。筆者が考えたことが中心に述べられている段落を探し、その最初の三字を答えなさい。

□□□

(2) 筆者が大学の授業で行った課題について、本文の内容に合うものを選びなさい。

ア 筆者は最初、ちぎり絵の材料を制限していたが、学生のアイデアを引き出すために材料を自由にした。

イ モチーフを植物に限定したところ、できあがったちぎり絵は、その人らしさがないものになった。

ウ 授業で行った課題を通して、何かしらの枠が設定されているほうが学生はやる気になることがわかった。

〔　　〕

(3) 筆者の考えに合うものを選びなさい。

ア 枠という制限があることで、かえってその枠をこわし、自由になれることがある。

イ 自由というものは不安な気分をおこさせるものなので、人は常に枠を守っているべきである。

ウ こわすという行為のなかにこそ自由があり、枠のように不自由なものを設定すべきではない。

〔　　〕

自由と不自由 (2)

　ジャズのセッションでは、基本の形をアレンジして順番に演奏する。一度うまくいっても決してそれを定型化しないのだそうだ。つねに形をこわすことで、未知との出会いを求める。ほんものの音楽は神様が降臨するようなものなのだという。

　つまり毎回が枠をこわす挑戦だ。でもそうやって自由に演奏できるのは、お互いが基本ルールや※コードを共有しているからでもある。この場合もまた別の意味で、①枠があるからこそ、安心して枠をこわすことができるのだろう。

　そして、②枠には伝統の枠もある。学生のころに聞いた能楽師の片山清司（現・十世片山九郎右衛門）さんの講演が印象的だった。能の稽古では、とにかく型を覚えなくてはならない。他人の轍を踏むことを強いられるのは、とても苦しい。しかし、世阿弥に「※稽古は強かれ、情識はなかれ」という言葉がある（『風姿花伝』）。いかに自分をゼロにして吸収できるか。そして、自分のイメージを排することではじめて得られるものがある。不自由のなかの自由にこそ、喜びや創造性がある。

　そんなお話だった。つまり、自分独自の表現などと考えるよりも、まずはきっちり枠を身につけることが肝心だ。そのうえで身についた枠を破るとき、はじめて創造がある、ということ。日本の武道や芸能の修業には「守破離」という言葉がある。守る、破る、そして離れる、だから、さらにその先に、枠を意識しないぐらいの究める境地があるのかもしれない。

　考えてみると、わたしたちは知らず知らずのうちに、たくさんの枠に囲まれて暮らしている。所属する社会の常識、学校で教えられた知識、生まれた時代の価値観、既成概念、自分の癖や思考パターン。もちろん、そうした枠があるおかげで、効率よく、しかも安心して社会生活がいとなめる。

　でも、枠のなかだけで過ごしていたら息苦しくなる。そして枠がつねに正しいとも限らない。

　そんなときこそアートだ、と思う。アートには、枠をこわして、新たな価値や新たな物の見え方に気づかせてくれる力がある。それは枠の外にいるだれかに暴力を向けるようなものではない。自分自身がとらわれている枠に気づき、それを内側からこわす力をひきだしてくれるもののような気がしている。

　ほんとうの自由とは、あらかじめ与えられた状態のことではなく、自分で枠をこわす※プロセスにこそあるのではないか。

（齋藤亜矢『ルビンのツボ――芸術する体と心』岩波書店　所収
「自由と不自由」による）

※コード…和音。ここではジャズの基本となるコード。
稽古は〜…稽古に対しては厳しくあれ、慢心による強情さや頑固さはあってはならない。
プロセス…過程。

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線①「枠があるからこそ、安心して枠をこわすことができる」とあるが、ジャズのセッションで枠に当たるものは何か。最も適当なものを選びなさい。

ア 基本の形をアレンジして演奏すること。
イ 演奏を定型化せず、形をこわすこと。
ウ 枠をこわし、自由に演奏しようとする挑戦。
エ お互いに共有された基本ルールやコード。

〔　　〕

(2) ――線②「枠には伝統の枠もある」とあるが、能における枠の例として挙げられているものは何か。本文中から漢字一字で書きぬきなさい。

〔　　〕

(3) 筆者の考えに当てはまらないものを選びなさい。

ア さまざまな枠があるおかげで、効率よく社会生活をおくることができるという面がある。
イ アートには、自分がとらわれている枠を認識(にんしき)させ、新たな物の見え方に気づかせる力がある。
ウ ほんとうの自由とは、社会の常識や価値観、既成概念といった枠のなかで過ごすことである。

〔　　〕

みち

山には鹿の道、野には兎の道、畑にはもぐらの道、台所にはねずみの道がある。

とにかく何かが、誰かが歩いて行ったあとに道があるので、①行ったということが先で、道はあとだろう。

行く——は足を動かしてからだを前進させることだ。健康にとっては歩いて行くことなど何の苦労もいらないことだが、もしかりに草茫々の野原へいきなり置かれたとする。太陽は高いし、あちらに村の屋根は見えているし、毒虫がいるわけではなし、——なんだ、こんな草っ原、となんでもなく思うけれど、それが思いのほかというもので、足は草にからまれ、眼は草の下の土の凹凸を測れず、かなり疲労するのである。どんな小さな行為でも、行為に疲労はつきものだが、はじめに一歩を踏みだした人は、もっと大きい疲労を仕払う。そしてかすかな足跡がのこる。まず行って、そのあとが道になるのだから、②道は大勢の行った人の疲労をもって※贖われたものと言っていいかもしれぬ。

飛行機から見ると、道路はじつにはっきりと筋になって見える。地図で見る道と同じことだが、実物を縮尺で見るのだから感情がある。うねうねに、真直に、太く細く、よくもこんなにたくさんつけた道かと※感歎するが、さらにこの道を踏み固めたであろう数知らぬ自分たちの先祖のことを思うと、眼の下の道々は浮きあがってはっきりと見える。道というものには、前に希望、うしろに哀愁がある。

昨年北海道へ行って、昼間の汽車で根室へ向っていた。窓外は北海道特有の深い林が鮮明な紅葉をしていて、もったいない豪華な道であるかと思うと、たちまち一変して荒涼と、葦ばかりの原野の道となる。原野が尽きるとまた山の裾へかかる。その一ツの上り勾配の、人気もない道でトラックがとまり、運転手と助手だろう、二人きりで応急の道路修理をしていた。そのへんから伐ったらしい落葉松を敷き並べているのだが、落葉松の枝は金色に※もみじしていて、まっくろな崩れ土の上になまなまと横わっていた。一瞬に過ぎた風景だが印象に厚い。道も人も落葉松もあの人気のなさも。——

東京はそろそろ土がおちつく。私は焼跡の家に住んでもう十一年、毎年この季節には、霜で浮いた小石や瓦を庭土から拾い集める。その棄て場に困る。ふと考えて、瓦は※五分角ほどに砕き、小石と若干の土とをいっしょにうちの前の舗装道路のこわれ穴を丁寧に埋めた。小さいが善いことをしたという満足があった。自動車が来た。まったく案外だった。速力のある強靱なタイヤは、いっぺんに私の瓦と石と土を弾き飛ばして、※充塡を半分にへらして去った。

ふと考えたことぐらいでは、道は穴一ツ埋められない。③まず行く労苦も仕払わないし、穴埋めも※みんごと弾きかえされたなあ、と思う。

（幸田文『雀の手帖』新潮社 所収「みち」による）

※贖われた…ここでは何かを代償に得られたということ。　感歎…感心してほめること。
もみじして…紅葉して　五分…一寸（約三センチメートル）の半分。
充塡…あいた部分に何かをつめてふさぐこと。　みんごと…見事を強めた言い方。

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線①「行ったということが先で、道はあとだろう」とあるが、この箇所（かしょ）が表す内容として適当なものを選びなさい。

ア どこかに行くということが重要であって、どの道を通るかは重要ではないということ。

イ そこを通っていくことができる場所こそが、道ということができるのだということ。

ウ 道というものは、何か、誰かが行くという行為をしたあとにできるものだということ。

〔　　〕

(2) ――線②「道は……贖われたもの」とあるが、ここで筆者が述べようとしている内容として適当なものを選びなさい。

ア 道の中には、歩く人を疲労させるものもあるのだということ。

イ 道ができるまでには、先人たちの労苦があるのだということ。

ウ 道を楽に通るためには、十分な準備が必要だということ。

〔　　〕

(3) ――線③「まず行く労苦も……弾きかえされたなあ」とあるが、これは誰に向けられた思いか。適当なものを選びなさい。

ア 北海道で道路を二人きりで修理していた運転手と助手。

イ 筆者が埋めた瓦や石、土を弾き飛ばした自動車の運転手。

ウ 道路のこわれ穴を埋めることができなかった筆者自身。

〔　　〕

［メモ］

［メモ］

写真　アフロ

参考文献　小学館『新編 日本古典文学全集』

©RECRUIT
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。